

地方道路交付金業務（主）川上佐久線
埋蔵文化財発掘調査報告書

— 白田町内 —

からまつ
唐松B遺跡

2005.3

長野県白田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

地方道路交付金業務（主）川上佐久線
埋蔵文化財発掘調査報告書

— 白田町内 —

からまつ
唐松B遺跡

2005.3

長野県白田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



唐松B遺跡 遠景



陥し穴の配列 (人の入っている穴が陥し穴)

序

本書は、地方道路交付金業務（主）川上佐久線建設工事に伴い実施された唐松B遺跡の発掘調査報告書です。報告書は発掘調査の成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的としています。

唐松B遺跡が位置する白田町は、川上村に源を発し日本海に注ぐ千曲川が中央を縦断しています。低地を悠々と流れ、この地域に景観と恵みを与える千曲川の重要性は時代を越えて受け継がれています。千曲川右岸を南北に走る川上佐久線は、佐久甲州街道を踏襲した左岸の国道141号線とともに当地域の主要な幹線道路で、その重要性は年を経るごとに高まっています。地域の利便性をさらに向上させるため川上佐久線の新規道路整備が計画され、唐松B遺跡内で建設されることとなりました。

本遺跡は、曾原川と抜井川が合流する地点、千曲川を眼前に望む景勝な段丘上に立地しています。この段丘上には、縄文時代には集落や狩猟域、弥生時代には墓域、平安時代には集落域というように時代を越えて、小規模ながらも人びとの営みの痕跡が残されていました。調査成果の詳細は本書をご覧くださいと思いますが、今回の発掘調査で縄文時代から平安時代以降に至る幅広い時代の遺構・遺物が発見されました。今まで発掘されることがなく、時代や性格が不明であった唐松B遺跡のはほぼ全容を捉えることができたと考えております。特に堅穴住居跡と貯蔵穴で構成される縄文時代中期後葉の集落は南佐久郡北部初の事例となりました。発掘で得られた成果が、地域の歴史を解き明かすために永く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘作業から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた県白田建設事務所、白田町、白田町教育委員会などの関係機関、地元的地権者や関係者の方がたに深甚なる謝意を申し上げます。

平成17年3月4日

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 小 沢 将 夫

例 言

- 1 本書は長野県白田建設事務所による地方道路交付金業務（主）川上佐久親建設工事に伴う南佐久郡白田町唐松 B 遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成15年度の発掘作業は、国補緊急地方道路整備 B 業務として実施した。
- 2 発掘調査及び整理作業は、長野県白田建設事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）が実施したものである。
- 3 遺跡の概要は埋文センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報20』で紹介しているが、本書をもって最終報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、白田町役場作成の白田町計画基本図（1：2,500）、白田町全図（1：25,000）、白田町教育委員会作成の白田町遺跡分布図（1：25,000）、佐久町教育委員会作成の佐久町遺跡分布図（1：25,000）、国土交通省国土地理院発行の地形図「小諸」「御代田」「蓼科山」「十石峠」（1：50,000）などをもとに作成した。
- 5 測量基準点設定、単点測量及び航空写真撮影は、新日本航業株式会社に委託した。なお、測量は日本測地系（旧測地系）に基づき実施した。
- 6 炭化物等の放射性炭素年代測定及び樹種同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 7 石器の実測は、株式会社アルカに委託した。
- 8 本書は河西克造が執筆した。また、第5章第1節・2節はバリノ・サーヴェイ株式会社の報告を河西克造が編集した。
- 9 本書の編集は調査研究員河西克造が行い、調査部長市澤英利と調査第2課長平林 彰が校閲した。
- 10 石器の石材鑑定は、信州大学理学部教授原山 智氏にお願いした。
- 11 縄文中期後葉の土器については、長野県立歴史館川崎 保学芸員に助言いただいた。
- 12 調査記録および出土遺物は、本書刊行後に白田町教育委員会に移管する。

凡 例

- 遺構番号は発掘調査時の番号を使用した。整理時の検討で欠番としたものがある。遺構図と遺物図は基本的に遺構単位に掲載し、遺物番号は遺構単位の通し番号となっている。ただし、陥し穴、貯蔵穴、その他の土坑については、遺構図、遺物図とも各々一括して掲載した。
- 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。ただし地形図、調査範囲図、遺構配置図などは任意である。
 - 主な遺構実測図
 竪穴住居跡、掘立柱建物跡 1 : 60 住居内施設 (炉)、カマド 1 : 30
 土坑 1 : 40 陥し穴 1 : 60
 - 主な遺物実測図
 器形復元した縄文土器中期・後期土器、平安土器 1 : 4 器形復元した弥生土器 1 : 3
 縄文中期・後期土器、弥生土器、平安土器拓影 1 : 3
 縄文石器 (石鏃、剥片、石核等) 2 : 3 打製石斧、剥片 1 : 3 蔽石 1 : 3
- 遺物写真の縮尺は以下の通りである。
 縄文土器、弥生土器、平安土器 1 : 3
 縄文石器 (石鏃・石核・剥片) 1 : 1 打製石斧、剥片、蔽石 1 : 3
- 竪穴住居跡個別遺構図に掲載した遺物の縮尺は 1 : 6 ~ 1 : 10 である。
- 個別遺構の実測図では、新旧関係のあるものも完掘状態で示した。
- 竪穴住居跡の床面積は、上端を基準としてプランメーターで計測した。
- 実測図中のスクリーントーン等は下記の通りに用いた。

1) 遺構図



2) 遺構図 (土器)



- 平安土器の暗文は、スクリーントーンを変えて新旧関係を示した。
- 石器の自然面は点描で示した。

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

本文目次

挿図・表目次

第1章 序説

第1節 保護協議から本調査に至るまで	1
1 保護協議	
2 発掘届と発掘の指示	
3 受委託契約	
第2節 発掘作業	2
1 体制と経過	
2 調査範囲と調査区	
3 検出面の設定と遺構の調査	
4 旧石器の確認調査	
5 記録の方法	
6 普及公開	
第3節 整理作業	8
1 整理作業の体制	
2 遺構の確定	
3 遺物整理の方法	
4 図面と写真等の記録整理方法	
5 報告書の作成	

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質的環境	10
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	12

第3章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概観	18
第2節 基本層序	20

第4章 各時代の遺構と遺物

第1節 縄文時代	23
1 竪穴住居跡と出土遺物	
2 陥し穴と出土遺物	
3 その他の土坑と出土遺物	
4 遺構外から出土した遺物	

第2節	弥生時代	55
1	土坑と出土遺物	
2	遺構外から出土した遺物	
第3節	平安時代以降	57
1	竪穴住居跡と出土遺物	
2	掘立柱建物跡	
3	遺構外から出土した遺物	
第5章 自然科学分析		
第1節	放射性炭素年代測定	62
1	試料の内容	
2	分析の方法	
3	分析の結果	
4	炭化物の年代に関わる考察	
第2節	樹種同定	65
1	試料の内容	
2	同定の方法	
3	同定の結果	
4	木材利用に関わる考察	
第3節	発掘所見と科学分析結果の検討	67
1	放射性炭素年代測定結果について	
2	樹種同定結果について	
第6章 成果と課題		
第1節	縄文時代中期後葉の集落について	68
第2節	陥し穴について	71
1	陥し穴の分類	
2	陥し穴の年代	
3	陥し穴の配列	
4	集落との関係	
第3節	弥生時代前期末～中期初頭の土器について	76
第7章 結語		
付表		81
報告書抄録		

挿図・表目次

第1章	第4図	唐松B遺跡の位置	
第1図	唐松B遺跡の調査範囲図	第5図	遺跡周辺の地質図
第2図	ローム層河掘り範囲図	第6図	唐松B遺跡周辺の遺跡分布図
第3図	地区設定図	第3章	
第2章	第7図	縄文時代以降の遺跡分布図	

第8回 基本土層

第4章

第9回 SB01実測図・出土遺物

第10回 SB02実測図

第11回 SB02遺物出土状況

第12回 SB02出土遺物

第13回 SB03実測図・出土遺物

第14回 SB06実測図

第15回 SB06B実測図

第16回 SB06出土遺物

第17回 陥し穴実測図1

第18回 陥し穴実測図2

第19回 土坑・貯蔵穴実測図1

第20回 土坑・貯蔵穴実測図2

第21回 土坑・貯蔵穴実測図3

第22回 陥し穴・土坑・貯蔵穴出土遺物1

第23回 陥し穴・土坑・貯蔵穴出土遺物2

第24回 遺構外出土土器

第25回 遺構外出土石器

第26回 SK01・02実測図・出土遺物

第27回 SB04・05実測図

第28回 SB04・05オマド実測図

第29回 SD04・05出土遺物

第30回 ST01実測図

第5章

第31回 炭化材の組織顕微鏡写真

第6章

第32回 縄文中期後葉の集落景観

第33回 縄文時代中期後葉の集落想定図

第34回 陥し穴の分類模式図

第35回 陥し穴の分類

第36回 後平遺跡の陥し穴

第37回 ジャコッパ遺跡 植物遺体出土状況

第38回 陥し穴の配列

第39回 南佐久郡出土の弥生前期末～中期初頭の土器

第40回 弥生前期末～中期初頭の土器出土遺跡

第2章

第1表 ハッ岳山麓の第四紀層序表

第2表 遺跡地名表

第5章

第3表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

第4表 暦年代校正結果



発掘調査前の唐松B遺跡

第1章 序 説

第1節 保護協議から本調査に至るまで

1 保護協議

県教育委員会が6月18日付14教文第204号で白田建設事務所に対して行った平成14年度の公共事業照会に対して、建設事務所は県道川上佐久線建設事業を計画している旨の回答を行った。この回答に対して、白田町教育委員会は、当該事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（唐松B遺跡）があるため、その保護措置について県教育委員会を交えて協議を希望する旨の意見を寄せてきた。

県教育委員会は、平成15年1月9日に白田建設事務所、白田町教育委員会及び埋文センターを交えた保護協議を行い、事業の公共性から判断して遺跡の記録保存を行うこととした上で、次の事項について確認を行った。

- ・ 発掘調査は、白田建設事務所が埋文センターへ委託して行うこと。
- ・ 平成15年度に発掘作業、平成16年度に整理作業を行い、発掘調査報告書は平成16年度中に印刷刊行すること。
- ・ 出土品及び諸記録は、報告書刊行後、白田町が保管・管理すること。

2 発掘届と発掘の指示

平成15年1月28日付14白建第508号で白田建設事務所長から通知のあった周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、県教育委員会教育長が同年2月7日付14教文第18-198号で、記録の作成のための発掘調査を埋文センターに委託の上実施する旨の通知を行ったことにより、県道川上佐久線建設事業に係る白田町唐松B遺跡の発掘調査を埋文センターが実施することが正式に決定した。

これを受けて、埋文センターでは平成15年4月1日付15長理第11-19号で県教育委員会あてに文化財保護法第57条に基づく発掘届を提出し、同年4月14日付15教文第8-19号により教育長から調査許可を受けた。

3 受委託契約

建設事務所と埋文センターとの契約内容は下表のとおりである。

内 容	平成15年度		平成16年度	
	発掘作業、基礎整理作業		本格整理作業、報告書刊行	
期 間	平成15年4月1日から 平成16年3月20日まで		平成16年5月24日から 平成17年3月10日まで	
受 託 料	当初契約額	変更契約額	当初契約額	変更契約額
	44,750,000円	29,466,000円	12,170,000円	9,437,000円

第2節 発掘作業

1 体制と経過

発掘作業の体制と期間、面積は次の通りである。

- ・体制 所 長：深瀬弘夫 副所長：原 聖 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第1課長：廣瀬昭弘 調査研究員：河西克造、中野亮一
発掘補助員：井上 清、井上隆一、沖津武男、菊池義則、小林昭子、篠原康人、大工原純、高見沢勝利、竹内みどり、中山五郎、中山良子、本田 智、宮下美香、油井延夫
- ・発掘期間：平成15年5月6日～10月16日
- ・基礎整理期間：平成16年1月4日～3月20日
- ・調査面積：5,000㎡

発掘作業に際し、期間内における資料と機材の保管及び休憩施設として、北斜面の裾部に現場事務所を設置した。表土剥ぎ、トレンチ掘削、排土移動等では大型機械（重機及びクローラータンク）をオペレーターとともに借り上げて用いている。

また、発掘期間中は次の方々にご指導、ご協力をいただいた。（五十音順、敬称略）

角張淳一、笹澤 浩、島田和紀、新海正博、高柳正人、千葉博俊、寺尾真純、藤森英二、臼田町教育委員会、佐久町教育委員会、八千穂村教育委員会

2 調査範囲と調査区

遺跡は、臼田町教育委員会の調査によって、尾根状地形の先端部を中心とした南北約100m、東西約270mの範囲とされてきた。川上佐久線建設予定地は遺跡範囲のほぼ中央部に位置するが、本線のほか、曾原川に沿う町道曾原線との接続道路を建設することから、調査対象地は5,000㎡に及んだ（第1図）。

今回の発掘では調査対象地全域を掘削し、これまで遺跡範囲の南限だった東西道路以南にも遺跡が広がることが判明した。したがって、便宜上、周知の遺跡範囲であった東西道路以北を①区、以南を②区とした。

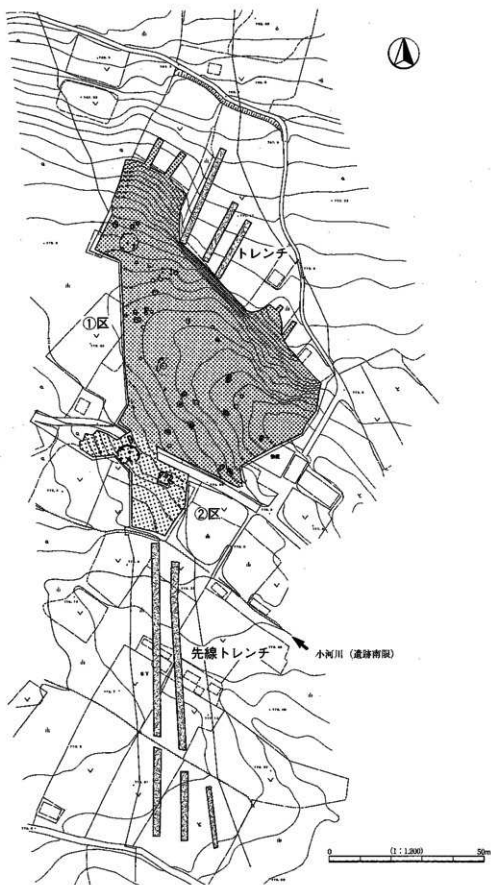
②区では、南の山裾に至る南北約120mにわたって重機でトレンチを掘削した。その結果、地形は東西道路から約25m南に流れている小河川に向かって緩かに傾斜しており、そこまでは遺構・遺物が確認されたものの、小河川以南は起伏が著しく遺構・遺物とも全く確認されなかったことから、この小河川を唐松B遺跡の南限とした。トレンチについては土層柱状図を記録した。

3 検出面の設定と遺構の調査

表土剥ぎに先行して遺構の有無と遺物の出土層位を把握する目的で、調査対象地全域に重機でトレンチを掘削した。その結果、遺物包含層は確認されず、表土及び耕作土（Ⅰ層）を剥いだローム層（Ⅲ層）の上面で遺物を包含する落ち込みが確認されたことから、この面を検出面とした。

検出面設定後、重機による表土剥ぎを実施した。当初はⅢa層上面まで削平する予定だったが、Ⅰ層が薄いこと、Ⅱ層の土壌化作用の影響を受けて暗褐色に変色しているⅢa層上面から縄文土器が出土すること、Ⅲa層上面に掘り方や底部しか残っていない遺構が想定されたことから、表土剥ぎは土壌化作用部分（Ⅱ層最下部）を残した場所もある。

発掘補助員による遺構検出はソフトローム層（Ⅲa層）の上面で行い、縄文・弥生・平安時代の遺構と



第1図 店松B遺跡の調査範囲図

遺物を検出した。土壌化作用部分でプランが判読されたものと、それを除去しないと判読できないものがあったが、基本的に土壌化作用部分が覆土となる遺構はなかった。

なお、I層が混入しプランと底部が不整形な攪乱が調査区の随所で確認され、SB01を大規模に破壊するようなものも存在した。一応、攪乱の範囲も記録したが、本報告書では遺構を破壊しているもののみ表示した。また、攪乱出土の遺物は、各攪乱に番号を付けて取り上げている。

竪穴住居跡は土層観察用のベルト（十字）を設定し、土層を観察しつつ覆土を床面まで掘り下げる方法、土坑・陥し穴については基本的に覆土を二分割して掘り下げる方法を採用し、状況によっては四分割を行った。なお、陥し穴については坑底ピットの存在を坑底精査のみで検出することは困難と判断し、覆土完掘後に重機による陥し穴全体の断ち割り調査を行い、坑底ピットの把握に努めることとした。

4 旧石器の確認調査

SK19（陥し穴）から黒曜石製の縦長剥片（23-63）が出土した。本遺跡の対岸に位置する八千穂村池の平遺跡群駒出池遺跡では通称デカバミを含むローム層からブロック（尖頭器）が出土しており、遺構検出面であるⅢa層（ソフトローム層）と下層のⅢb層（ハードローム層）上面にデカバミが含まれていたこと

から、旧石器の存在を想定した。

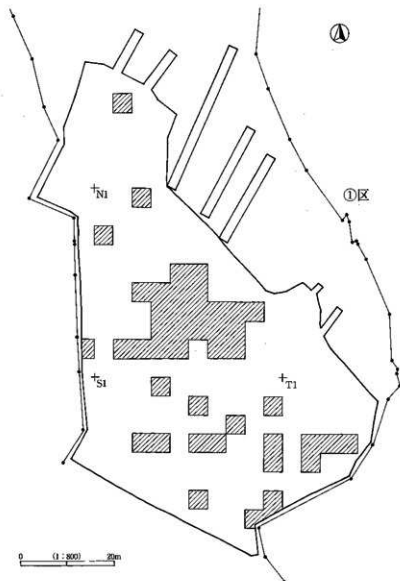
縄文時代以降の遺構調査終了後、尾根頂部と頂部から斜面にかけて縁辺部を中心に、基本的にⅢb層が露出する面まで、部分的にはⅣ層上面までの坪掘りを実施した（第2図）。その結果、石器の出土は確認されず、調査区内に旧石器（ブロック）は存在しないと判断した。尾根頂部での深掘り（第8図C）でも旧石器は確認されなかった。

5 記録の方法

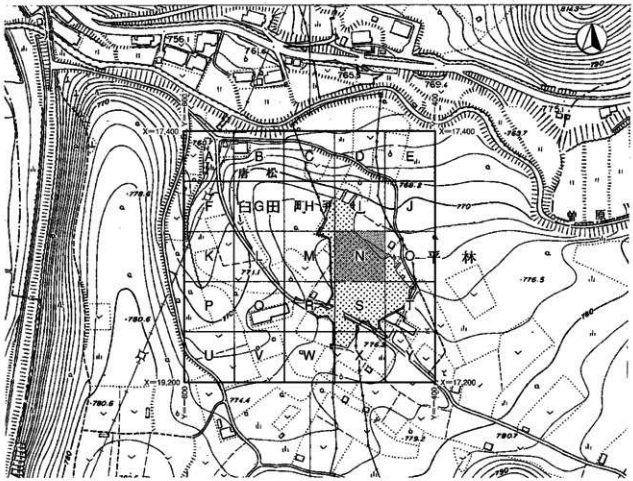
埋蔵文化財センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に基づいて次のとおり実施した。

（1）遺跡の名称と記号（第3図）

遺跡名は、県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「唐松B遺跡」とした。発掘調査及び整理作業の便宜上、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号「DKR」を用いている。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で白田町が該当する

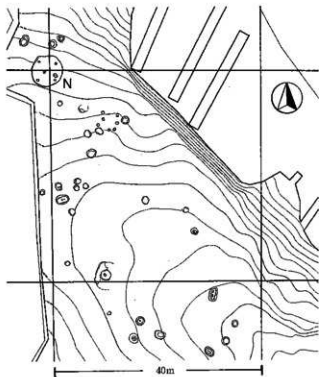


第2図 ローム層坪掘り範囲図

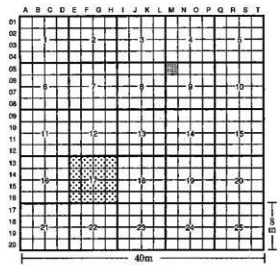


1 大々地区設定図 (1:3,000)

 発掘調査範囲
 大地区N区



2 大地区設定図 (N区)



(例) この大地区がN区の場合

 中地区N17  小地区NM06

3 中・小地区設定図

第3図 地区設定図

「D」、2文字目は遺跡をローマ字表記した「KARAMATSU」の「KR」とした。この記号は本遺跡に関する図面、写真、遺物及びその整理箱等すべての資料で使用している。

(2) 調査区(グリッド)の設定と略称

発掘調査に当たって調査区(グリッド)を設定している。調査対象地に国土地理院の平面直角座標系の原点第Ⅷ系(長野県はⅧ系、X=0,000、Y=0,000)を基点に200×200mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区はローマ数字を用いたが、本遺跡では1つの大々地区(I)にすべて含まれるため、記録類にはローマ数字を記入していない。

大々地区内を25区画(40×40m)に分割し大地区とし、さらに大地区を25区画(8×8m)に分割し中地区を設定した。測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者(新日本航業)に委託して設定した。調査で検出された遺構の記録及び遺物の取り上げは、遺構の個別名のほかは中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。

(3) 遺構の名称と遺構記号

調査では、遺跡記号と同様に遺構についても記録と遺物の注記等の便宜を図るための記号を用いている。この記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面形や分布の特徴を指標としており、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。遺構番号は、時代等に関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦、付けたものは原則として遺構記号・遺構番号の変更はしていない。このため番号に欠番がある。

本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

- ・SB：方形、円形、楕円形の掘り込み。竪穴住居跡、竪穴状遺構。
- ・ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置。掘立柱建物跡、礎石建物跡等。
- ・SK：SBより平面形が小さい掘り込み。土坑、貯蔵穴、井戸等。

なお、SKとPitとの関係は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの柱穴として認識できるものはピット(PitまたはP)を付けた。

(4) 測量と写真撮影

遺構の測量は簡易測り方測量により、調査研究員及びその指導のもとに発掘補助員が行った。遺構測量の縮尺は、個別遺構図と土層図が1：20、遺物分布図などは必要に応じて1：10とした。陥し穴の斯ち割り、トレンチ掘削地点、土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

発掘中の遺構等の撮影は、マミヤRB(6×7)とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロプリント(ネオパン)とカラーリバーサル(フジクローム)で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼付は業者委託とした。空中写真は業者委託により1回実施した。

6 普及公開

平成15年7月8日に白田町立青沼小学校の生徒(6年生)24名が、社会科の歴史学習の一環として見学した。縄文時代の竪穴住居跡や陥し穴、竪穴住居跡出土の縄文土器など教科書には書いていない土地に刻まれた歴史を肌で感じ、地元の歴史を考える貴重な機会となったものと思われる。

平成15年9月18日と21日に地元を対象とした遺跡説明会を実施した。18日は、遺構の調査や遺物の精査等、埋蔵文化財の調査を地元の方々に見てもらう目的で平日の発掘作業時に行った。また、休日の21日は雨天にもかかわらず、多くの方の参加があった。

調査日誌(抄)

- 平成15年5月6日 重機でプレハブ用地周辺の整地。
- 5月7日 北斜面にトレンチ掘削。黒色土の堆積確認。プレハブ・トイレ設置。
- 5月10日 尾根上に重機でトレンチ掘削。縄文中期土器を含む落ち込み(SB01)確認。
- 5月13日 表土剥ぎ開始。
- 5月26日 発掘調査開始式。遺構検出開始。
- 5月28日 縄文中期の竪穴住居跡(SB01)検出。
- 6月3日 遺構調査開始。
- 6月6日 弥生中期の再葬墓(SK02)覆土掘り下げ。中期初頭の壺が逆位で出土。
- 6月16日 陥し穴発見。調査開始。
- 6月19日 調査区以南の先線の調査について、白田建設事務所と県埋文センターで現地協議。
- 6月30日 陥し穴が規則的に配列することが確認。
- 7月2日 陥し穴(SK19)より黒曜石製の縦長割片出土。さわやか佐久町ネットワーク(約30名)遺跡見学。
- 7月8日 白田町立青沼小学校6年生(約30名)遺跡見学。
- 7月11日 白田町文化財審議委員来跡。遺跡視察。
- 7月28日 旧石器の確認調査(ローム層剥離)開始。
- 7月29日 長野県遺跡調査指導委員 笹澤 浩氏来跡。弥生中期初頭の壺について教示を受ける。
- 7月31日 SB02で放射性炭素年代測定用の試料採取。
- 8月20日 空中写真撮影実施。
- 8月22日 先線にトレンチ掘削開始。平安時代の竪穴住居跡確認。
- 9月2日 ①区南側の道路の切り直し。先線②区)の表土剥ぎ開始。先線調査について白田建設事務所と県埋文センターで現地協議。
- 9月3日 平安時代の竪穴住居跡(SB04・05)検出。
- 9月4日 ②区で掘立柱建物跡(ST01)検出。
- 9月8日 ②区で縄文中期の竪穴住居跡(SB06)検出。
- 9月16日 重機で陥し穴(坑底ピット)の断ち割り開始。
- 9月18日 第1回地元説明会。
- 9月21日 第2回地元説明会。
- 9月30日 北相木村教育委員会 藤森英二氏来跡。
- 10月2日 白田高等学校寺尾真純教諭、野沢北高等学校新海正博教諭来跡。地形・地質について指導を受ける。
- 10月3日 陥し穴の断ち割りの単点測量。
- 10月9日 重機でローム層の探掘り。土層断面記録。発掘調査終了式。
- 10月10日 野沢北高等学校 新海正博教諭来跡。地形・地質の指導を受ける。
- 10月15日 ①区と②区の境界にある道路の復旧。調査終了。



現場事務所の設置



重機による表土剥ぎ



遺構調査



青沼小学校6年生の見学

- 10月16日 重機で原め戻し。
平成16年1月4日 基礎整理開始。図面・写真等記録面の整理・照合。第2原因作成。遺構・図面・写真台帳作成。
2月17日 出土炭化物の放射性炭素年代測定および樹種同定業者委託。
2月23日 石器実測を業者委託。
3月17日 基礎整理終了。

第3節 整理作業

1 整理作業の体制

整理作業の体制と期間は次の通りである。

- ・体制 所 長：小沢将夫 副所長：藤岡俊文 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰 調査研究員：河西克造
整理補助員：市川ちず子、稲玉美紀、今井博子、丑山和江、白田知子、大林久美子、小根山貞子、加藤周子、近藤朋子、斉藤いづみ、高橋康子、半田純子、日向富美子、矢島美雪、柳原澄子、山本和美
・整理期間：平成16年9月1日～3月10日
縄文中期後葉の土器について川崎 保氏の指導をいただいた。

2 遺構の確定

遺構の記号及び番号は、基本的に発掘作業時に認定したものを踏襲している。基礎整理では、遺構の位置・規模・形状・時期・属性などの再検討を行い、その結果は遺構台帳（一覧表）を作成・記入し、本格整理の際に活用した。なお、遺構と認定できないと判断した落ち込みが1基（SK15）あり、これは欠番とした。

3 遺物整理の方法

遺物の洗浄・注記は原則として現場事務所で行った。整理作業では接合・復元を行い、報告書掲載遺物を抽出し、台帳を作成した。抽出に当たっては、遺構単位に遺物を観察し、縄文時代の遺物は器種と地文（縄文・沈線文）、文様構成が判別可能な遺物を基準に選別した。推定同一個体も掲載した。出土遺物が少ないため、胴部みの破片も出来る限り掲載した。地文判別遺物でも文様が不鮮明なものや小破片のものは掲載しなかった。堅穴住居跡出土遺物は、その破片数と総重量を計測し、文章中（第4章）に記載した。台帳をもとに掲載遺物の実測・拓本・撮影を行い、図版（アナログ）を作成した。報告書作成と同時に遺物の収納作業も行った。

4 図面と写真等の記録整理方法

図面は、現場終了後の冬季整理（平成16年1月～3月）時に、記載内容や図面相互を点検、修正し、遺構単位に報告書作成時において、トレースもしくは図版作成の素図となる第2原因を作成した。さらに個々の図面に番号を付け、掲載遺構を記載した図面台帳を作成した。この台帳が報告書作成時もしくは収納時において図面の検索台帳の役割を果たすものである。

写真（モノクロ・リバーサル）は、基本的に撮影順にファイルに整理した。ただし、35ミリカラーリバー



遺物写真撮影



図面整理

サルは、整理作業の關係上、遺構単位に並び替えて整理してある。現場で記録した撮影台帳とは別に、整理時に写真台帳を作成した。

その他の整理は、上記の他に測量業務委託の成果簿・空中写真ネガ・調査日誌・整理日誌・現場で作成した遺構台帳・写真台帳・遺構所見カード（竪穴住居跡）などがある。これら諸記録も整理して収納した。

5 報告書の作成

今回の調査では、縄文時代中期後葉の集落跡、縄文時代の陥し穴、弥生時代中期初頭の墓坑、平安時代以降の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が発見され、散在的ながら複数の時代にわたって段丘上が利用されていたことが判明した。特に環状を呈すると思われる縄文中期後葉の集落跡は、南佐久郡北部において初めての発見であることから、可能な限り資料化し報告書に掲載するよう努めた。

整理日誌（抄）

平成16年9月1日 整理作業開始。

9月～ 遺物接合・復元。第2原因チェック。掲載遺物抽出。

10月～ 遺物実測・拓本・トレース。

11～12月 遺構図・全体図・土層図・遺跡分布図等トレース。遺構・遺物図版組。原稿執筆。

平成17年1～2月 図版作成。原稿執筆。遺物写真撮影。

1月31日 報告書入札。

2～3月 報告書校正。図面・遺物等記録類の整理・収納。

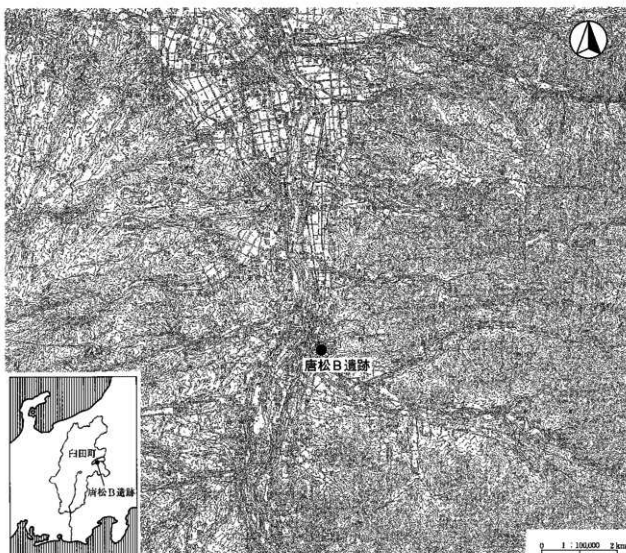
3月4日 発掘調査報告書刊行。

第2章 遺跡周辺の環境

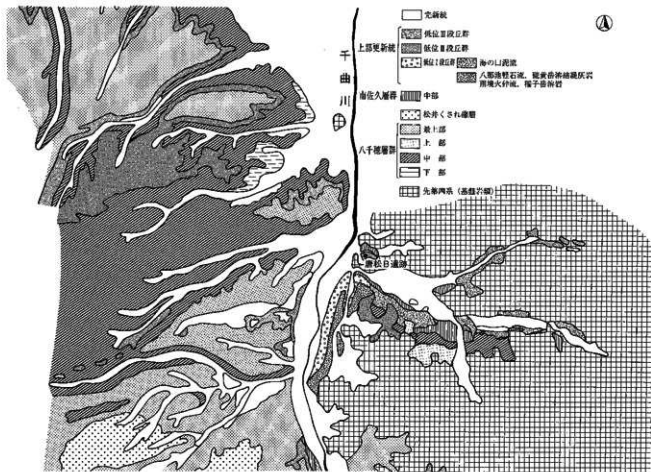
第1節 遺跡周辺の地形・地質的環境

唐松B遺跡が所在する南佐久郡北部には、川上村を源流とし、高原地帯を北西方向に蛇行しつつ、小海町、八千穂村、佐久町、臼田町を經由して佐久盆地に流入する千曲川が貫縦する。千曲川両側には狭小な自然堤防と沖積地、さらに規模や高低差が様々な段丘群が形成されている。この地域は、地形的に千曲川の沖積地と西側の八ヶ岳山麓、東側の佐久山地で構成されている（第4図）。

本遺跡が位置する千曲川の東側は、関東山地の北西端にあたる佐久山地から千曲川に流入する雨川、谷川、曾原川及び抜井川による浸食で谷地形が形成されている。この谷地形は相対的に谷幅が狭く、河川面と尾根頂部との高低差は左岸と比べて大きい。



第4図 唐松B遺跡の位置



第5図 遺跡周辺の地質図

唐松B遺跡は千曲川の右岸、北側を曾原川、南側を抜井川によって形成された段丘上に立地する。南北幅が約450mを測るこの段丘には、佐久山地側から曾原川に流入する小河川や土砂の押し出しにより形成された尾根状の起伏が随所で認められ、これらの起伏（以下、「尾根」という）が段丘上に併走している。唐松B遺跡は、段丘上でも最も北端の南北幅（調査区内）約80m規模で東西にのびる狭小な尾根に立地する。この尾根は、調査区南東側が最も高く、そこから北西方向に向かい緩やかに傾斜している。縦断方向では調査区内では約2mの高低差がある。また、尾根の横断方向では、頂部から北側の段丘縁辺部にかけては緩やかに傾斜する。縁辺部と曾原川とは現状約14mの高低差をもつ。一方南側は、尾根頂部から遺跡南限である小河川に向かい緩やかに傾斜しており、頂部（調査区中央部）と小河川とでは約4mの高低差がある。

地質的には、千曲川兩岸の段丘群は比高や段丘面に乗るローム層、火山灰鍵層などから低位Ⅰ～Ⅲの段丘群に分類されており（八ヶ岳団地研究グループ1988）、各段丘面を形成する時期は、それぞれ下部・中部・上部佐久ローム層の降灰期にあたる（第5図・第1表）。

地質的には、本遺跡が立地する段丘に堆積するローム層（Ⅲ層）には北横岳東方の雨池付近で3万年頃頃に噴出したと推定されている黄褐

第1表 八ヶ岳山麓の第四紀層序表

年代	地層層序	ローム層	
		区分	備考
更新世	完新統		
	最近世段丘群	Ⅰ	Ⅰ-1 Ⅰ-2 Ⅰ-3
第四紀	旧世段丘群	Ⅱ	Ⅱ-1 Ⅱ-2 Ⅱ-3 Ⅱ-4 Ⅱ-5 Ⅱ-6 Ⅱ-7 Ⅱ-8 Ⅱ-9 Ⅱ-10 Ⅱ-11 Ⅱ-12 Ⅱ-13 Ⅱ-14 Ⅱ-15 Ⅱ-16 Ⅱ-17 Ⅱ-18 Ⅱ-19 Ⅱ-20 Ⅱ-21 Ⅱ-22 Ⅱ-23 Ⅱ-24 Ⅱ-25 Ⅱ-26 Ⅱ-27 Ⅱ-28 Ⅱ-29 Ⅱ-30 Ⅱ-31 Ⅱ-32 Ⅱ-33 Ⅱ-34 Ⅱ-35 Ⅱ-36 Ⅱ-37 Ⅱ-38 Ⅱ-39 Ⅱ-40 Ⅱ-41 Ⅱ-42 Ⅱ-43 Ⅱ-44 Ⅱ-45 Ⅱ-46 Ⅱ-47 Ⅱ-48 Ⅱ-49 Ⅱ-50 Ⅱ-51 Ⅱ-52 Ⅱ-53 Ⅱ-54 Ⅱ-55 Ⅱ-56 Ⅱ-57 Ⅱ-58 Ⅱ-59 Ⅱ-60 Ⅱ-61 Ⅱ-62 Ⅱ-63 Ⅱ-64 Ⅱ-65 Ⅱ-66 Ⅱ-67 Ⅱ-68 Ⅱ-69 Ⅱ-70 Ⅱ-71 Ⅱ-72 Ⅱ-73 Ⅱ-74 Ⅱ-75 Ⅱ-76 Ⅱ-77 Ⅱ-78 Ⅱ-79 Ⅱ-80 Ⅱ-81 Ⅱ-82 Ⅱ-83 Ⅱ-84 Ⅱ-85 Ⅱ-86 Ⅱ-87 Ⅱ-88 Ⅱ-89 Ⅱ-90 Ⅱ-91 Ⅱ-92 Ⅱ-93 Ⅱ-94 Ⅱ-95 Ⅱ-96 Ⅱ-97 Ⅱ-98 Ⅱ-99 Ⅱ-100
	海抜九層群	Ⅲ	Ⅲ-1 Ⅲ-2 Ⅲ-3 Ⅲ-4 Ⅲ-5 Ⅲ-6 Ⅲ-7 Ⅲ-8 Ⅲ-9 Ⅲ-10 Ⅲ-11 Ⅲ-12 Ⅲ-13 Ⅲ-14 Ⅲ-15 Ⅲ-16 Ⅲ-17 Ⅲ-18 Ⅲ-19 Ⅲ-20 Ⅲ-21 Ⅲ-22 Ⅲ-23 Ⅲ-24 Ⅲ-25 Ⅲ-26 Ⅲ-27 Ⅲ-28 Ⅲ-29 Ⅲ-30 Ⅲ-31 Ⅲ-32 Ⅲ-33 Ⅲ-34 Ⅲ-35 Ⅲ-36 Ⅲ-37 Ⅲ-38 Ⅲ-39 Ⅲ-40 Ⅲ-41 Ⅲ-42 Ⅲ-43 Ⅲ-44 Ⅲ-45 Ⅲ-46 Ⅲ-47 Ⅲ-48 Ⅲ-49 Ⅲ-50 Ⅲ-51 Ⅲ-52 Ⅲ-53 Ⅲ-54 Ⅲ-55 Ⅲ-56 Ⅲ-57 Ⅲ-58 Ⅲ-59 Ⅲ-60 Ⅲ-61 Ⅲ-62 Ⅲ-63 Ⅲ-64 Ⅲ-65 Ⅲ-66 Ⅲ-67 Ⅲ-68 Ⅲ-69 Ⅲ-70 Ⅲ-71 Ⅲ-72 Ⅲ-73 Ⅲ-74 Ⅲ-75 Ⅲ-76 Ⅲ-77 Ⅲ-78 Ⅲ-79 Ⅲ-80 Ⅲ-81 Ⅲ-82 Ⅲ-83 Ⅲ-84 Ⅲ-85 Ⅲ-86 Ⅲ-87 Ⅲ-88 Ⅲ-89 Ⅲ-90 Ⅲ-91 Ⅲ-92 Ⅲ-93 Ⅲ-94 Ⅲ-95 Ⅲ-96 Ⅲ-97 Ⅲ-98 Ⅲ-99 Ⅲ-100
第四紀	松井くされ層群	Ⅳ	Ⅳ-1 Ⅳ-2 Ⅳ-3 Ⅳ-4 Ⅳ-5 Ⅳ-6 Ⅳ-7 Ⅳ-8 Ⅳ-9 Ⅳ-10 Ⅳ-11 Ⅳ-12 Ⅳ-13 Ⅳ-14 Ⅳ-15 Ⅳ-16 Ⅳ-17 Ⅳ-18 Ⅳ-19 Ⅳ-20 Ⅳ-21 Ⅳ-22 Ⅳ-23 Ⅳ-24 Ⅳ-25 Ⅳ-26 Ⅳ-27 Ⅳ-28 Ⅳ-29 Ⅳ-30 Ⅳ-31 Ⅳ-32 Ⅳ-33 Ⅳ-34 Ⅳ-35 Ⅳ-36 Ⅳ-37 Ⅳ-38 Ⅳ-39 Ⅳ-40 Ⅳ-41 Ⅳ-42 Ⅳ-43 Ⅳ-44 Ⅳ-45 Ⅳ-46 Ⅳ-47 Ⅳ-48 Ⅳ-49 Ⅳ-50 Ⅳ-51 Ⅳ-52 Ⅳ-53 Ⅳ-54 Ⅳ-55 Ⅳ-56 Ⅳ-57 Ⅳ-58 Ⅳ-59 Ⅳ-60 Ⅳ-61 Ⅳ-62 Ⅳ-63 Ⅳ-64 Ⅳ-65 Ⅳ-66 Ⅳ-67 Ⅳ-68 Ⅳ-69 Ⅳ-70 Ⅳ-71 Ⅳ-72 Ⅳ-73 Ⅳ-74 Ⅳ-75 Ⅳ-76 Ⅳ-77 Ⅳ-78 Ⅳ-79 Ⅳ-80 Ⅳ-81 Ⅳ-82 Ⅳ-83 Ⅳ-84 Ⅳ-85 Ⅳ-86 Ⅳ-87 Ⅳ-88 Ⅳ-89 Ⅳ-90 Ⅳ-91 Ⅳ-92 Ⅳ-93 Ⅳ-94 Ⅳ-95 Ⅳ-96 Ⅳ-97 Ⅳ-98 Ⅳ-99 Ⅳ-100
	八千穂層群	Ⅴ	Ⅴ-1 Ⅴ-2 Ⅴ-3 Ⅴ-4 Ⅴ-5 Ⅴ-6 Ⅴ-7 Ⅴ-8 Ⅴ-9 Ⅴ-10 Ⅴ-11 Ⅴ-12 Ⅴ-13 Ⅴ-14 Ⅴ-15 Ⅴ-16 Ⅴ-17 Ⅴ-18 Ⅴ-19 Ⅴ-20 Ⅴ-21 Ⅴ-22 Ⅴ-23 Ⅴ-24 Ⅴ-25 Ⅴ-26 Ⅴ-27 Ⅴ-28 Ⅴ-29 Ⅴ-30 Ⅴ-31 Ⅴ-32 Ⅴ-33 Ⅴ-34 Ⅴ-35 Ⅴ-36 Ⅴ-37 Ⅴ-38 Ⅴ-39 Ⅴ-40 Ⅴ-41 Ⅴ-42 Ⅴ-43 Ⅴ-44 Ⅴ-45 Ⅴ-46 Ⅴ-47 Ⅴ-48 Ⅴ-49 Ⅴ-50 Ⅴ-51 Ⅴ-52 Ⅴ-53 Ⅴ-54 Ⅴ-55 Ⅴ-56 Ⅴ-57 Ⅴ-58 Ⅴ-59 Ⅴ-60 Ⅴ-61 Ⅴ-62 Ⅴ-63 Ⅴ-64 Ⅴ-65 Ⅴ-66 Ⅴ-67 Ⅴ-68 Ⅴ-69 Ⅴ-70 Ⅴ-71 Ⅴ-72 Ⅴ-73 Ⅴ-74 Ⅴ-75 Ⅴ-76 Ⅴ-77 Ⅴ-78 Ⅴ-79 Ⅴ-80 Ⅴ-81 Ⅴ-82 Ⅴ-83 Ⅴ-84 Ⅴ-85 Ⅴ-86 Ⅴ-87 Ⅴ-88 Ⅴ-89 Ⅴ-90 Ⅴ-91 Ⅴ-92 Ⅴ-93 Ⅴ-94 Ⅴ-95 Ⅴ-96 Ⅴ-97 Ⅴ-98 Ⅴ-99 Ⅴ-100
鮮新世	布引層		

色軽石（通称、「デカバミ」）の散在が認められる。したがって、地質的には「デカバミ」を含む佐久ローム層上部Ⅳに分類され、低位Ⅲ段丘群に属すると考えられるが、調査で掘削した深掘りでは明確な火山灰鍵層が確認されなかった。今後の地質調査で判断されよう（註1）。

註

- 1 第5図は現在までに公表されている地質図のなかで、唐松B遺跡が立地する段丘を低位段丘群と表示したものに加筆したものである。第5図では低位Ⅱ段丘群となっているが、修正の必要がある。第1表は、八ヶ岳国研1988より引用。

参考文献

- 八ヶ岳団体研究グループ1988「八ヶ岳山麓の第四系」
 長野県南佐久郡誌刊行会1994「南佐久郡誌」自然編（上）
 （株）クボタ1994「URBAN KUBOTA」No.33

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

今回の調査では、縄文時代の陥し穴、中期後葉の集落、弥生時代中期初頭の墓坑、平安時代前半の堅穴住居跡が確認された。ここでは、当該期の発掘資料を中心として遺跡周囲の歴史的環境を概観する（註1）。

旧石器時代では、SK19より黒曜石製の縦長剥片が1点出土しているが、本遺跡と遺跡付近でブロックは確認されていない。なお、黒曜石の原産地（麦草峠）に近い八ヶ岳東山麓の池の平遺跡群（駒出池遺跡）では、デカバミを含むローム層から槍先形尖頭器を主体としたブロックが確認されている。

縄文時代では、千曲川左岸の段丘上に立地する佐久西小学校裏遺跡（204）で中期後葉の堅穴住居跡1軒、田口地域の大工原遺跡（59）で縄文と沈線文が共存する土坑、青沼地域の扇状地扇端部にある月夜平遺跡（122）で中期後葉の堅穴住居跡、崎田原遺跡（240）で中期後葉の堅穴住居跡が調査されている。これら中期後葉の遺構は、段丘の先端部もしくは扇状地扇端付近の山裾に立地しており、本遺跡もこれに該当する。集落構造であるが、上記の遺跡は比較的調査範囲が狭く、集落構造は明らかとなっていない。唐松B遺跡は、南佐久郡北部において初めて遺跡構造が把握されたものである。なお、本遺跡南東約2.5kmの抜井川対岸に所在する館遺跡（231）から中期後葉の鱗状短沈線文を施した深鉢が出土している。なお、抜井川を隔てた対岸の後平遺跡（234）で、22基の陥し穴が調査されており、唐松B遺跡と同様に段丘上を横断・縦断する複数の配列が確認されている。

弥生時代中期の遺跡では、佐久町館遺跡（231）、中原遺跡（218）、月夜平遺跡（122）があり、3遺跡とも条痕文を施した壺もしくは甕が出土している。上の原遺跡の完形土器は水路の工事中に見えられたもので、2個体の壺形土器が正位の状態で出土しており、壺内部には骨が埋納されていることが確認されている。館遺跡では壺形土器とともに容器形の土偶（頭部）が出土している。月夜平遺跡では壺形土器とともにミニチュア土器3個体が出土しており、副葬品と解釈されている。これらの遺跡は、遺物の詳細な出土状況は不明であるが、出土土器から土器棺再葬墓が存在した可能性が高いものと判断され、唐松B遺跡を含めると、千曲川右岸に分布する特徴を示している。

古代では、宮東遺跡（60）・佐久西小学校裏遺跡（204）で10世紀代の堅穴住居跡、月夜平遺跡（122）で10世紀代と思われる堅穴住居跡、原遺跡（89）で8世紀の堅穴住居跡と9～10世紀と思われる堅穴住居跡、丸山遺跡（155）で8世紀末で遡ると思われる掘立柱建物跡が確認されている。これら古代の遺跡は低



第6図 唐松B遺跡周辺の遺跡分布図

第2章 遺跡周辺の環境

第2表 遺跡地名表

番号	群別	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	472	尾張遺跡	佐久市前山字尾倉	●	●	●						
2	473	河原遺跡	佐久市前山字河原	●	●	●						
3	476	兜城跡	佐久市前山字兜城	●	●	●						
4	474	一丁田遺跡	佐久市大沢字一丁田	●	●	●						
5	475	大朝遺跡	佐久市大沢字大朝	●	●	●						
6	481	羽山遺跡	佐久市大沢字羽山	●	●	●						
7	480	地家遺跡	佐久市大沢字地家	●	●	●						
8	487	大泉遺跡	佐久市前山字大朝	●	●	●						
9	486	大門下遺跡	佐久市前山字大門	●	●	●						国庫整備により消滅
10	488	御所遺跡	佐久市大沢字御所	●	●	●						国庫整備により消滅
11	490	前田遺跡	佐久市本新町字前田・大沢字御所	●	●	●						国庫整備により消滅
12	482	城山遺跡	佐久市大沢字城山・聖敷	●	●	●						荒山掘削・城山古墳と同一地点
13	496	福山古墳	佐久市大沢字城山	●	●	●						城山・福山古墳と同一地点
14	553	荒山古墳	佐久市大沢字城山	●	●	●						城山古墳・城山と同一地点
15	483	南下遺跡	佐久市大沢字南下	●	●	●						国庫整備により消滅
16	492	下町屋遺跡	佐久市大沢字下町屋	●	●	●						
17	483	大沢聖敷遺跡	佐久市大沢字聖敷	●	●	●						
18	521	金山久保 A 遺跡	佐久市大沢字金山久保	●	●	●						
19	522	金山久保 B 遺跡	佐久市大沢字金山久保	●	●	●						
20	523	前の保遺跡	佐久市大沢字前の保	●	●	●						
21	494	大中沢遺跡	佐久市大沢字大中沢	●	●	●						
22	524	三枚平 A 遺跡	佐久市大沢字三枚平	●	●	●						
23	525	三枚平 B 遺跡	佐久市大沢字三枚平	●	●	●						
24	424	豊田遺跡	佐久市野沢字豊田	●	●	●						国庫整備により消滅
25	495	伊勢渡遺跡	佐久市東平字伊勢渡	●	●	●						国庫整備により消滅
26	489	高塚遺跡	佐久市本新町字高塚	●	●	●						昭和44年度発掘調査
27	494	白柏子遺跡群	佐久市東平字白柏子・聖敷・柏作・横路	●	●	●						
28	491	西馬遺跡群	佐久市本新町字西馬・砂原・上木戸・ヤクウ田	●	●	●						
29	493	下馬遺跡	佐久市大沢字下馬	●	●	●						
30	429	社宮町遺跡	佐久市野沢字社宮町・奥出	●	●	●						国庫整備により消滅
31	497	向保遺跡	佐久市野沢字向保	●	●	●						
32	498	前田遺跡	佐久市高瀬字前田・社堂・金山・藤巻・大塚	●	●	●						
33	434	久保渡遺跡	佐久市太田部字久保渡・尾越・飯塚	●	●	●						
34	442	八十海戸遺跡	佐久市常和字八十海戸	●	●	●						
35	443	鶴平遺跡群	佐久市平賀字鶴平・鶴井・常和字八十海戸・西久保・城下	●	●	●						
36	490-1	西久保古墳群1号墳	佐久市常和字西久保	●	●	●						
37	444	上宮前遺跡群	佐久市常和字上宮前・下宮前・岩久保・東段・三丁原・久之上	●	●	●						
38	452	東塚古墳	佐久市常和字東塚	●	●	●						
39	446	天神久保遺跡群	佐久市常和字天神久保・下大久保	●	●	●						
40	40-1-3	天神久保古墳群2・3号墳	佐久市常和字天神久保	●	●	●						
41	499	湯井遺跡	佐久市常和字湯井	●	●	●						
42	520	打井遺跡	佐久市常和字打井	●	●	●						
43	445	高塚在家遺跡群	佐久市常和字高塚在家・西塚・上砂田	●	●	●						
44	501	下川原遺跡	佐久市常和字下川原	●	●	●						
45	502	曲り谷遺跡	佐久市常和字曲り谷	●	●	●						
46	503	松本谷遺跡群	佐久市常和字松本谷・桂沢・寛平・方八丁・日向・新馬	●	●	●						
47	504	上向在家遺跡群	佐久市常和字上向在家・下向在家	●	●	●						
48	507	下向在家跡塚	佐久市常和字下向在家	●	●	●						時代不詳
49	505	常和郷久保遺跡群	佐久市常和字久保・風坪	●	●	●						
50	506	風坪古墳	佐久市常和字風坪	●	●	●						
51	460	浦ノ久保遺跡	佐久市常和字浦ノ久保	●	●	●						
52	89	芦内遺跡	白田町清川・芦内	●	●	●						
53	86	芦内岩倉遺跡	白田町清川・岩戸ヤ	●	●	●						
54	92	影丸山遺跡	白田町丸山・田ノ上・米落	●	●	●						
55	91	丸山下遺跡	白田町丸山・田ノ上久保	●	●	●						
56	90	丸山下遺跡	白田町丸山・草太工庫	●	●	●						
57	87	日向大工塚遺跡	白田町丸山・日向大工塚	●	●	●						
58	96	明造寺遺跡	白田町高代・明造	●	●	●						
59	84	大工塚遺跡	白田町高代・上ノ平	●	●	●						
60	83	宮家遺跡	白田町高代・宮家	●	●	●						
61	85	山口遺跡	白田町河原橋・岩野・山口	●	●	●						
62	156-158	新海神社西・中・東朝庭古墳	白田町高代・新海神社・宮の沢	●	●	●						
63	159-160	上高代1・2号古墳	白田町高代・上高代	●	●	●						
64	155	美田地権古墳	白田町高代・美田地権	●	●	●						昭和40年発掘調査
65	82	美田地権遺跡	白田町高代・美田地権	●	●	●						
66	81	神原遺跡	白田町下町・中町・下神原・道場	●	●	●						
67	187	田口城跡	白田町田口・城山	●	●	●						
68	76	明法寺遺跡	白田町下町・明造寺	●	●	●						
69	153	明法寺古墳	白田町下町・明造寺	●	●	●						
70	154	五尾古墳	白田町下町・五尾	●	●	●						
71	80	久尾遺跡	白田町下町・五尾	●	●	●						
72	158	藤城遺跡	白田町下町・藤城	●	●	●						
73	104	三分遺跡	白田町三分・原田・岩地・笠宮・北手塚	●	●	●						
74	101	通原寺遺跡	白田町三分・寺久保	●	●	●						
75	75	金庫遺跡	白田町清川・金庫	●	●	●						
76	67	中反田遺跡	白田町大塚良・中反田	●	●	●						
77	66	龍山遺跡	白田町上中込・龍山	●	●	●						
78	136-137	龍山1～3号古墳	白田町上中込・龍山	●	●	●						平成14年埋文センター発掘調査 1号古墳発掘なし

番号	説明	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
79	74	はかせ久保遺跡	白田町清川・はかせ久保						●			
80	73	清川遺跡	白田町清川郡落内		●							
81	76	清川入遺跡	白田町清川・清川入		●	●						
82	138	清川入古墳	白田町清川・清川入									
83	77	香沢地下遺跡	白田町清川・香沢地下						●			
84	71	藤白山遺跡	白田町大奈良・藤		●	●						
85	72	芝塚遺跡	白田町清川・芝塚		●							
86	68	大奈良遺跡	白田町大奈良・金石橋		●	●	●					
87	70	山崎遺跡	白田町大奈良・山崎		●	●						
88	139	山崎古墳	白田町大奈良・山崎									
89	69	山崎遺跡	白田町中・中野切・切合・外九間・中原他		●	●						
90	140~141	常陸1~6号古墳	白田町中・常陸				●					
91	145~146	外九間1~3号古墳	白田町中・外九間				●					
92	140~151	中原1~3号古墳	白田町中・中原				●					3号古墳消滅
93	79	野塚遺跡	白田町下町・野塚			●	●			●		
94	152	野塚古墳	白田町下町・野塚				●					
95	97	西塚田遺跡	白田町三分・西塚田			●	●					
96	98	田中遺跡	白田町三分・中川原			●	●					
97	99	戸井口遺跡	白田町三分・上川原・下川原			●	●					
98	100	井上遺跡	白田町三分・上の田			●	●					昭和48年発掘
99	113	萩の人道跡	白田町入沢・萩の入									
100	112	東家堂遺跡	白田町入沢・東家堂			●						
101	117	赤谷遺跡	白田町赤谷・大塚山									
102	118	堂平遺跡	白田町赤谷・堂平			●						
103	119	日笠遺跡	白田町入沢・日笠白塚・日笠				●					
104	111	西宮地堂遺跡	白田町入沢・西宮地堂				●					
105	193	水石城跡	白田町入沢・水石									
106	110	月通沢・水石遺跡	白田町入沢・月通沢・水石	●		●	●					
107	109	下海戸・山の前遺跡	白田町入沢・森林・下海戸・上海戸・山の前			●	●	●				
108	178	一方堂19号古墳	白田町入沢・一方堂				●					
109	179	西の宮19号古墳	白田町入沢・西の宮				●					
110	174~177	天神平14~17号古墳	白田町入沢・天神平・森林				●					
111	120	藤原遺跡	白田町入沢・藤原出口									
112	121	馬寄・六角堂遺跡	白田町入沢・馬寄・惣平・六角堂			●				●		
113	123	吉祥寺遺跡	白田町入沢・源助の入									
114	192	入沢城跡	白田町入沢							●		
115	124	野呂沢遺跡	白田町入沢・野呂沢							●		
116	191	十二山遺跡	白田町入沢・十二山							●		
117	125	十日遺跡	白田町十日・上善池							●		
118	127	夏宮遺跡	白田町十日・夏宮							●		
119	108	五雲宮・湯船入遺跡	白田町入沢・五雲宮・湯船入・後田・中村			●	●					
120	173	湯船入13号古墳	白田町入沢・湯船入				●					
121	168~172	五雲宮8~12号古墳	白田町入沢・五雲宮				●					12号古墳昭和61年発掘調査
122	122	月夜平遺跡	白田町入沢・月夜平・原			●	●					昭和32年発掘調査
123	164	月夜平4号古墳	白田町入沢・月夜平				●					
124	107	楯形遺跡	白田町入沢・中嶋堤・湯久保			●	●					
125	165~167	楯形遺5~7号古墳	白田町入沢・中嶋堤・湯見橋				●					
126	190	磯部城跡	白田町入沢・磯部									
127	106	和田前遺跡	白田町入沢・池ノ橋・和田前							●		
128	161~163	山腰1~3号古墳	白田町入沢・山腰・上大深									
129	105	山腰遺跡	白田町入沢・山腰							●		
130	102	兜塚遺跡	白田町三分・兜塚・藤船田							●		
131	103	小山山遺跡	白田町三分・小山山							●		
132	189	岩船城跡	白田町三分・小山山							●		
133	1	舊田遺跡	白田町白田・舊田							●		
134	2	蛇塚遺跡	白田町白田・法印塚・湯吉原			●	●					
135	132	蛇塚古墳	白田町白田・蛇塚				●					昭和60年発掘調査
136	131	堤塚古墳	白田町白田・香阿勢			●	●					
137	3	美原在家遺跡	白田町白田・美原在家			●	●					
138	4	滝ノ沢遺跡	白田町白田・水泊			●	●					
139	5	荒谷遺跡	白田町白田・荒谷			●	●					
140	6	七曲り下遺跡	白田町白田・加藤石			●	●					
141	181	藤王寺城跡	白田町白田・白田							●		
142	133	滝ノ沢古墳	白田町白田・滝ノ沢							●		
143	194	上ノ城城跡	白田町白田・上ノ城							●		
144	134	滝ノ沢城跡	白田町白田・滝ノ沢							●		
145	9	下ノ城遺跡	白田町白田・湯久保			●	●					
146	8	寺久島遺跡	白田町白田・湯平			●	●					
147	10	合ヶ敷遺跡	白田町白田・合ヶ敷			●	●					
148	11	原田遺跡	白田町白田・原田			●	●					
149	12	城下遺跡	白田町白田・城下			●	●					
150	13	横山遺跡	白田町白田・城下			●	●					
151	182	稲荷山城跡	白田町白田・藤岡							●		
152	14	横山遺跡	白田町白田・横山			●	●					
153	15	小山山遺跡	白田町白田・小山山			●	●					
154	16	小山山遺跡	白田町白田・小山山			●	●					
155	17	丸山遺跡	白田町下小田切・藤岡			●	●					
156	18	藤岡遺跡	白田町下小田切・藤岡			●	●					昭和62年一部発掘調査
157	19	栗ノ木遺跡	白田町下小田切・栗ノ木			●	●					
158	125	観正田遺跡	白田町三条・観正田							●		

第2章 電跡周辺の環境

番号	期別	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
159	126	南蔵遺跡	白田町三幸・浜節子						●			
160	20	日影遺跡	白田町下小田切・日影				●					
161	21	見次遺跡	白田町下小田切・日影				●					
162	22	家清遺跡	白田町下小田切・家清		●							
163	23	滝遺跡	白田町滝原・滝				●					
164	24	和田遺跡	白田町滝原・和田			●						
165	25	北島遺跡	白田町滝原・本町				●					
166	26	中島遺跡	白田町滝原・中島				●					
167	27	岡城遺跡	白田町中・小田切・岡城				●					
168	28	上滝遺跡	白田町滝原・上滝				●					
169	29	見玉・大平遺跡	白田町滝原・見玉・大平				●					
170	30	ジシロ遺跡	白田町滝原・見玉				●					
171	31	山の神遺跡	白田町滝原・山の神		●							
172	32	船子久保遺跡	白田町滝原・船子久保						●			
173	33	五里久保遺跡	白田町滝原・五里久保			●						
174	183	湯原城跡	白田町滝原							●		
175	184	岡城城跡	白田町中・小田切							●		
176	47	家清遺跡	白田町上・小田切・家清						●			
177	48	室裏遺跡	白田町上・小田切・室裏・西の入				●					
178	185	上小田切城跡	白田町上・小田切							●		
179	49	大井城遺跡	白田町十二高田・大井		●				●			
180	50	落下窪遺跡	白田町十二高田・落下窪						●			
181	51	下遺跡	白田町十二高田・下						●			
182	45	広久保・松の久保遺跡	白田町上・小田切・広久保・松の久保						●			
183	44	前久保遺跡	白田町上・小田切・前久保						●			
184	42	礼華吉原遺跡	白田町中・小田切・吉原				●					
185	43	南久保・原村遺跡	白田町中・小田切・南久保・原村						●			
186	186	巖峰城跡	白田町中・小田切							●		
187	41	城影遺跡	白田町中・小田切・城影				●					
188	40	田島遺跡	白田町北川・田島						●			
189	39	広沢遺跡	白田町北川・広沢			●						
190	38	千曲合田遺跡	白田町北川・原						●			
191	37	北川懸間遺跡	白田町北川・懸間						●			
192	180	南久保20号古墳	白田町前水・南久保						●			
193	129	唐松 A 遺跡	白田町前水・唐松		●							
194	130	唐松 B 遺跡	白田町前水・唐松		●					●		
195	8	影遺跡	佐久町上区・本郷						●			
196	4	たつま久保遺跡	佐久町上区・針ノ木沢						●			
197	50	種田城跡	佐久町上区・本郷						●			
198	34	本郷遺跡	佐久町上区・本郷		●							
199	5	下影遺跡	佐久町上区・下影						●			
200	31	海蔵堂遺跡	佐久町上区・針ノ木沢						●			
201	30	小山寺宮遺跡	佐久町高野町・小山						●			
202	2	南明遺跡	佐久町高野町・北沢						●			
203	3	北沢遺跡	佐久町高野町・北沢			●						
204	10	佐久西小学校敷遺跡	佐久町高野町・二本木			●						昭和57・58年発掘調査
205	29	宮の本遺跡	佐久町高野町・宮の本			●						昭和54年発掘調査
206	49	高野城跡	佐久町高野町・權生						●			
207	1	藤田古墳	佐久町高野町・北沢				●					
208	28	藤田遺跡	佐久町高野町・藤田				●					
209	11	千手観音遺跡	佐久町平林・宮の上			●				●		
210	13	膳家遺跡	佐久町平林・管理						●			
211	12	膳屋古墳	佐久町平林・管理				●					
212	38	五輪屋遺跡	佐久町平林・管理						●			
213	39	セイカチ平遺跡	佐久町平林・管理						●			
214	17	丸井平遺跡	佐久町高瀬・畑ヶ中						●			
215	43	下原遺跡	佐久町高瀬・牧原山			●						
216	51	海蔵城跡	佐久町高瀬・一の洲							●		
217	20	マギ遺跡	佐久町高瀬・真木			●						
218	18	中坂遺跡	佐久町高瀬・中坂			●						
219	19	上ノ原遺跡	佐久町高瀬・上ノ原			●						
220	52	花崎陣火合	佐久町高瀬・花崎							●		平成2年9月発掘調査
221	21	中山遺跡	佐久町高瀬・花崎			●				●		平成2年9月発掘調査
222	42	栗山遺跡	佐久町高瀬・花崎			●						
223	40	栗山遺跡	佐久町高瀬・本郷			●						
224	16	宮内遺跡	佐久町金地・宮内			●						
225	41	藤見沢遺跡	佐久町金地・本郷						●			
226	15	野尻遺跡	佐久町金地・野尻						●			
227	14	中谷遺跡	佐久町金地・中谷			●						
228	48	中日向宮遺	佐久町金地・中谷						●			白田町横骨郷上にあり
229	54	藤見城跡	佐久町金地・本郷							●		
230	44	十二平遺跡	佐久町高瀬・川久保			●						
231	22	藤遺跡	佐久町高瀬・藤			●				●		
232	53	幡六郎屋跡	佐久町高瀬・幡						●			
233	45	三味輪遺跡	佐久町大日向・下川原			●						
234	46	後平遺跡	佐久町大日向・下川原			●						昭和59年試掘調査、60・61年発掘調査
235	57	志ら平遺跡	佐久町大日向・下川原			●						
236	47	横沢遺跡	佐久町大日向・下川原			●						
237	23	大淵城遺跡	佐久町大日向・本郷						●			大淵城跡あり
238	24	所名遺跡	佐久町大日向・本郷			●						

番号	資料種別	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
239	56	中原城跡	佐久間大日向・本部							●		
240	1	鹿田原遺跡	八千穂村穂積・嶋田	●	●	●				●		
241	45	磯城跡	八千穂村穂積・穴原他							●		
242	53	関谷東遺跡	八千穂村穂積・関谷		●					●		
243	3	関谷遺跡	八千穂村穂積・関谷	●	●							
244	4	穴原遺跡	八千穂村穂積・穴原		●							
245	48	下窪下の城跡	八千穂村埴・下窪							●		
246	47	下窪城跡	八千穂村埴・下窪							●		
247	36	阪り森遺跡	八千穂村埴・上野		●							
248	5	上野有原屋遺跡	八千穂村埴・上野		●							
249	40	馬込遺跡	八千穂村埴・井口		●					●		平成15年度文センター発掘調査
250	49	井口城跡	八千穂村埴・井口		●					●		
251	35	青平遺跡	八千穂村埴・佐口		●					●		
252	13	藤見沢遺跡	八千穂村埴・上郷		●					●		
253	9	宮の人遺跡	八千穂村埴・上郷		●					●		
254	10	網久保遺跡	八千穂村埴・上郷		●					●		
255	46	権現山館跡	八千穂村埴・上郷		●					●		
256	6	竹の下遺跡	八千穂村埴・上郷		●			●	●			上郷遺跡群に入る
257	7	封地遺跡	八千穂村埴・上郷		●			●	●			平成15年度文センター発掘調査
258	8	ムジナ子遺跡	八千穂村埴・上郷		●			●	●			上郷遺跡群に入る
259	11	千ヶ日向遺跡	八千穂村埴・千ヶ日向		●							
260	51	大石川烽火台跡	八千穂村千代達・大石川		●					●		
261	32	中原遺跡	八千穂村千代達・中原		●							
262	34	向宮遺跡	八千穂村千代達・馬場		●							
263	33	江原屋遺跡	八千穂村千代達・馬場		●							
264	52	馬越城跡	八千穂村千代達・馬越		●							
265	2	諏治の入遺跡	八千穂村穂積・嶋田							●		

地や扇状地上もしくは段丘上に立地しており、数軒の堅穴住居で小規模な集落が構成されることが分かる。唐松B遺跡の堅穴住居は、立地と遺構配置が同じ傾向を示しており、類例の増加となった。発掘事例が少ないなかで、南佐久郡北部における平安期の集落を考える上で貴重な資料となった。

註

- 1 第6図と第2表は、『白田町遺跡詳細分布調査報告書』（1988）・『佐久町の文化財』（1991）・『八千穂村誌—歴史編』（2003）をもとに加筆して作成した。

参考文献

- 白田町教育委員会1980『井上遺跡—長野県白田町緊急発掘調査報告書—』
 長野県南佐久郡佐久町教育委員会1987『後平遺跡—縄文早期後半～前期初頭における落し穴を伴った集落の調査—』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1988『白田町遺跡詳細分布調査報告書』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1989『原遺跡—古墳末～奈良時代・平安時代集落址の調査—』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1991『丸山遺跡—日本最高地点初期稲作農耕の弥生後期集落址の調査—』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1993『宮東・大工原遺跡—平安時代中期小鍛冶集落の調査—』
 八千穂村教育委員会1996『池の平遺跡群Ⅱ—八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化—』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1999『月夜平遺跡』
 長野県南佐久郡白田町教育委員会1999『上ノ原遺跡』
 長野県南佐久郡誌刊行会1999『南佐久郡誌』考古編
 長野県南佐久郡白田町教育委員会2001『佐久西小学校裏遺跡—日本一の大石柱に続く人工の小川を築いた偉大な縄文集落の調査—』
 八千穂村誌刊行会2003『八千穂村誌』第4巻 歴史編

第3章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概観

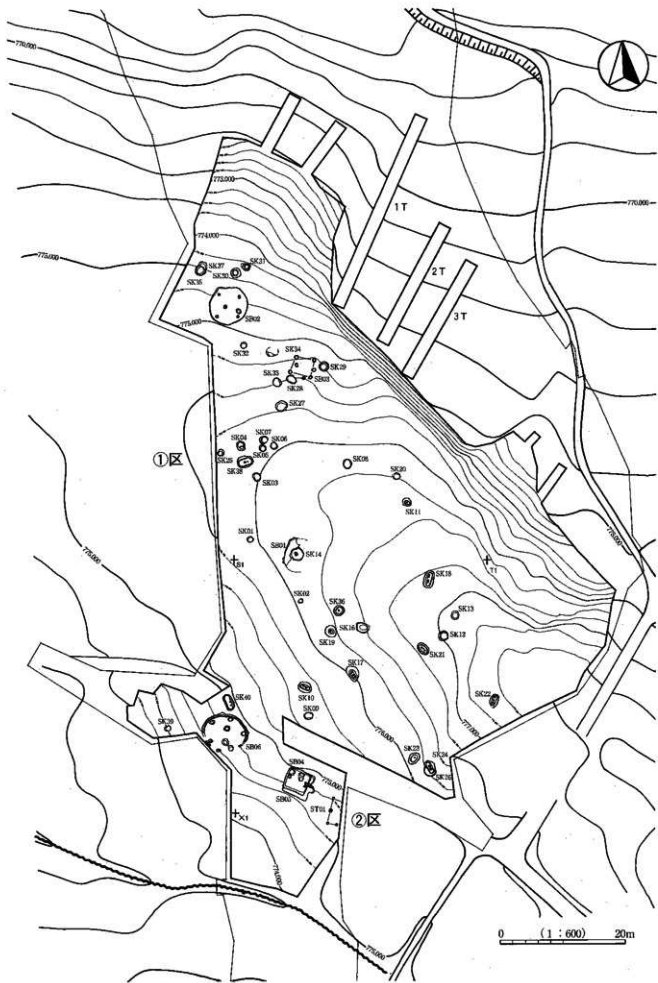
唐松B遺跡は千曲川右岸の段丘上に展開する遺跡である。段丘には幾筋もの尾根状地形（以下「尾根」という）があり、遺構は尾根頂部を中心に分布する。

遺跡は千曲川に流入する曾原川に面した北斜面を北限とし、段丘上から曾原川に流入する小河川を南限とする。白田町教育委員会の遺跡分布図では、尾根頂部のやや南側を東西に通る道路を遺跡の南限としているが、今回の調査によって、尾根頂部から南へ約25m下った小河川まで遺跡範囲が拡大した。

本遺跡が立地する段丘上には唐松A遺跡も分布するが、両遺跡ともこれまで発掘調査が実施されたことがなく、段丘上での歴史的な土地利用の実態は不明であった。本遺跡の既存資料としては縄文後期土器、平安時代の須恵器、中世のカワラケが採集されているのみであった。今回の調査では、縄文時代中期、弥生時代中期初頭、平安時代（9世紀）、平安時代以降の遺構と遺物に加え、縄文時代後期と中世の遺物が出土した。遺構は散在的ながら、調査区のほぼ全域に展開することが判明した。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡4軒と貯蔵穴と思われる土坑で構成される中期後葉の集落跡と、陥し穴がある。中期後葉の竪穴住居跡は尾根頂部（①区）を中心として、北側は尾根縁辺部、南側は尾根頂部から緩斜面に向かう地形変換点にかけて半円形にめぐり、その内側と東側に断面が袋状もしくはフラスコ状を呈するいわゆる「貯蔵穴」が分布する。竪穴住居跡は出土土器から加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定されるが、遺構間接合がなく、同時存在を証明することはできない。地形とこれらの遺構の分布から判断して、竪穴住居は直径約70mの範囲で環状に配置し、集落の中心部は調査区西側の尾根先端に存在すると推定される。したがって、今回の調査対象地は集落のなかでも東側に相当する。なお、竪穴住居跡出土炭化物の放射性炭素年代測定では、SB02床直上炭化物で $4,080 \pm 40$ 、 $4,120 \pm 40$ 、P1出土炭化物で $4,170 \pm 40$ 、SB06床直上炭化物で $4,190 \pm 40$ 、 $4,100 \pm 40$ 、 $4,040 \pm 40$ の年代（補正年代）が得られている（詳細は第5章参照）。陥し穴は調査区ほぼ全域に分布する。調査区を横断・縦断する複数の配列が見られ、尾根上を中心とした広範囲に狩猟域が展開していると考えられる。竪穴住居跡との切り合いはなく、加えて覆土からの出土遺物が皆無なため、陥し穴の時期や集落と狩猟域との関係を明確に捉えることはできなかった。なお、陥し穴出土炭化物の放射性炭素年代測定によると、SK22覆土最下層の炭化物層で $5,210 \pm 40$ 、SK36坑底ビッド出土炭化物で $4,190 \pm 40$ の年代（補正年代）が得られており、その結果からすると集落形成以前に狩猟域が展開していたことになる（分析結果の解釈は、第5章第3節参照）。SK24坑底ビッド出土炭化物では 890 ± 40 の年代（補正年代）が算出されているが、これについては調査成果との照合で検討の余地があるものである。

弥生時代の遺構は、尾根頂部で中期初頭の土器が出土した土坑を2基（SK01・02）確認した。SK02は耕作や攪乱の影響で遺存状況は悪いものの、壺を逆位に埋納しており、再葬墓と判断できるものである。SK01と02の覆土は酷似するため、SK02も再葬墓の可能性が高い。両遺構と酷似する覆土をもつ遺構は調査区内にはない。かかる状況から、遺跡内における当該期の墓は密集して墓群を形成するのではなく、尾根上に点在していると考えられる。



第7図 縄文時代以降の遺構分布図

平安時代以降の遺構は、尾根頂部から小河川にかけての南緩斜面（②区）で9世紀の竪穴住居跡が2軒確認された（SB04・05）。2軒とも同一主軸で、北壁と西壁がほぼ重複する入れ子状態で存在することから、SB04はSB05埋没後にプランを踏襲して構築されたと理解できるものである。周辺に当該期の遺構が確認されないことから、調査区の東西側に広がりつつ南緩斜面の狭い範囲に展開する小規模な集落と考えられる。

南緩斜面では掘立柱建物跡も検出されている。出土遺物がなく時期は不明であるが、本址とSB04の埋土は基本土層Ⅱ層を基調としていることから、平安時代以降のものだと判断した。

参考文献

長野県南佐久郡白田町教育委員会1988「白田町遺跡詳細分布調査報告書」

第2節 基本層序

基本層序は上位からⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層とした（第8図）。

Ⅰ層は耕作土もしくは表土で、縄文土器を採集することができる。

Ⅱ層は黒色土で、尾根頂部には認められず、曾原川を望む北斜面（第8図E）と②区中央部以南（第8図D・F・H）で確認できる。北斜面のⅡ層は曾原川上流から下流域に向かい厚く堆積した層で、遺跡南側の段丘上にある2箇所の谷状地形に堆積するⅡ層は河川堆積物である。堆積が厚い場所では、黒色化が顕著な下層（Ⅱb層）と上層（Ⅱa層）とに分けられる。遺物が出土していないため詳細な堆積時期は不明であるが、縄文中期の竪穴住居跡や弥生中期の土坑の覆土に含まれていないことと、平安時代以降のSB04・05とST01覆土が本層を基調としていることから、弥生中期以降～平安時代（9世紀）以前に堆積したものと考えられる。なお、尾根頂部から須恵器など平安時代の遺物が採集されているため、尾根頂部にもⅡ層が堆積していた可能性が高い。

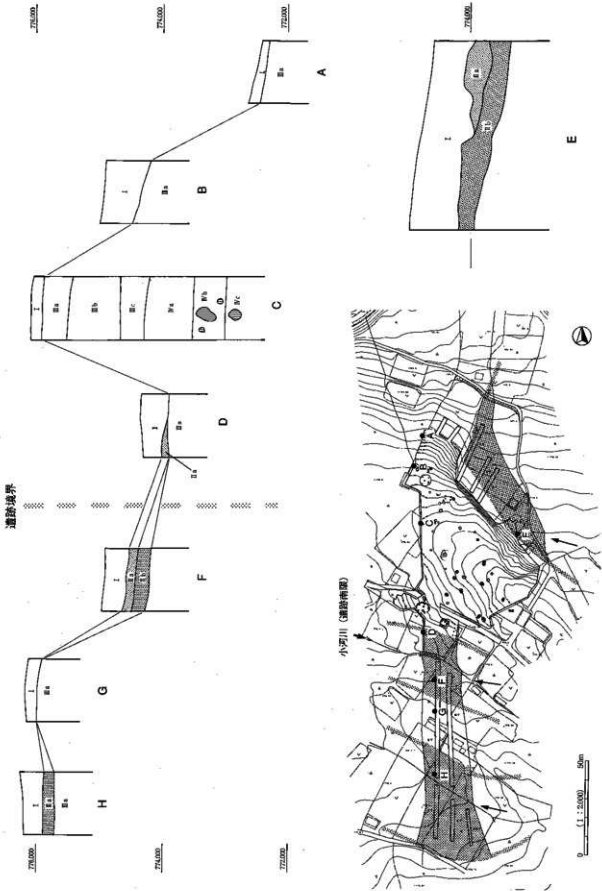
Ⅲ層はローム層である。ソフトローム層をⅢa層、ハードローム層をⅢb層とした。Ⅲa層は尾根頂部で約40cm（現存）の厚さをもち、上部はⅠ層の土壌化作用を受け暗褐色化する部分がある。Ⅲa層は黒曜石破片を伴う黄褐色軽石（以下「デカバミ」という）を含む。デカバミは主にⅢa層中位から下位にかけて多く混入し、団子状の散在も認められる。Ⅲb層は尾根頂部で約80cmの厚さをもち、上位に黒曜石破片を伴うデカバミも含む。Ⅲa層との境界は不明瞭で凹凸が著しい。Ⅲb層直下に堆積するⅢc層もハードローム層である。シルト化しているためⅢb層と区別したが、この分層は土壌化の程度によるもので堆積層位ではない。Ⅲc層の状態をみると、ハードローム層の下部は水の影響を受けた時期があったと考えられる。

Ⅳ層は暗褐色を帯びたシルト層である。Ⅳ層は①区深堀（第8図C）で確認されたのみで、堆積範囲は不明である。Ⅳ層は土質と色調、混入物の粗密等で分層した。Ⅳb層とⅣc層は安山岩礫を含んでいる。Ⅳb層には酸化鉄の集積が認められ、Ⅳc層は砂質を強く帯びる。Ⅳ層はローム層が水の影響でシルト化したもので、土壌化作用に起因するものと見られる。

引用・参考文献

興谷市教育委員会1974「原平遺跡」

八ヶ岳団体研究グループ1988「八ヶ岳山麓の第四系」



第8図 基本土層 (土層図1:60)

第3章 遺跡の概要

佐久町誌刊行会1990『佐久町誌』自然編上

長野県南佐久郡誌編纂委員会1994『南佐久郡誌』自然編上

(株)クボタ1994『URBAN KUBOTA』NO.33

八千穂村教育委員会1996『池の平遺跡群Ⅱ—八千穂村駒出池遺跡の尖頭器文化—』



唐松B遺跡を調査した人たち

第4章 各時代の遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 竪穴住居跡と出土遺物

縄文時代中期後葉の竪穴住居跡が4軒(SB01・02・03・06)確認されている。SB01は尾根頂部、SB02・03・06は尾根頂部から斜面にかけての縁辺部に立地し、調査区西側を中心として半円形に配置している。SB01は大半が攪乱で破壊されており、SB03はピットのみ遺存した。竪穴住居跡に切り合いはない。SB01を切る攪乱からは縄文土器が多数出土したが、これは本来SB01に帰属した遺物と判断される。遺物接合等整理の関係上、各攪乱に番号を付けて遺物を取り上げた。なお、総合的に出土遺物が少なく、覆土内出土または埋差など完形土器を根拠とした遺構の時期決定は困難である。遺構の時期は拓本等断片的な資料で判断した。本遺跡から出土した縄文中期後葉の土器には、縄文を地文とした土器と沈線文を地文とした土器の2種類が存在し、後者は所謂佐久系土器と呼称されている鱗状短沈線文を施文したものと、所謂曾利系土器と言われる鏡形に沈線文を施文したものとに分けられる。唐松B遺跡における土器組成を見ると、縄文地文と鱗状短沈線文地文の土器が主体を占め、曾利系土器の割合は極めて少ない。したがって、遺構の時期決定においては、縄文を地文とした加曾利E系土器を基準とすることとし、本稿では埼玉編年に依拠して遺構の時期決定を行う。

SB01 (第9図、PL2・11) [I N21・22, S1・2グリッド]

位置: 調査区(①区)中央部やや西側に位置し、尾根頂部に立地する。

重複: 本址中央部をSK14が切る。本址西側を除く大半が攪乱5で削られており、遺存状況は悪い。

検出: 本調査に先行して調査区ほぼ全域に重機でトレンチを掘削した際、縄文土器を含む暗褐色土の円形の落ち込みが確認された。重機で表土を剥ぎ、Ⅲa層上面での精査でプランを検出した。本址中央東側はロームブロックを多量に含む攪乱5で壊されていたため、半円形のプランが確認されたに過ぎない。サブトレンチで床面及び壁の立ち上がりを確認され、縄文土器が出土したことから竪穴住居跡と判断した。土層断面で本址とSK14の新旧関係が把握できたことから、覆土の掘り下げを実施した。

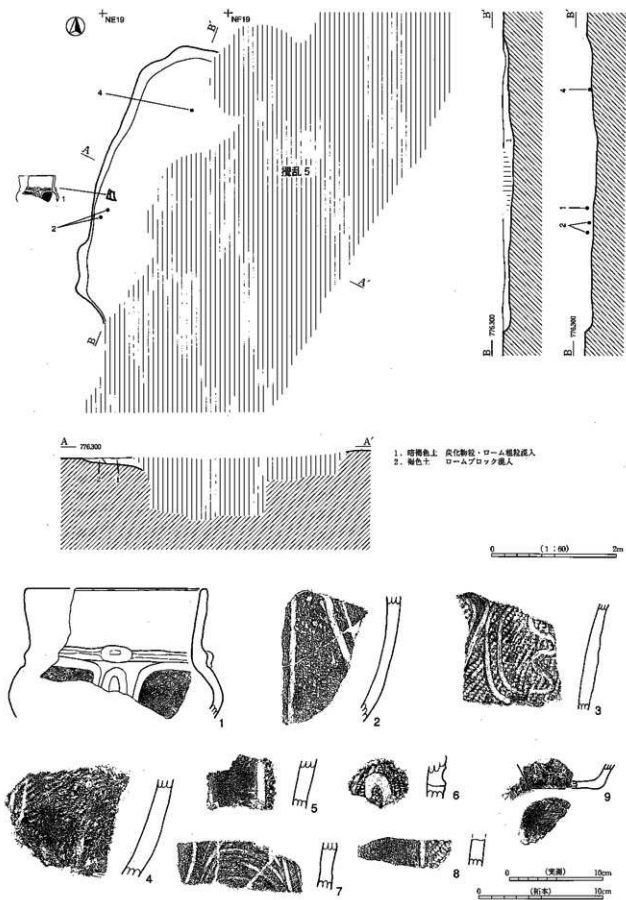
規模・形状: 遺存部分の形状と本址が攪乱5の東側までの広がりがなく、約5mの不整形円形と推定される。現存床面積は4.8㎡、想定床面積は17.9㎡である。長軸は不明。

覆土: 2層に分層された。1層は炭化物粒とローム粗粒を含む暗褐色土で、縄文中期後葉の土器が出土。壁際の2層はロームブロックを含む褐色土である。

床面・壁: 掘り込んだⅢa層を平坦な床面とする。細かな凹凸があり、壁際から中央部に向かい若干傾斜する。壁は耕作の影響で遺存状況が悪く、約10cmの壁高を測るに過ぎない。立ち上がりは床面付近の立ち上がりが確認されたのみである。

炉・柱穴: 確認されない。攪乱部分に存在したと考えられる。

出土遺物: 覆土には縄文中期後葉の土器が含まれており、土器は床面から約5cm上位で出土した。総重量



第9図 SB01実測図・出土遺物

1,094g・24片出土。1～6・8は縄文、7は沈線文を地文とした土器である。1は胴部を沈線文で方形し内部に縄文を施文する鉢で、2は同一個体と思われる。3は縄文施文後にU字形区画沈線文と蛇行沈線文を施す。7は本址を切るSK14出土遺物と接合したもので、区画内に羽状に短沈線文を施文。

時期：縄文中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SB02（第10～12図、PL2・11）〔IH25、I21、M5、N1グリッド〕

位置：調査区（①区）北側にあり、尾根部から曾原川に面した斜面の縁辺部に立地する。

重複：なし。本址北側一角は攪乱で壊されている。

検出：重機で表土を剥いだⅢa層上面で、黒褐色土の円形の落ち込みが確認された。本址付近は耕作の影響で地山が変色しており、Ⅲa層との境界が不明瞭であった。精査ではⅢa層上面を若干下げて円形のプランを検出した。黒褐色土から縄文土器片が出土した。サブトレンチで床面及び壁の立ち上がり確認されたことから、竪穴住居跡と判断した。トレンチでは床直上に炭化物が広範囲に堆積しており、炭化物層上位で遺物の出土が確認された。

規模・形状：5.9×6.1mの円形を呈するが、北西側はやや突出する。床面積は29.1㎡である。長軸はN-83°-Wである。柱穴と炉の配置から、東側に出入口が存在したものと推定される。

覆土：5層に分層された。3層は炭化材を多量に含む黒褐色の炭化物層で、約10cmの厚さで柱穴（P1～4）に囲まれた内部を中心に分布する。4・5層は壁際に堆積したローム主体層である。3層上面に硬化面はなく、使用痕跡はない。炭化物層は壁際が埋没した後堆積しており、埋没過程で投棄された有機質と判断される。炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を行い、樹種はクリと判明した（第5章参照）。

床面・壁：掘り込んだⅢb層を平坦な床面とするが細かい凹凸がある。柱穴に囲まれた範囲がやや高く、壁際が若干低まる。壁は南壁で32cmの壁高を測り、垂直に立ち上がる。

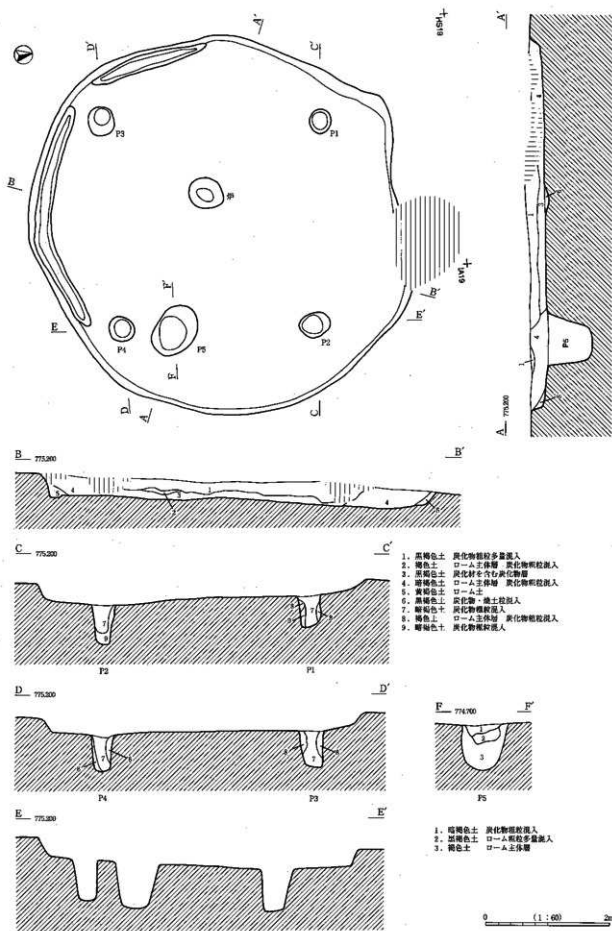
炉：柱穴に囲まれた中心部やや西側にある掘り込みが位置的に炉と思われる。46×50cmの円形を呈し深さは10cm弱で浅いものである。埋土は単一層で、焼土粒が混入する黒褐土が堆積する。炉石抜き取り痕や被熱痕跡認められず、明瞭な焼土層が堆積しないことから、炉と断定し兼ねる。

柱穴：床面で5基のピット（P1～5）が検出された。そのうち規模・形状から柱穴は4基（P1～4）で、柱穴の間隔は、P1-2が3.26m、P1-3が3.46m、P3-4が3.39m、P2-4が3.05mを測り、出入口部に想定される東面が狭く、対面の西面が広い。掘り方は床面から52～66cmの深さがある。すべての柱穴で柱痕（7層）が確認され、出土炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した。樹種はクリと判明した（第5章参照）。

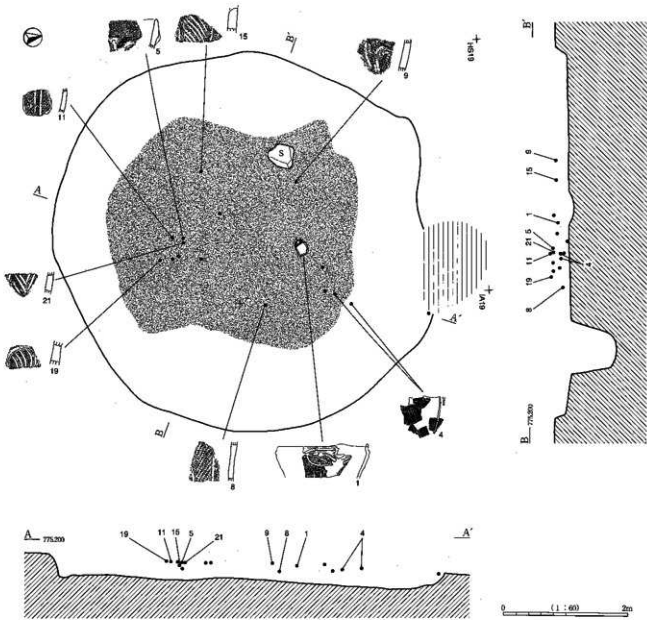
周溝：南西側のみ部分的にあり、P3と近接する部分は途切れている。周溝にはローム主体層（5層）が堆積する。なお、北東側の壁際も低まるが、幅広く落ち込みが不明瞭なため周溝とは認められない。

その他の施設：埋甕はなく、位置的にP5が埋甕埋設土坑と推定される。ただし、P5は柱穴を越える規模を有しており、埋甕埋設時の掘り込みではなく、埋甕を抜き取る際に掘削したものと思われる。3層はローム主体層で人為的に埋め戻したと判断される。

出土遺物：遺物は主に3層（炭化物層）上位の1層に含まれており、特に1層下部から中位にかけて出土した。3層には遺物が含まれていない。総重量2,408g・110片出土。1・7・8・10～12は縄文、その他は沈線文を地文とするが、2・3の地文は不明。胎土から縄文と思われる。1は1層最下部から出土した深鉢で、縄文を施文した後に口縁部に楕円区画沈線文、胴部に縦区画沈線文と蛇行沈線文を施文。2は波状口縁、4は縄文後期初頭の土器で、薄手で器面を3条の縦沈線文で数単位に区画。縄文の施文はない。6は口縁部の楕円区画内に縦沈線文を施文、19は楕円区画内に鱗状短沈線文を施文、20・21は胴部に「ハ」



第10図 SB02実測図



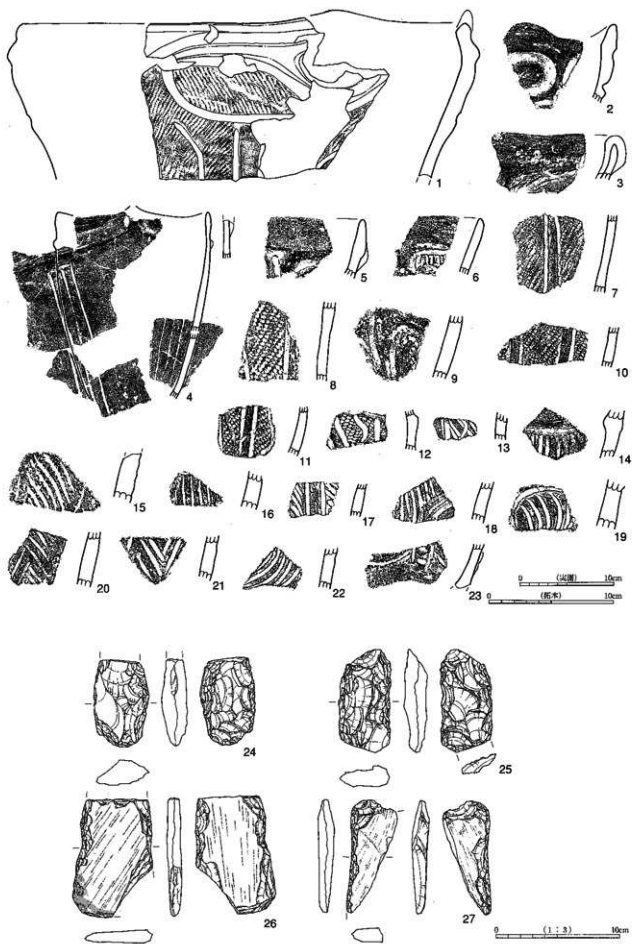
第11図 SB02遺物出土状況

の字状短沈線文を施文する。23は刻目隆帯で、器面に鱗状短沈線文を施文。なお、4は調査時には本址に伴うものと考えていたが、整理時での検討で覆土を切る攪乱に含まれていた土器の可能性が高いことが判明した。24～27は1層出土の打製石斧である。24・25は安山岩製で基部が欠損する。剥離に磨耗痕がなく、使用した痕跡が認められない。26は花崗斑岩製、27は凝灰質砂岩製で、26は基部が欠損し先端部に磨耗痕跡が認められる。図化していないが、このほかに覆土から黒曜石製の剥片と安山岩製と思われる剥片が出土している。

時期：縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SB03（第13図、PL2・3・11）[IN2・7グリッド]

位置：調査区①区北側にあり、尾根部から曾原川に面した斜面の縁部に立地する。



第12図 SB02出土遺物

重複：なし。本址はピットのみ遺存するが、掘り込みが存在した場合、SK28・29との切り合いが想定される。

検出：現耕作土を剥いだⅢ a層上面で、縄文土器を含むピット状の落ち込み（P2）が確認され、周囲に同規模のピットが分布した。精査によりピットが規則的に配列することが確認されたため、掘り込みが削平された堅穴住居跡と判断した。

規模・形状：掘り込みが遺存しないため不明。柱穴の位置から、長軸はN-78°-Wで、東側に出入口が存在したと考えられる。本址は、柱穴間隔と同時期のSB02・06からすると、径約5mを有し円形に近い堅穴住居跡であったと推測される。

覆土・床面・壁・炉：遺存しない。

柱穴：精査では7基のピットが確認された。そのうち、規模・形状から柱穴は4基（P1・3・5・6）で、柱穴間隔はP1-2が2.53m、P5-6が2.33m、P1-6が2.8m、P3-5が3.3mを測り、東西に長軸をもつ長方形に配置する。

その他の施設：P2は位置的に埋裏埋納土坑と考えられる。

出土遺物：P2より縄文中期後葉の土器が出土。総重量779g・16片出土。1・3が縄文、その他は沈線文を地文とする。1は波状口縁部の深鉢の口縁部で、楕円区画内に縄文を施文、2は口縁部が若干内傾し、口縁部と胴部に櫛状工具による沈線文が施文されている。2・4～8は同一固体と思われ、埋裏と推測される。9は色調と胎土が異なり、胴部に羽状沈線文が施文されている。

時期：縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SB06（第14～16図、PL3・4・11）〔I R20、SI6グリッド〕

位置：調査区（②区）北側に位置し、尾根部と南緩斜面の縁辺部に立地する。今まで遺跡範囲に含まれておらず、今回の調査で範囲が拡大した場所から確認された遺構である。

重複：なし。

検出：現耕作土を剥いだⅢ a層上面で、縄文土器片を含む暗褐色土の円形の落ち込みが確認された。本址付近は耕作土の影響でローム層が褐色に変色しており、覆土とⅢ a層との境はやや不明瞭であった。精査ではⅢ a層上面を若干下げてプランを検出した。サブレンチで床面及び壁の立ち上がりとし組み炉が確認されたことから、堅穴住居跡と判断した。本址は、耕作の影響で掘り込みの大半が削平されており、覆土の一部と周溝・柱穴・炉が遺存したに過ぎない。

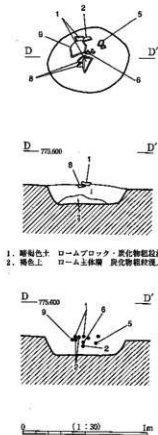
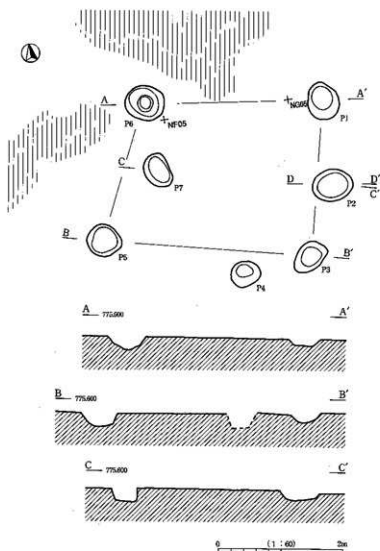
規模・形状：掘り込みが遺存しないため詳細は不明であるが、周溝からすると、約6.4×約6m規模で東西に長軸をもつ楕円形を呈したものと推測される。周溝上端縁を計測した床面積は約29.9㎡である。長軸はN-20°-Eである。柱穴と炉の配置から、南側における出入口の存在が想定される。

覆土：本址中央部から北側に炭化物と焼土ブロックを含む暗褐色土が遺存した。

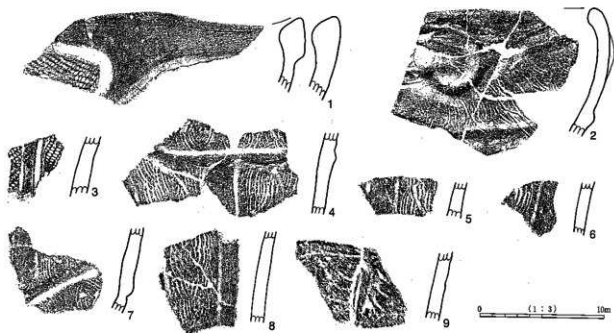
床面・壁：掘り込んだⅢ a層を平坦な床面とするが、柱穴もしくは壁際に凹凸がある。P3西側の床約8cm上位には炭化物と焼土が分布する。出土炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施した（第5章参照）。本址南側は耕作が床面まで及ぶ。遺存する北壁の壁高は約15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上る。

炉：中央やや北側にある。4個の炉石を用いた石組み炉で、炉石は被熱のため大変脆い。炉内底部には焼土（3層）が堆積し、地山が被熱により変色（5層）する。掘り方は約80cm四方で、深さ約20cmを測る。炉石下部にのみ掘り方（4層）が残る。

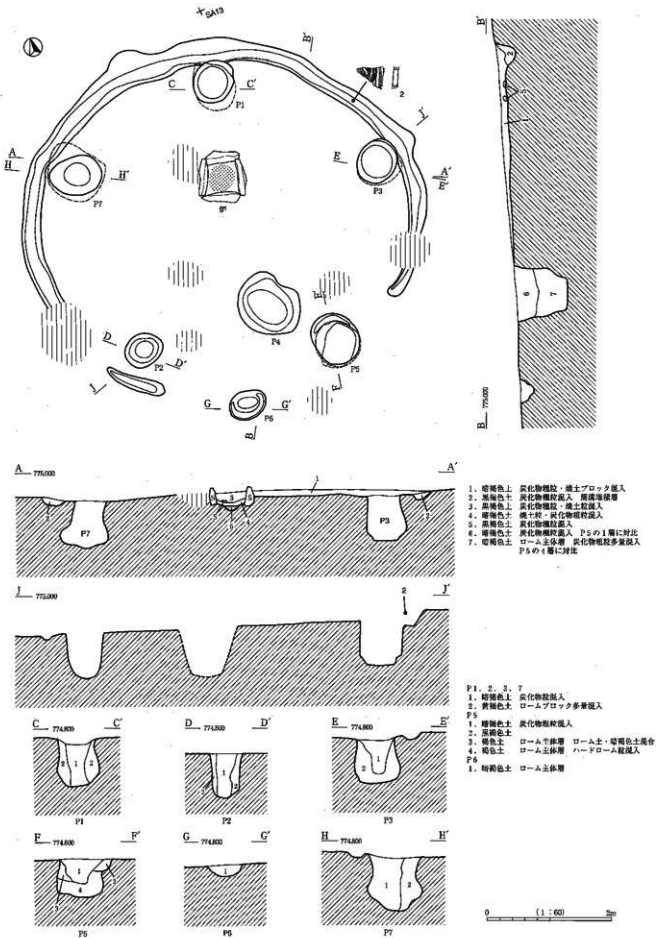
柱穴：床面で7基のピットが検出された。そのうち規模・形状からみて、柱穴はP1～3・5・7の5基で、2.5～3.1m間隔で配置する。P1・3・7は周溝と切り合う。柱穴間隔は、出入口が想定される南側が広



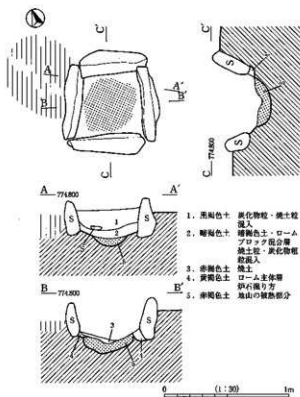
1. 暗褐色土 ロームブロック・炭化物能粒混入
2. 褐色土 ローム土体層 炭化物能粒混入



第13図 SB03実測図・出土遺物



第14図 SB06実測図



第15図 SB06炉実測図

く、入り口対面が若干狭い。柱穴掘り方は床面から70～80cmの深さがあり、P1～3・7断面では柱痕が確認された。柱穴底部は柱痕下部が若干掘り込まれており、さらに袋状に外側に張り出す特徴がある。周溝：耕作で削平された南側一角を除き壁際に全周する。ローム粒を含む暗褐色土が堆積する。埋塞：なし。位置的にP6が埋塞埋設土坑と考えられる。

その他の施設：炉とP6を結んだ主軸線上やや東側に柱穴を越える規模の落ち込み(P4)がある。埋土は覆土1層を基調とした土であり、覆土堆積時もしくはその直前には埋没している。本址に帰属することは間違いないが、性格は不明である。

出土遺物：覆土1層より縄文中期後葉と後期初頭の土器が出土した。総重量78g・9片出土。1は短沈線文、2は「ハ」の字状短沈線文を施文する。3は遺構検出面から出土した細密な縄文を施文する後期初頭の土器である。3は薄手で縄文中期土器と明らかに胎土が異なる。検出時には本址覆土と耕作土との

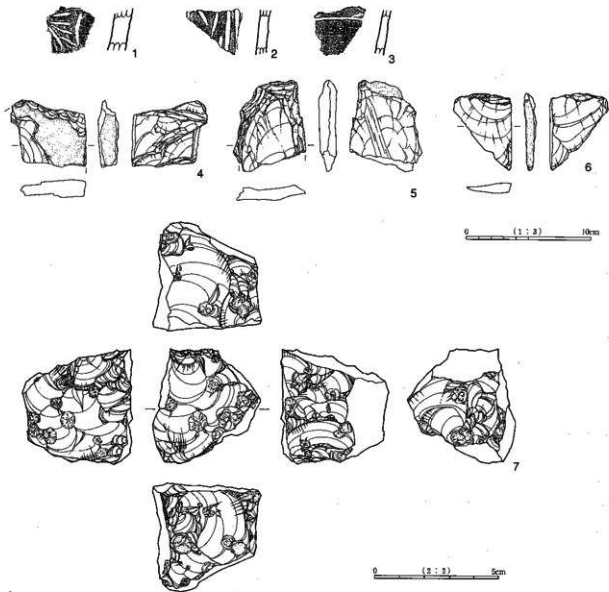
境界が全体的に不明瞭であったため、混入したものと判断される。4・5は打製石斧の破片と思われる。5には草木化石が残る。6は剥片、7は1層から出土した黒曜石製の石核である。固化していないが、このほかに覆土とP4・7・炉内から黒曜石製の剥片、P1から剥片が出土している。

時期：遺物が僅少なため時期決定が困難であるが、縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式(新段階)並行期に比定される。

2 陥し穴と出土遺物

唐松B遺跡では12基の陥し穴が確認された。①区北斜面と②区南緩斜面の南側を除き、ほぼ調査区全域に分布する。このなかで縄文中期の土器が出土し、放射性炭素年代測定で縄文中期後葉頃の年代(数値)が得られたSK36は調査区中央の尾根頂部、放射性炭素年代測定で縄文前期後半頃の年代(数値)が得られたSK22は尾根頂部でも最も高い場所に分布する。11世紀頃の年代(数値)が得られたSK24は尾根頂部から若干南緩斜面側に位置する。

遺構調査は覆土を2分割して掘り下げる従前の方法をとったが、坑底ピットの存在を坑底精査のみで判断することが困難と判断し、ピットの有無は断ち割り調査により最終的な判断を下すこととした。基本的に覆土完掘時点ではピット上端線を記録し、重機による断ち割りでピットの断面と掘り方を記録する調査方法を採用した。放射性炭素年代測定用の試料は、覆土もしくは坑底ピット内から炭化物を抽出し、即アルミホイールに保管した。



第16図 SB06出土遺物

SK10 (第17図、PL5・6) [I S12グリッド]

位置：①区南側に位置し、尾根頂部から南緩斜面の向かう場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：224×116cm、深さは88cmを測る。平面形は上縁部が楕円形、坑底は四隅がほぼ直角に屈曲し、中央が若干狭まる長方形を早する。

主軸方向：N-67°-Wを指し、地形の傾斜に斜行する。

壁：坑底から中位下位まではほぼ垂直に、それより上位は短辺が開き気味に、長辺は緩やかに立ち上がる。長辺と短辺とで壁の傾斜が異なる。

坑底：平坦で、径8～26cm、深さ34～45cm、断面が円筒形の坑底ビットが3基ある。主軸線より東側にずれて配列する。

覆土：15層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土で自然堆積である。黄褐色土のローム主体層（4・

9層)は崩落土で、ロームブロック・黒褐色土混合層(7・8層)は人為的に埋め戻したものである。13~15層は坑底ピットの埋土で、P1・3はローム土(14層)と締まりがない暗褐色土(13層)に分層された。土層断面から、P3は上方に向かい開く状態で複数の逆茂木を埋設し、逆茂木とピットとの空白部にロームを詰めて固定したものと考えられる。埋設方法はP1・3と単一層のP2とで異なり、P2は逆茂木を直接埋設した可能性もある。

出土遺物：なし。

SK11 (第17図、PL6) [I N19グリッド]

位置：①区中央やや北側に位置し、尾根頂部付近に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：146×125cm、深さは93cmを測る。平面形は上縁部が楕円形に近く、坑底は中央が狭まる長方形を呈する。掘形に近い。

主軸方向：N-69°-Wを指し、地形の傾斜に斜行する。

壁：坑底から中位下位までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦で、下端幅が狭まる中央部に径12cm、深さ30cm、断面が円筒形の坑底ピットが1基ある。

覆土：本址上部に他陥し穴の最上部に堆積する黒褐色土、壁際にローム主体層が堆積するが、詳細な堆積状況は不明。坑底ピットにはローム主体層が堆積する。

出土遺物：なし。

SK17 (第17図、PL7) [I S13グリッド]

位置：①区中央南側、尾根頂部から南緩斜面に向かう場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。本址西側に掘削が及ぶ。

規模・形状：267×175cm、深さは84cmを測る。平面形は上縁部が楕円形、坑底が隅丸長方形を呈する。

主軸方向：N-37°-Wを指し、地形の傾斜に平行する。

壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦で、径10~14cm、深さ31~47cm、断面が円筒形の坑底ピットが6基ある。ピットは3基ずつ2列に配列する。このような配列は、茅野市馬捨場遺跡(SK291)でも確認されている。

覆土：9層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土で自然堆積、4層はロームと暗褐色土の混合層で人為埋没、壁際と底部に堆積するローム主体層(2・5・7層)は崩落土と思われる。8・9層は坑底ピット埋土である。ローム粗粒が混入する暗褐色土(8層)は逆茂木、ローム土(9層)は逆茂木を固定するために詰めたものと考えられる。

出土遺物：なし。

SK18 (第17図、PL7) [I S4グリッド]

位置：①区中央部にあり、尾根頂部に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。西側一角に掘削が及ぶ。

規模・形状：278×150cm、深さは113cmを測る。平面形は上縁部が隅丸長方形、坑底は長方形を呈する。

主軸方向：N-12°-Eを指し、地形の傾斜に斜行する。

壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦である。坑底南壁は明瞭に直角に屈曲し、隅はやや張り出す。何かを付設した痕跡とも考えられる。坑底には径14~23cm、深さ23~38cm、断面が円筒形の坑底ピットが4基ある。ピットは主軸線よりやや西側にずれて配列する。

覆土：13層に分層された。1・2層は黒褐色土で自然堆積、4~8層はローム主体層で基本的に崩落土と考えられる。坑底付近には広範囲に炭化物層（10層）が堆積する。本址底部直上にローム土が堆積した直後に本址上部を被覆した有機質（草木類）が崩落したものと考えられる。12・13層は坑底ピット埋土である。炭化物を含む黒褐色土（12層）は逆茂木、ローム土（13層）は逆茂木を固定するために詰めたものと考えられる。P4には複数の逆茂木を埋設する。

出土遺物：なし。

SK19（第17・23図、PL8）〔I S7グリッド〕

位置：①区中央やや南側に位置し、尾根頂部付近に立地する。

検出：Ⅲa層上面。

重複：なし。

規模・形状：192×171cm、深さは119cmを測る。平面形は上縁部が円形、坑底は中央が狭まる方形を呈する。撥形に近い。

主軸方向：N-60°-Wを指し、地形の傾斜に斜行する。

壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦で、下端幅が狭まる中央部に径12cm、深さ24cm、断面が円筒形の坑底ピットが1基ある。

覆土：10層に分層された。炭化物粗粒が混入する黒褐色土（1層）は自然堆積、壁際（2・5層）と底部（9層）に堆積するローム主体層は崩落土と考えられる。10層は坑底ピット埋土で、ローム主体層が堆積する。

出土遺物：63は覆土中位より出土した黒曜石製の縦長剥片で、微細な剥離がある。先端部は欠損している。ローム層の掘り下げで石器は確認されていないが、縄文遺構からこれに類する石器が出土していないため、旧石器の可能性もある。

SK21（第17図、PL8）〔I S9グリッド〕

位置：①区中央やや東側に位置し、尾根頂部に立地する。

検出：Ⅲa層上面。

重複：なし。

規模・形状：214×146cm、深さは104cmを測る。平面形は上縁部、坑底とも楕円形を呈する。

主軸方向：N-49°-Wを指し、地形の傾斜に平行する。

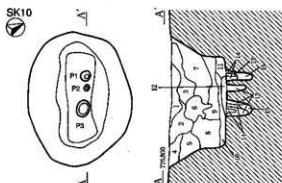
壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は傾斜しつつ立ち上がる。他陥し穴と比べて壁中位の傾斜変換点が不明瞭である。

坑底：平坦で、径15~17cm、深さ21~29cm、断面が円筒形の坑底ピットが3基ある。主軸線に沿って縦列する。

覆土：12層に分層された。1・2層は黒褐色土で自然堆積、壁際（5・7層）と底部付近（8層）に堆積するローム主体層は崩落土と考えられる。SK18同様、坑底直上に薄く堆積するローム土（10層）直上に炭

第4章 各時代の遺構と遺物

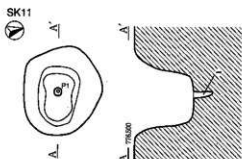
SK10



1. 黒褐色土 ローム粗粒・炭化物散入 黒色化顕著
2. に近い黄褐色土 炭化物粗粒散入
3. 暗褐色土 炭化物粗粒散入
4. 褐色土 ローム中体層 ローム粗粒入
5. 暗褐色土 ローム上体層 ローム上・ローム粗粒混入
6. 黒褐色土 炭化物粗粒散入
7. 暗褐色土 褐色土下ブロック混合層
8. 暗褐色土 ローム主体 炭化物粗粒散入

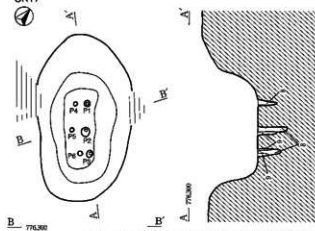
9. 褐色土 ローム上体層
10. 黒褐色土 ローム粗粒少量散入
11. に近い黄褐色土 ローム粗粒・ロームブロック混合層
12. 褐色土 ローム主体層 硬化し底面直上での粘り付き層
13. 暗褐色土 粘まりない
14. 褐色土 ローム中体層
15. 暗褐色土 ローム(混)主体層

SK11



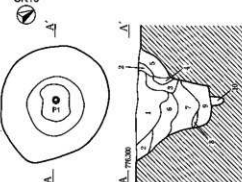
1. 黒褐色土 炭化物粗粒散入

SK17



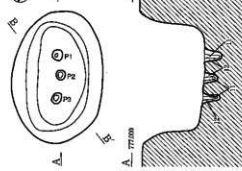
1. 黒褐色土 炭化物粗粒散入 黒色化顕著
2. 褐色土 ローム主体層 ロームブロック多量散入
3. に近い黄褐色土 ローム主体層
4. 暗褐色土 暗褐色土・ローム粗粒混入層
5. 褐色土 ローム上体層 炭化物粗粒多量散入
6. に近い黄褐色土 ローム主体層 炭化物散入
7. 褐色土 ローム主体層
8. 暗褐色土 粘まりない
9. 褐色土 ローム主体層

SK19



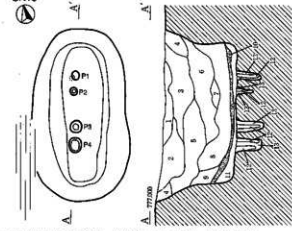
1. 黒褐色土 炭化物粗粒散入 黒色化顕著
2. に近い黄褐色土 ローム主体層
3. 暗褐色土 暗褐色土
4. 褐色土 ローム主体層
5. 褐色土 ローム主体層 炭化物粗粒散入
6. 褐色土 ローム主体層
7. 暗褐色土 ローム下体層 ロームブロック多量散入
8. 黒褐色土 ローム土層薄く
9. 褐色土 ローム粗粒多量散入
10. に近い黄褐色土 ローム主体層

SK21



1. 黒褐色土 炭化物粗粒 黒色化顕著
2. 暗褐色土 炭化物散入
3. 暗褐色土 炭化物散入
4. 暗褐色土 ロームブロック散入
5. に近い黄褐色土
6. 褐色土 ローム主体層 ソフトローム・ハードローム混合層
7. 褐色土 ローム主体層 ローム粗粒・炭化物散入
8. 暗褐色土 ローム主体層
9. 黒褐色土 黒色化 草木根が土壌化したものか
10. 褐色土 ローム主体層 深く締まる
11. 暗褐色土 粘まりない
12. 褐色土 ローム下体層

SK18



1. 黒褐色土 炭化物粗粒散入 黒色化顕著
2. 暗褐色土 暗褐色土
3. 暗褐色土 暗褐色土・炭化物散入
4. に近い黄褐色土 ローム主体層
5. 褐色土 ローム上体層
6. 褐色土 ローム粗粒混合層
7. 褐色土 ローム主体層 ローム粗粒・黒色土散入
8. 褐色土 入・暗褐色土
9. 褐色土 ローム主体層
10. 褐色土 硬部に厚く堆積する炭層
11. 褐色土 ローム主体層
12. 暗褐色土 粘まりない
13. 褐色土 ローム主体層

第17図 陥し穴実測図1

化物層（9層）が堆積しており、本址上部を被覆した有機質（草木類）が崩落したものと思われる。11・12層は坑底ビット埋土で、炭化物を含む黒褐色土（11層）は逆茂木、ローム土（12層）は逆茂木を固定するために詰めたものと考えられる。

出土遺物：なし。

SK22（第18図、PL8）〔I T11グリッド〕

位置：①区東側に位置し、尾根頂部でも最も高い場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。北側と南側は調査前まで存在した建物の基礎（礎石）が及び破壊されている。

規模・形状：194（現存）×129（現存）cm、深さは111cmを測る。平面形は上縁部が隅丸長方形、坑底は長方形を呈する。

主軸方向：N-24°-Eを指し、地形の傾斜にやや斜行する。

壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は傾斜しつつ立ち上がる。他陥し穴と比べて壁中位の傾斜変換点が不明瞭である。

坑底：平坦で、径18～26cm、深さ22～26cm、断面が円錐形の坑底ビットが3基ある。主軸線に沿って縦列する坑底ビットは中心部で断ち割られていないため、本来は円筒形であったものと判断される。

覆土：10層に分層された。1層は黒色土で自然堆積、1層下層に堆積するローム主体層（4～6層）は崩落土と考えられる。坑底付近には広範囲に炭化物層（7層）が堆積する。底部直上にローム土（8層）が堆積した直後に本址上部を被覆した有機質（草木類）が崩落したものと考えられる。8層は硬化するため、8層上面が底部の可能性も想定したが、8層下面で坑底ビットが検出されたことから堆積物と判断した。なお、炭化物については放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、年代測定は5,210±40（補正年代）の数値が得られ、樹種はクリと判明した（詳細は第5章参照）。9・10層は坑底ビット埋土である。坑底ビットはローム土（10層）と締まりがない暗褐色土（9層）に分層され、土層断面から、ビット掘削後に逆茂木（9層）を埋設し、逆茂木とビットとの空白部にローム土（10層）を詰めて固定したものと考えられる。

出土遺物：なし。

時期：放射性炭素年代測定では、縄文時代前期後半頃の年代（数値）が得られているが、これは試料の伐採年代を示しているもので、本址の帰属時期と捉えることはできない。

SK23（第18図、PL8・9）〔I S19・24グリッド〕

位置：①区南東側に位置し、尾根頂部から南緩斜面に向かう場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：209×153cm、深さは78cmを測る。平面形は上縁部が楕円形、坑底は隅丸長方形を呈する。

主軸方向：N-41°-Eを指し、地形の傾斜に斜行する。

壁：坑底から中位下部までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦で、中央部に径18cm、深さ42cm、断面が円筒形の坑底ビットが1基ある。

覆土：8層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土、2層はロームブロックを含む黒褐色土主体層で自然堆積、壁際と底部付近に堆積するローム主体層（3・4層）は崩落土と考えられる。坑底直上にローム土（6層）、その直上に炭化物が土壌化した黒色土（5層）が底部一面に堆積する。5層は本址上部を被覆した有機質（草木類）が崩落したものと考えられる。6層は固く締まるため、6層上面が底部の可能性

を考えたが、6層下面で坑底ビットが検出されたことから堆積物と判断した。7・8層は坑底ビット埋土である。締まりがない暗褐色土（7層）は逆茂木、ローム土（8層）は逆茂木埋設時に詰めたと考えられる。

出土遺物：なし。

SK24（第18図、PL9）〔I S19・24グリッド〕

位置：①区南東側に位置し、尾根頂部から南緩斜面の向かう場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：SK26を切る。

規模・形状：221（現存）×148（現存）cm、深さは83cmを測る。平面形は上縁部が楕円形、坑底は中央部が狭まる長方形を呈する。

主軸方向：N-27°-Wを指し、地形の傾斜に平行する。

壁：坑底から中位下位までほぼ垂直に、それより上位は長辺が緩やかに、短辺は開き気味に立ち上がる。

坑底：凹凸が見られるが平坦である。坑底の四隅は明瞭に直角に屈曲し、壁は垂直に立ち上がる。下端幅が狭まる中央部に径27~31cm、深さ42~46cm、断面が円筒形の坑底ビットが2基ある。

覆土：8層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土で自然堆積、壁際と底部に堆積するローム土は崩落土と考えられる。6~8層が坑底ビット埋土である。埋土は締まりのない暗褐色土（6層）とローム土（5・8層）に分層された。土層断面からビット掘削後にビット壁際に2本の逆茂木を埋設し、逆茂木間にローム土を詰めて固定したものと考えられる。8層出土の炭化物については放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、年代測定では890±40（補正年代）の数値が得られ、樹種はクリと判明した。（詳細は第5章参照）。

出土遺物：なし。

SK36（第18・23図、PL10・11）〔I S2・3・7・8グリッド〕

位置：①区中央部に位置し、尾根頂部に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：168×155cm、深さは73cmを測る。平面形は上縁部、坑底とも方形を呈する。

主軸方向：N-40°-Eを指し、地形の傾斜に直交する。

壁：坑底から中位下位までほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がる。

坑底：平坦である。四隅は直角に屈曲し、外側に張り出す傾向がある。何かを付設したものと考えられる。中央部に径22cm、深さ27cm、断面が円錐形の坑底ビットが1基ある。ただし、ビット中心部で断ち切っていないため、本来は円筒形であったものと考えられる。

覆土：最上部に自然堆積と考えられる炭化物を含む黒褐色土、壁際と底部に崩落土と考えられるローム土主体層が堆積する。詳細な堆積状況は不明。1層は坑底ビット埋土で、ローム土主体層が堆積する。1層出土の炭化物については放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、年代測定では4,190±40（補正年代）の数値が得られ、樹種はクリと判明した。（詳細は第5章参照）。

出土遺物：覆土より縄文中期後葉の土器が出土した。総重量6g・2片出土。57は隆帯下部に平行沈線文、上部に羽状沈線文を施文、58は隆帯下部に短沈線文を施文。

時期：縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式に比定される。

SK38 (第18図、PL10) [I N11・16グリッド]

位置：①区西側に位置し、尾根頂部に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：254×179cm、深さは51cmを測る。平面形は上縁部が楕円形、坑底が長方形を呈する。

主軸方向：N-74°-Eを指し、地形の傾斜に平行する。

壁：坑底から中位下位までほぼ垂直に、それより上位はやや傾斜をもって立ち上がる。他陥し穴と比べて壁中位の傾斜変換点が不明瞭である。

坑底：平坦で、中央部に径11~28cm、深さ16~36cm、断面が円錐形の坑底ピットが2基ある。ただし、ピット中心部を断ち割っていないため、本来は円筒形を呈していたものと考えられる。

覆土：9層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土で自然堆積、壁際と底部に堆積するローム主体層（5~7層）は崩落土と考えられる。8・9層は坑底ピット埋土である。P1では中央部に締まりのない暗褐色土（8層）、8層周囲にローム土（9層）が堆積しており、ピット掘削後に逆茂木（8層）を埋設し、ピットと逆茂木との空白部にローム土を詰めて固定したものと考えられる。

出土遺物：なし。

SK40 (第18図、PL10) [I R15グリッド]

位置：②区北側、調査前には遺跡範囲外となっていた現道路直下に位置し、尾根頂部から南緩斜面に向かい緩やかに傾斜する場所に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：なし。

規模・形状：259×128cm、深さは56cmを測る。平面形は上縁部が隅丸長方形、坑底は長方形を呈する。

主軸方向：N-74°-Wを指し、地形の傾斜に平行する。

壁：坑底から中位下位までほぼ垂直に、それより上位はやや傾斜をもって立ち上がる。特に東壁は壁中位の傾斜変換点が不明瞭である。

坑底：平坦で、中央部に径11cm、深さ30~40cm、断面が円筒形の坑底ピットが2基ある。

覆土：5層に分層された。1層は炭化物を含む黒褐色土で自然堆積、壁際に堆積するローム主体層（4層）は崩落土と考えられる。5層は坑底ピット埋土で、ピットには黒褐色土が堆積する。埋土が分層できないことから、埋め込み方法で埋設したものと考えられる。

出土遺物：なし。

3 その他の土坑と出土遺物

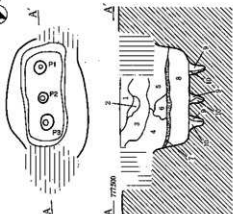
縄文時代に比定されるその他の土坑は25基確認され、ほぼ調査区全域に分布する。土坑は半円形に配置する堅穴住居跡の内部もしくは付近に分布し、特に尾根頂部から北斜面にかけての範囲に集中する。平面形は上端と下端とも円形で底部は平坦、断面が袋状もしくはフラスコ状を呈する貯蔵穴と想定される土坑が多い。土坑は出土土器から、中期後葉に帰属するものである。なお、SK15は整理時の検討で欠番とした。

SK03 (第19図) [I N16グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にあり、周辺には酷似する形態の土坑（SK05~07）が集中する。

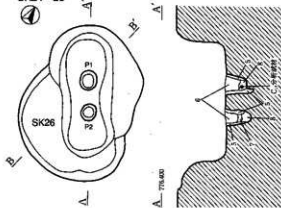
重複：なし。

SK22



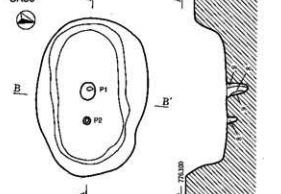
1. 黒色土 炭化物混入 黒色化顕著
2. 黒褐色土 ローム主体層 ロームブロック混入
3. 黒褐色土 炭褐色土 ロームブロック・ローム粒状混合層
4. 褐色土 ローム主体層 ハードローム粒状多量混入
5. 褐色土 ローム主体層 ハードローム粒状混入
6. 褐色土 ローム主体層
7. 黒褐色土 炭化物多量混入 本址上部を被覆した草木根が土壌化したものか
8. 黒褐色土 ローム粒状多量混入 腐化
9. 黒褐色土 腐りやすい
10. 褐色土 ローム主体層

SK24・26



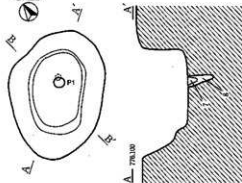
1. 黒褐色土 炭化物
2. 褐色土 ロームブロック・ローム粒状
3. 褐色土 炭化物
4. 褐色土 ローム主体層
5. 褐色土 ローム主体層
6. 褐色土 ローム粒状混入
7. 褐色土 腐りやすい
8. 褐色土 ローム主体層
9. 黒褐色土 炭化物混入 ローム (B・層) 主体層 (SK38發土)

SK38



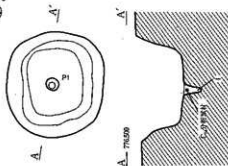
1. 黒褐色土 炭化物・炭色化顕著
2. 黒褐色土 ローム粒状・ロームブロック混入
3. 黒褐色土 ロームブロック多量混入
4. 黒褐色土 ローム粒状・ロームブロック混入
5. 褐色土 ローム主体層 (ソフトローム)
6. 褐色土 ローム主体層 ローム土・暗褐色土混入層
7. 暗褐色土 腐りやすい
8. 暗褐色土 腐りやすい
9. 褐色土 ローム主体層

SK23



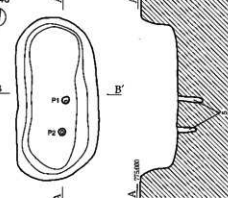
1. 黒褐色土 炭化物混入 炭色化顕著
2. 暗褐色土 ローム粒状多量混入 炭化物混入
3. 褐色土 ローム主体層 ローム粒状多量混入 炭化物混入
4. 褐色土 ローム主体層 ローム粒状混入
5. 黒褐色土 炭化物 本址上部を被覆した草木根が土壌化したものか
6. 褐色土 ローム主体層 腐く腐まる
7. 暗褐色土 腐りやすい
8. 褐色土 ローム主体層

SK36



1. 腐りやすい 暗褐色土 ローム主体層

SK40



1. 暗褐色土 ロームブロック混入
2. 暗褐色土 ロームブロック混入
3. 褐色土 ローム主体層
4. 褐色土 ローム主体層
5. 暗褐色土 ローム粒状多量混入

0 (1:50) 5m

第18図 陥し穴実測図2

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径137×126cmの円形で、深さは35cmを測る。底部は平坦である。断面はフラスコ状を呈すことから、貯蔵穴と思われる。

覆土：2層に分層された。壁際にローム主体層（2層）、中央に黒褐色土（1層）が堆積する。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK04（第19・22・23図、PL5・11）[I N11グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にある。

重複：なし。北側一角は攪乱が及んでおり遺存しない。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径148（現存）×124cmの不整形で、深さは40cmを測る。底部は平坦であるが、円形状に一段低まる南側は凹凸が認められる。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：3層に分層された。1層はSK01の1層に対比される黒褐色土、3層は中期後葉の土器を含むローム主体層である。

出土遺物：総重量296g・11片出土。1～5は沈線文を地文とした土器で、推定同一個体。胴部に擲状工具を2本単位で斜行方向に施すものである。6は短沈線文を施す土器である。59～61は1層もしくは3層の最下部で出土した打製石斧である。60・61には磨耗痕がなく、使用した痕跡が認められない。

時期：縄文中期後葉の加曾利EⅢ式並行期に比定される。

SK05（第19図、PL5）[I N11グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にある。周辺には酷似する形態の土坑（SK03・06・07）が近接する。

重複：なし。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径104×100cmの円形で、深さは46cmを測る。底部は平坦である。断面は袋状を呈する。貯蔵穴と思われる。

覆土：2層に分層された。2層はローム主体層（2層）で壁際の崩落土、1層はローム粗粒とロームブロックが大量混入する。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK06（第19図、PL5）[I N11グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にある。周辺には酷似する形態の土坑（SK03・05・07）が近接する。

重複：なし。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径112×105cmの円形で、深さは33cmを測る。底部は平坦である。断面は底部付近が袋状を呈し、貯蔵穴と思われる。

覆土：4層に分層された。3層はローム主体層で、壁際の崩落土。1層はSK08の1層に対比される暗褐色土である。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK07 (第19図、PL5) [I N11グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にある。周辺には酷似する形態の土坑 (SK03・05・06) が近接する。

重複：なし。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径128×110cmの円形で、深さは40cmを測る。底部は平坦である。断面は底部付近が若干袋状を呈しており、貯蔵穴と思われる。

覆土：4層に分層された。1・3層には炭化物、2層にはロームブロックが多量混入する。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK08 (第19・22図、PL5・11) [I N18グリッド]

位置：①区中央やや北側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺部付近にある。

重複：なし。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径152×136cmの円形で、深さは30cmを測る。底部は平坦である。断面は底部付近が若干袋状を呈しており、貯蔵穴と思われる。

覆土：5層に分層された。壁際に堆積するローム主体層 (5層) は、崩落土と思われる。

出土遺物：総重量420g・11片出土。7は縄文、8～10は沈線文を地文とする。8は先端が鋭利な工具で羽状に沈線文を施し、10は櫛状工具を2本単位として斜行方向に条線を施文するものである。9は渦巻き文を取り込んだ楕円区画のなかに鱗状短沈線文を施文し、①区検出出土土器 (24-3) と同一固体と思われる。

時期：出土遺物から、縄文中期後葉の加曾利 E Ⅲ式 (新段階) 並行期に比定される。

SK09 (第19図、PL5) [I S17グリッド]

位置：①区南側、尾根頂部と南緩斜面の縁辺付近にある。

重複：なし。東側上部は攪乱により削平されている。

検出：Ⅲ a 層上面。

規模・形状：径135×115cmの不整円形で、深さは21cmを測る。底部は中央部が若干低まる。凹凸が顕著。

底部と壁の境界は不明瞭で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：5層に分層された。1層は炭化物粒を含む焼土層、被熱状態は火床に酷似するもので、埋没過程に投棄されたものと思われる。

出土遺物：覆土から剥片が出土している。

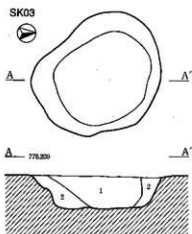
時期：不明。覆土から縄文中期に推定される。

SK12 (第19図、PL6) [I S10グリッド]

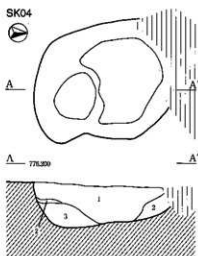
位置：①区中央東側、尾根頂部になかで最も高い場所にある。

重複：なし。

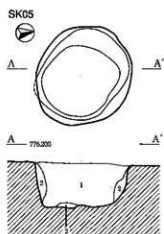
検出：Ⅲ a 層上面。



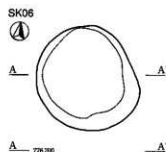
1. 黒褐色土 ローム層粒少量混入
2. 暗褐色土 ロームブロック多量混入



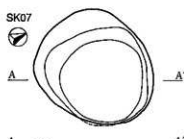
1. 黒褐色土 炭化物層粒少量混入
2. 褐色土 炭化物層粒多く混入
3. 暗褐色土 炭化物層粒混入 縄文土跡含む



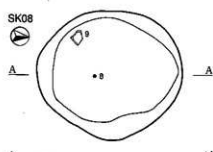
1. 黒褐色土 ローム層粒混入
2. 褐色土 ローム主体層



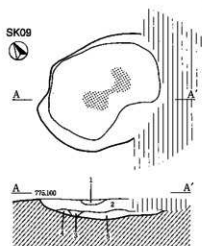
1. 褐色土 ローム層粒少量混入
2. 暗褐色土 ローム上多量混入
3. 褐色土 ローム主体層
4. 黒褐色土



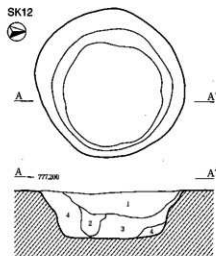
1. 黒褐色土 炭化物層粒全体に混入
2. 暗褐色土 ロームブロック多い
3. 褐色土 炭化物層粒多く混入
4. 黒褐色土



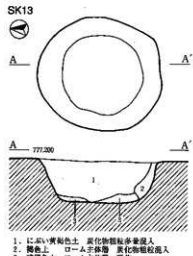
1. 暗褐色土 炭化物粒少量混入
2. 褐色土 ローム主体層 炭土粒少量混入
3. 暗褐色土 ローム主体層 焼土粒混入
4. 暗褐色土 炭化物粒少量混入
5. 褐色土 ローム主体層 炭化物粒混入



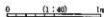
1. 比較的黒褐色土 焼土
2. 暗褐色土 炭化物層粒混入
3. 褐色土 炭化物層粒混入
4. 比較的黒褐色土
5. 暗褐色土 炭化物層粒混入



1. 黒褐色土 炭化物混入
2. 暗褐色土 暗褐色土・ロームブロック混合層
3. 比較的黒褐色土 ローム主体層 炭化物粒混入
4. 比較的黒褐色土 ローム主体層



1. 比較的黒褐色土 炭化物層粒少量混入
2. 褐色土 ローム主体層 炭化物層粒混入
3. 暗褐色土 ローム主体層 焼土



第19図 土坑・貯蔵穴実測図1

規模・形状：径161×158cmの円形で、深さは49cmを測る。底部は平坦で、断面は底部付近が外側に張り出す。形状から貯蔵穴と思われる。

覆土：4層に分層された。1層は縄文中期の土坑最上部に堆積する黒褐色土に対比され、壁際と底部にはローム主体層（3・4層）が堆積する。

出土遺物：なし。

時期：不明。形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK13（第19図、PL6）〔I S10グリッド〕

位置：SK12の南西側に近接する。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径130×120cmの円形で、深さは43cmを測る。底部は平坦で、断面は底部付近が部分的に外側に張り出す。断面形状から貯蔵穴と思われる。

覆土：3層に分層された。3層は底部に堆積するローム主体層、1層はローム粗粒と炭化物粒を多量混入する黄褐色土である。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK14（第20・22・23図、PL6・11）〔I N22、S2グリッド〕

位置：①区中央西側、尾根頂部にある。

重複：SB01を切る。本址上部東側は攪乱（攪乱5）で切られる。

検出：SB01のサブトレンチでSB01を切る本址の存在が確認され、SB01床面精査でプランを検出。

規模・形状：径210×206cmの円形で、深さはⅢ a層上面より98cmを測る。底部は平坦であるが、中央部が径約50cmの円形状に窪む。壁は南側底部付近が部分的に外側に張り出すものの、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土：17層に分層された。底部直上に黒色化したローム土（15・16層）、上位にはローム粗粒とロームブロックが多量混入するローム主体層が堆積する（9～14層）。8層堆積後に本址中央部がビット状に掘削（17層）されており、底部に存在する円形の窪みはこの際に形成されたものである。

出土遺物：6～9層を中心に縄文中期後葉の土器が出土した。総重量827g・20片出土。本址はSB01を切ることと、SB01との遺構間接合が存在することから、出土遺物のなかにはSB01に帰属するものが含まれていると考えられる。16・17・21～23は縄文、その他は沈線文を地文とする。14は区縁端部のみで判断不可能。12は区画内に「ハ」の字状短沈線文を施文、15・18・19・20は推定同一個体で、区画内に鱗状短沈線文と蛇行沈線文を施文する。62は底部付近から出土した打製石斧で、側面に自然面が残る。

時期：出土遺物から縄文中期後葉の加曾目EⅢ式（新段階）並行期に比定されるが、12からすると、EⅣ式まで入る可能性もある。

SK16（第20・22図、PL6・11）〔I S8グリッド〕

位置：①区中央部、尾根頂部にある。

重複：なし。本址北東側と中央部の一角には攪乱が及ぶ。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径212×（現存）142cmの楕円形で、深さは63cmを測る。本址北東側と中央部の一角には攪乱

が及ぶ。底部はほぼ平坦で、若干中央部が浅く窪む。壁は中位まで垂直に立ち上がり、上位は緩やかに立ち上がる。壁の中位に地形変換点がある。

覆土：5層に分層された。本址にはローム土を基調とする粒子が細かい土が堆積する。ローム主体層である5層は壁と底部に堆積する崩落土、2層はロームブロックである。

出土遺物：1層～3層上部にかけて縄文中期後葉の土器が出土した。総重量483g・6片出土。25は縄文、26は沈線文を地文とする。24・27は残存部からの判断は困難。27は把手先端が欠損する両耳壺である。

時期：出土遺物から縄文中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SK20（第20図、PL8）[I N19グリッド]

位置：①区中央やや北側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺部付近にある。

重複：なし。本址西側には擾乱が及ぶ。

検出：Ⅲa層上面。

規模・形状：径106×（現存）100cmの円形で、深さは25cmを測る。底部は平坦で、断面は底部付近が若干袋状に張り出す。断面形状から貯蔵穴と思われる。

覆土：3層に分層された。1・3層には炭化物が混入する。

出土遺物：なし。

時期：形態と覆土から、縄文中期に推定される。

SK25（第20・22図、PL9・11）[I M15グリッド]

位置：①区西側中央の尾根頂部にある。貯蔵穴と思われる土坑が集中する一角にある。

重複：なし。

検出：Ⅲa層上面。

規模・形状：径105×94cmの円形で、深さは43cmを測る。底部は円形で平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ただし北壁と東壁は壁中位に地形変換点があり、そこより上位は緩やかに立ち上がる。

覆土：3層に分層された。3層は褐色ローム土、1層は小児頭大の礫を含む暗褐色土である。

出土遺物：1層下部から2層下部にかけて縄文土器が出土した。総重量1,256g・31片出土。土器は礫とともに投棄したものと推定される。28・30～43は推定同一個体で縄文を地文、29・44は沈線文を地文とする。28は口縁部が平縁で楕円区画内に縄文を施文、39は覆土遺物と擾乱5出土土器が接合したものである。44は貼り付け隆帯間の区画内に短沈線文を施す。

時期：出土遺物から縄文中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SK26（第18図、PL9）[I S24グリッド]

位置：①区南東側の尾根頂部付近にある。

重複：SK24（陥し穴）に切られる。

検出：Ⅲa層上面。

規模・形状：本址北東側はSK24に切られ遺存しないため詳細は不明。径約200cmの円形と推定される。深さは20cmを測る。底部は凹凸があるがほぼ平坦。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：単一層。ローム主体層が堆積。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK27 (第21図) [I N6・7・11・12グリッド]

位置：①区中央北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。円形土坑が集中する一角にある。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径186×159cmの不整形で、深さは27cmを測る。底部は凹凸があるが平坦。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：2層に分層された。1層は炭化物粒を含む暗褐色土である。

出土遺物：縄文土器と思われる破片が出土した。

時期：破片のため出土遺物による時期決定は困難。覆土から縄文中期に比定される。

SK28 (第20・23図) [I N7グリッド]

位置：①区中央北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB03に近接する。

重複：なし。SB03の推定規模からすると、SB03に掘り込みが存在した場合は重複することとなる。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径168×119cmの楕円形で、深さは15cmを測る。底部は凹凸が著しく、底部と立ち上がりの境界が不明瞭。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：2層に分層された。ロームブロックを多量混入する暗褐色土（1層）が堆積。

出土遺物：1層より縄文中期土器が出土。45・46は推定同一個体で縄文地文。47は沈線文を地文とし、区画沈線文内に鱗状短沈線文を施文。

時期：縄文中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）並行期に比定される。

SK29 (第21・23図、PL9) [I N7グリッド]

位置：①区中央北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB03に近接する。

重複：なし。SB03の推定規模からすると、SB03に掘り込みが存在した場合は重複することとなる。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径153×147cmの円形で、深さは44cmを測る。底部は円形で平坦。断面は部分的に底部付近がフラスコ状に張り出す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形状から貯蔵穴と思われる。

覆土：5層に分層された。1・3・5層はローム主体層で、人為的に埋めたものと思われる。

出土遺物：4層より縄文中期土器が出土。総重量228g・10片出土。49・50は沈線文を地文とし、鱗状短沈線文を施文。

時期：縄文中期後葉の加曾利EⅢ式（新段階）に比定される。

SK30 (第21図、PL10) [I H25、I21グリッド]

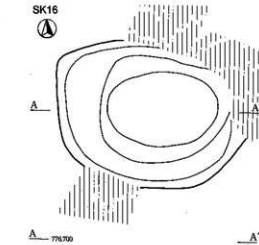
位置：①区北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB02と近接する。

重複：なし。東側一角は擾乱が及ぶ。

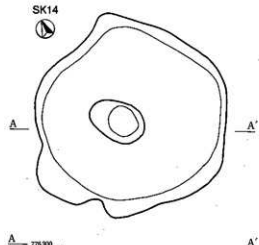
検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径163×156cmの円形で、深さは50cmを測る。底部は円形で平坦。断面は部分的に底部付近がフラスコ状に張り出す。壁は底部から中位まで垂直、それより上位は緩やかに立ち上がる。断面形状は陥し穴に酷似するが、平面形状から貯蔵穴と思われる。

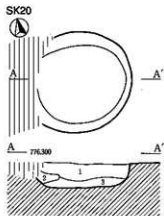
覆土：4層に分層された。3層はローム主体層で崩落土。



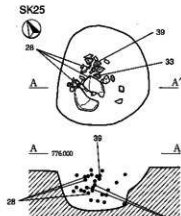
1. 暗褐色土 ローム主体層
2. 褐色土 ロームブロック混入
3. 暗褐色土 ローム主体層 ローム粗粒多量混入 硬化
4. 比較的暗褐色土 ローム主体層
5. 暗褐色土 暗褐色土・ロームブロック混合層



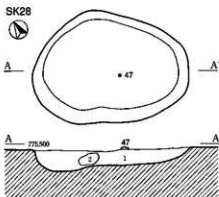
1. 高褐色土 炭化物粒、奥土混入
2. 高褐色土 褐色土・ロームブロック混合層 縄文土器残土
3. 褐色土 ローム主体層
4. 褐色土 ローム主体層 炭化物混入、縄文土器残土
5. 褐色土 ローム主体層 炭化物塊混入、硬化
6. 暗褐色土 炭化物混入、硬化
7. 褐色土 ローム主体層 膠まる 炭化物混入
8. 暗褐色土 高褐色土・ロームブロック混合層 硬化
9. 褐色土 ローム主体層 炭化物混入
10. 暗褐色土 ローム主体層
11. 暗褐色土 ローム主体層 炭化物少量混入
12. 褐色土 ローム主体層
13. 高褐色土 ローム主体層
14. 褐色土 ローム主体層
15. 比較的暗褐色土 炭化物混入
16. 暗褐色土 ローム主体層
17. 暗褐色土 炭化物粒混入



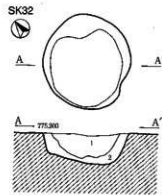
1. 高褐色土 炭化物粒混入
2. 高褐色土 褐色土・ロームブロック混合層
3. 暗褐色土 炭化物粒



1. 暗褐色土 ロームブロック混入 縄文土器
混土
2. 暗褐色土 ローム粗粒多量混入 縄文土器
混土
3. 褐色土 ローム主体層



1. 暗褐色土 ローム粗粒・炭化物混入
2. 褐色土 ロームブロック混入



1. 暗褐色土 炭化物塊混入
2. 褐色土 ローム主体層

0 (1:40) 1m

第20図 土坑・貯蔵穴実測図2

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK31 (第21図、PL10) [I I21グリッド]

位置：①区北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SK30に近接する。

重複：なし。北西側に攪乱が及ぶ。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径120（現存）×111cmの円形で、深さは60cmを測る。底部は円形で平坦。断面は部分的に底部付近がフラスコ状に張り出す。断面形状から貯蔵穴と思われる。壁は底部から中位まで垂直、それより上位はやや緩やかに立ち上がる。

覆土：4層に分層された。底部にローム主体層（4層）が堆積。壁際のローム主体層（2層）は崩落土。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK32 (第20図) [I N1グリッド]

位置：①区北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB02と03の中間地点にある。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径101×95cmの円形で、深さは29cmを測る。底部は壁際から中央部に傾斜し、凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：2層に分層された。2層はローム主体層。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK33 (第21図) [I N6グリッド]

位置：①区中央北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径143×121cmの円形で、深さは20cmを測る。底部は凹凸が著しく、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土：3層に分層された。3層はローム主体層、2層はロームブロックである。1層に炭化物が多量混入する。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK34 (第21図) [I N1グリッド]

位置：①区中央北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB03に近接する。

重複：なし。東側は攪乱が及び遺存しない。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径150×65cmで、円形を呈したと推測される。深さは30cmを測る。底部には凹凸がある。壁は

緩やかに立ち上がる。

覆土：2層に分層された。2層はローム主体層である。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK35 (第21・23図、PL10・11) [I H25グリッド]

位置：①区北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB02に近接する。

重複：SK37を切る。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径170×(現存)155cmの円形で、深さは69cmを測る。底部は平坦で円形。凹凸があり、断面は底部付近がフラスコ状に張り出す。断面形状から貯蔵穴と思われる。

覆土：9層に分層された。壁際と底部に崩落土と思われるローム主体層(2・5・8・9層)、上部にローム土と暗褐色土の混合層(1・3・4層)が堆積する。

出土遺物：1層より縄文中期の土器が出土した。総重量349g・15片出土。51は縄文、52～55は沈線文を地文とする。64は黒曜石製の石鏃である。罔化していないが、このほかに黒曜石製の剥片が出土している。

時期：縄文中期後葉の加曾利EⅢ式(新段階)に比定される。

SK37 (第21図、PL10) [I H25グリッド]

位置：①区北西側、尾根頂部から北斜面に向かう縁辺付近にある。SB02に近接する。

重複：SK35に切られる。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径157×(現存)69cmで、円形に近い形状であったと推定される。深さは40cmを測る。底部は平坦で、断面は底部付近が部分的にフラスコ状に張り出す。

覆土：最上部にSK37の1層に似る暗褐色土が堆積。詳細な堆積状態は不明。

出土遺物：なし。

時期：覆土から縄文中期に推定される。

SK39 (第21図) [I R19グリッド]

位置：②区南西側、小河川に向かい傾斜する南緩斜面にある。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

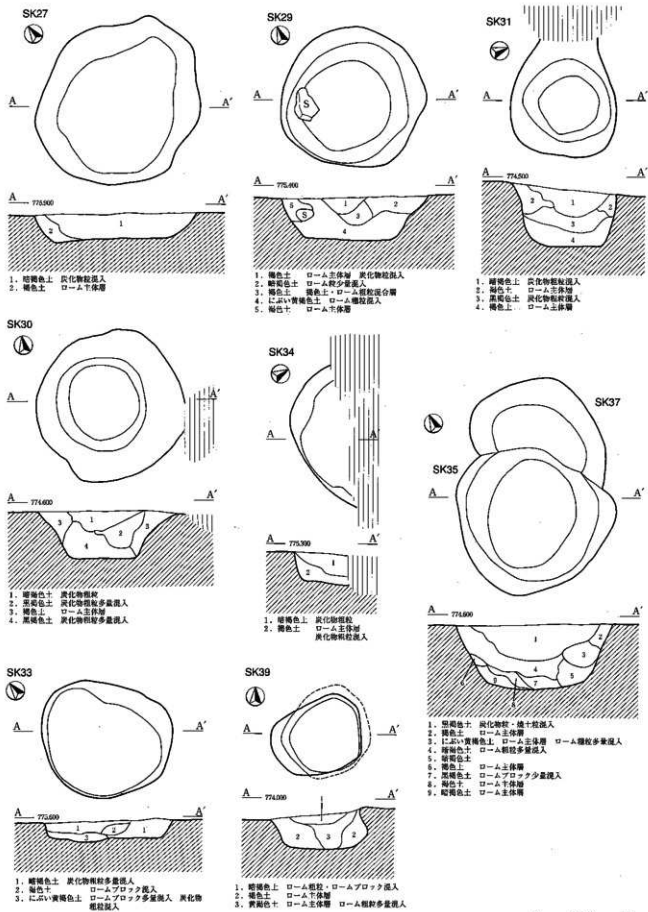
規模・形状：径98×92cmの方形で、深さは37cmを測る。底部はほぼ平坦で、西壁以外の壁は、底部付近が袋状に張り出す。

覆土：3層に分層された。壁際にローム主体層(2層)が堆積。

出土遺物：胎土から縄文中期と思われる土器が2点出土したが、文様は不明。罔化していないが、黒曜石製の剥片が出土している。

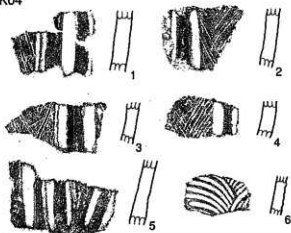
時期：不明。

第4章 各時代の遺構と遺物

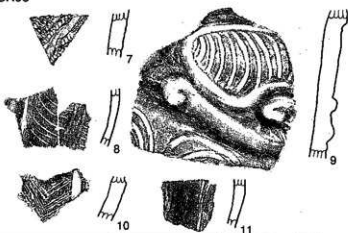


第21図 土坑・貯蔵穴実測図3

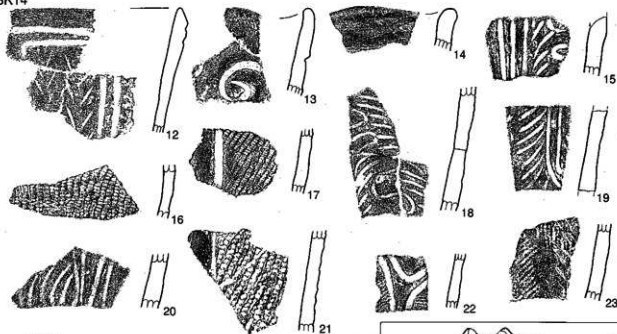
SK04



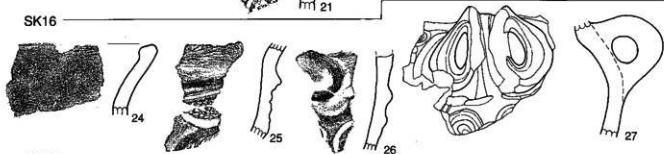
SK08



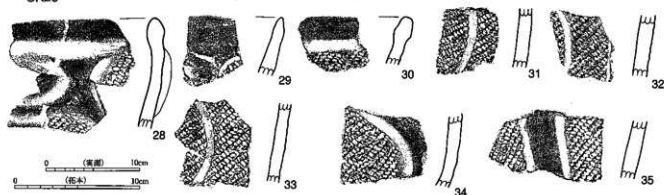
SK14



SK16



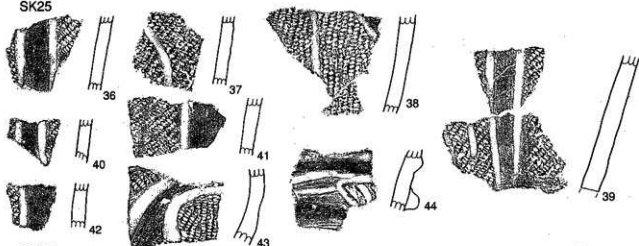
SK25



第22図 陥し穴・土坑・貯藏穴出土遺物 1

第4章 各時代の遺構と遺物

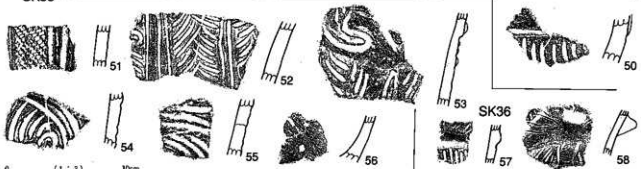
SK25



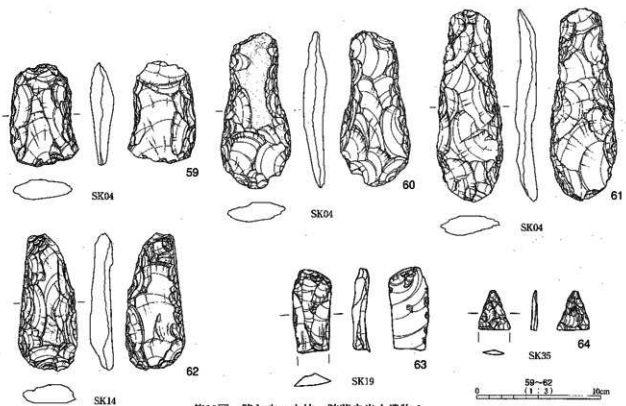
SK28

SK29

SK35



0 (1:3) 10cm



第23図 陥し穴・土坑・貯蔵穴出土遺物2

0 59-62 (1:3) 10cm

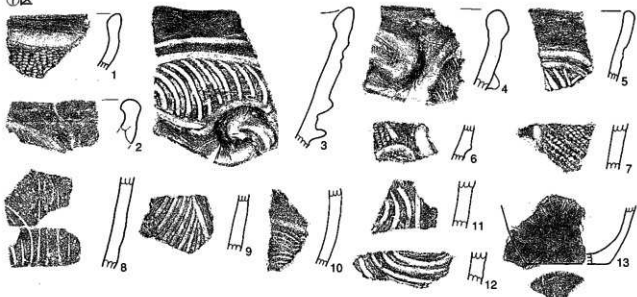
0 63・64 (2:3) 5cm

4 遺構外から出土した遺物 (第24・25図、PL12)

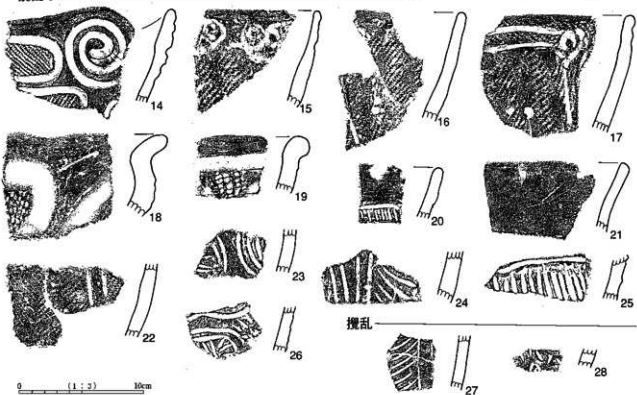
遺構外から出土した土器は、加曾利EⅢ式(新段階)並行期のものが主体を占める。

1～13は①区の遺構検出時に出土した土器で、基本的にI層(耕作土)に包含されていたものである。1・6・7は縄文、2～5、8～12は沈線文を地文とする。2は粘土貼付痕が残る。3は緩い波状口縁で、渦巻き文を取り込む楕円区画内に鱗状短沈線文を施文する。SK08出土遺物(22～9)と推定同一個体である。4・10は条線を施文するもので、2とともにSB03出土土器(13～2・4～8)と推定同一個体である。8・9・11・12は胴部に鱗状短沈線文を施文。14～26は攪乱5から出土した遺物である。攪乱5はSB01の大半

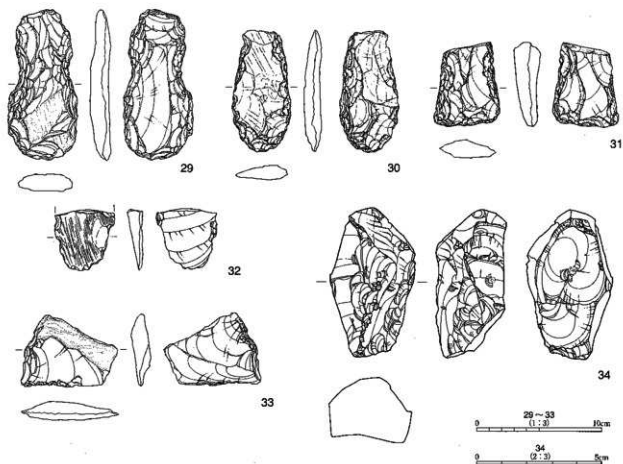
①区



攪乱5



第24図 遺構外出土土器



第25図 遺構外出土石器

を壊していることから、これらは本来SB01に帰属したものと考えられる。14～19・22は縄文、その他は沈線文を地文とする。14は緩い波状口縁で、口縁部に渦巻き文と内部に縄文を充填する楕円区画、胴部に縄文を充填した区画を形成、15～17・22は器面の剥離が著しいもので、同一個体と思われる。口縁部に2つの半渦巻文が連結し、そこから垂下する沈線文で胴部が区画されたもので、区画内部に縄文が施文。23～26は区画沈線文内に鱗状短沈線文を施文したと思われる。27～28は攪乱からの出土遺物である。27は鱗状短沈線文を施文、28は「ハ」の字状沈線文（曾利系土器）。31は攪乱出土の打製石斧、32は攪乱5出土の磨石、33は攪乱出土の剥片で、ともに無斑晶質安山岩製である。34は①区検出面から出土した黒曜石製の原石である。図化していないが、①区検出面と攪乱から黒曜石製の剥片が出土している。

参考文献

- 谷井 彪ほか1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 川崎 保2001「第8章 考察-鱗状短沈線文土器の型式学的分析」2001「県単縄文整備事業（ふるさと）大野田地区埋蔵文化財
 発掘調査報告書-浅科村内-駒込遺跡」長野県埋蔵文化財センター

第2節 弥生時代

1 土坑と出土遺物

弥生時代の土器が出土した土坑は、尾根頂部で2基確認された。土坑は近接しておらず、その分布から、西側調査区外の尾根頂部に散在的に分布しているものと推測される。土坑が密集して明確な墓域を形成していないことが特徴である。SK01・02にはロームブロック・ローム粒が多量混入し黒色化が顕著な黒褐色土が堆積しており、縄文時代の土坑とは覆土が明らかに異なる。SK02は出土土器から土器棺再葬墓と判断される一方、SK01は再葬墓の可能性が示唆できるととまる。

SK01 (第26図、PL4・12) [I N21グリッド]

位置：①区西側中央に位置し、尾根頂部に立地する。

重複：なし。

検出：Ⅲ a層上面。

規模・形状：径96×88cmの円形で、深さは27cmを測る。底部には凹凸があり、中央部が高まり、壁際が低まる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土：3層に分層された。1層は黒色化が顕著で炭化物を含む黒褐色土、底部の3層はローム主体層である。

出土遺物：1は1層出土の弥生時代中期初頭の甕である。口縁部に向かい直線的に開く器形と思われ、表面は先端が鋭利な棒状工具による条痕が斜めに施されており、内面下位の底部付近には黒色付着物がある。

時期：弥生時代中期初頭に比定される。

SK02 (第26図、PL4・12) [I S2グリッド]

位置：①区中央やや西側に位置し、尾根頂部に立地する。

検出：Ⅲ a層上面。

重複：ないが、南東側の除く3方に攪乱が及ぶ。

規模・形状：(現存)径67×(現存)64cm、深さは16cmを測る。形状は遺存範囲が狭く詳細は不明であるが、径約100cmの円形を呈していたものと推定される。本址上部には耕作の影響が及び覆土の遺存状況は比較的悪い。底部には細かな凹凸があり、SK01と同様に中央部分が若干高まり、壁際が低まる。壁は傾斜しつつ立ち上がる。底部付近のみの残存のため、詳細な立ち上がりは不明。

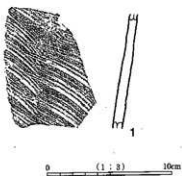
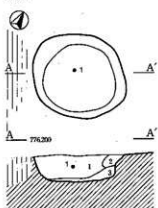
覆土：2層に分層された。1層はSK01の1層に対比される黒褐色土で、黒色化が顕著。2層はローム粒が多量混入する褐色土で、人為的な堆積層と判断される。

出土遺物：遺物はすべて1層から出土した。2は棒状工具で横方向に施文した条痕文、4は弥生中期初頭の甕で、耕作での削平で胴部以下は遺存しないが、若干南側に傾いた状態で逆位に埋納されていたものである。口唇部に押圧隆帯を付け、頸部には横方向に条痕文が施文されている。本址の推定規模からすると、甕は中央部の底部付近に位置する。3は弥生中期初頭の甕である。器面に2本単位で斜行する条痕文を施文し、口唇部には棒状工具による押圧がある。5は底部に木葉痕が残る甕で、4と同一固体と思われる。図化していないが、覆土から黒曜石製の剥片が1点出土している。

時期：弥生時代中期初頭に比定される。

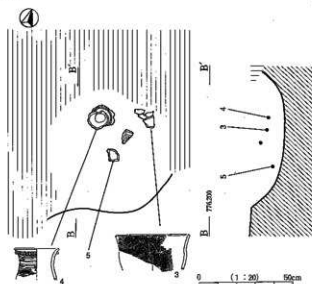
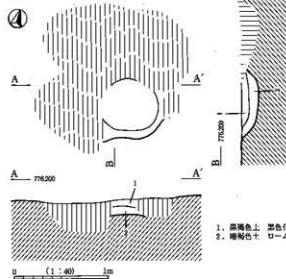
第4章 各時代の遺構と遺物

SK01



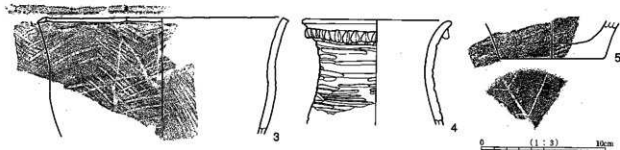
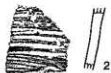
1. 黒褐色土 炭化物粒散入
2. 暗褐色土 ローム層粒少量混入
3. 褐色土 ローム層粒少量混入

SK02



1. 黒褐色土 炭化が顕著 炭化物粒散入
2. 暗褐色土 ローム層粒少量混入

SK02遺物出土状況



第26図 SK 01・02 実測図・出土遺物

2 遺構外から出土した遺物

攪乱5から条痕文字器が1点出土した(PL12-8)。出土場所と当該期の遺構分布から、本来はSK02に伴っていたものと考えられる。

第3節 平安時代以降

1 竪穴住居跡と出土遺物

出土遺物から9世紀後半に比定されるSB04・05は、調査当初、遺跡範囲外であった場所から確認されたものである。周知の遺跡範囲内に当たる尾根頂部(①区)からは当該期の遺構は全く確認されていないことから、遺跡の南限に当たる小河川に面して東西に広がりをもつ小規模な集落と理解できる。

SB04 (第27~29図、PL3・12) [I S21・22グリッド]

位置：②区北側にあり、尾根頂部から小河川に向かう南緩斜面に立地する。

重複：SB05を切る。

検出：遺跡範囲南限であった農道以南の先線でのトレンチ調査で本址の存在が確認された。重機で表土を剥ぎⅢ層の上面で黒褐色土が落ち込む方形のプランとカマド煙道を確認した。煙道先端部(地山)は被熱による変色が認められた。検出時に落ち込みから須恵器・土師器が出土し、サブトレンチで壁・床が確認されたことから、竪穴住居跡と判断した。

規模・形状：南北3.4m、東西3.7mの長方形を呈し、床面積は12.1㎡である。主軸はN-114°-Eを示し傾斜に直交して構築されている。西壁と北壁はSB05の壁位置とほぼ一致しており、所謂「入れ子」状態で構築された住居跡である。

覆土：12層に分層された。基本的にⅡ層基調の黒褐色土(1~3層)が堆積し、壁際に崩落土であるローム主体層(4層)もしくはロームブロック多量混合層(5・7層)が堆積する。12層は掘り方である。

床面・壁：掘り込んだⅢb層を床面とする。床中央部分が若干高く、壁際が低まる。床面は中央部とピット、カマド燃焼部以外は硬化する。西壁高は約46cm、北壁高は約40cmを測り、北壁中央部が外傾するほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。

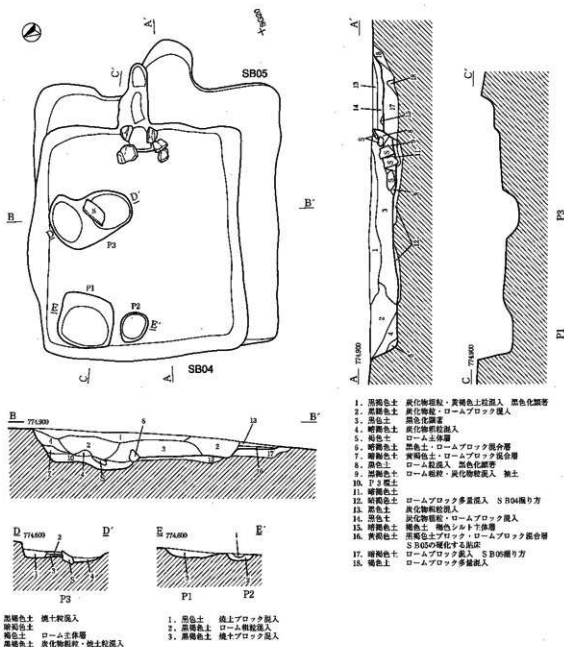
柱穴：不明瞭。

カマド：東壁中央部にあり、煙道部が1.2m壁外へ突出する。燃焼部付近には袖石が散乱する。原位置を保つ袖石は左袖が2個、右袖が3個で、右袖石は崩れて内傾し、袖上(6層)は袖石下部付近にのみ残存する。それ以外の石は床直上に散乱しており、覆土堆積前に破壊されている。天井石は2個残存し、燃焼部内に落ち込んでいる。上部からの圧力で崩落したものである。1・2層は覆土で、カマド破壊後に堆積する。燃焼部中央やや焚口側に径約10cmの支脚石抜き取り痕があり、燃焼部第1次堆積土(5層)が埋没している。明瞭な火床はない。燃焼部と煙道部の比高差は約20cmあり、煙道部は燃焼部接続地点から約1m東方にのびて立ち上がる。煙出口は残存しない。カマド3・4・5層は煙道部崩落土、カマド8・9層は掘り方である。

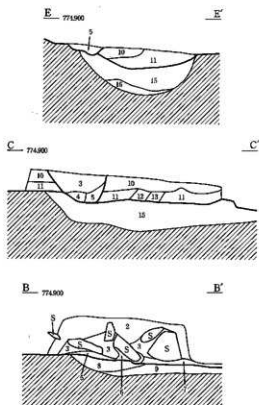
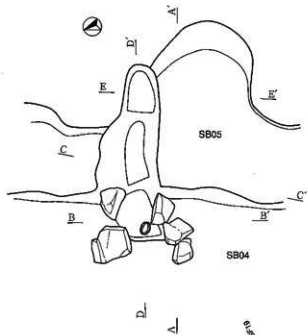
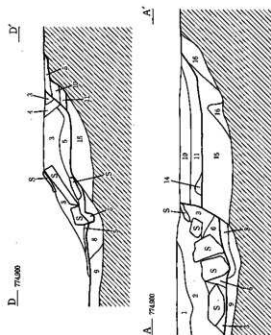
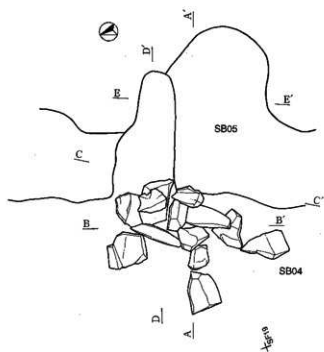
その他の施設：北壁中央部と北東隅にピットがある。掘り込みは浅く、柱穴とは判断し兼ねる。P1は2基のピットと判断でき、中央部の平石は柱等の構造物を建てる目的で付設された可能性が指摘できる。調査時にP4~7としたものは掘り方である。

出土遺物：遺物量は少なく、遺物は覆土3層とP1～3から出土した。1・2・4は土師器坏で、1は覆土とP3出土遺物が接合したものである。内面に丁寧な横ミガキあり。4は床下(12層)出土。3・5～9は内黒灰で、3は覆土と床下遺物が接合したものの。内面は斜行方向のミガキがある。6の内面には暗文が残る。7はP1出土遺物で内面の黒色処理は剥奪する。10・11は須恵器坏、12は須恵器甕の口縁部。13は土師器甕で、本址から土師器甕は1個体しか出土していない。破片すべてが接合しなかったものの、器形や器面の調整から同一個体と判断され、13は器形の復元実測したものである。推定復元であるが、覆土とP1～3、掘り方(12層)に同一個体の破片が含まれていたことになる。

時期：出土遺物から、9世紀後半に比定される。



第27図 SB04・05実測図



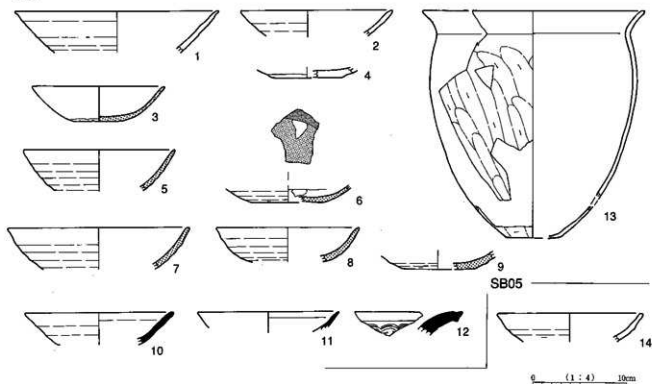
SB04 (1~9層) SB05 (10~16層)

1. SB04層土1層に対応
2. SB04層土2層に対応
3. SB04層土3層に対応
4. 凝褐色土 炭化物粒・焼土殻混入
5. 凝褐色土 ローム土混入
6. SB04層土9層に対応 雑土
7. 褐色土 粘性あり
8. SB04 11層に対応 盛り方
9. SB04 12層に対応 盛り方
10. 褐色土 炭化物粒混入
11. 褐色土 炭化物粒
12. 凝褐色土 炭化物粒混入 焼土
13. 凝褐色土 炭化物粒・焼土殻混入
14. 凝褐色土 焼シルト主体層
15. SB05層土17層に対応 盛り方

0 (1:30) 1m

第28図 SB04・05カマド実測図

SB04



SB05 (第27～29図、PL.3・12) [I S21・22

グリッド]

位置：②区北側にあり、尾根頂部から小河川に向かう南緩斜面に立地する。

重複：SB04に切られる。

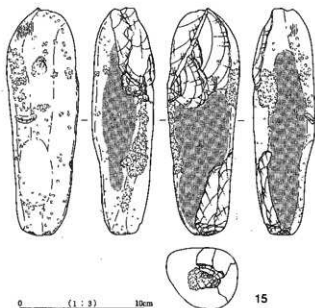
検出：Ⅲ層上面。

規模・形状：南北4.1m、東西4.4mの長方形を呈し、床面積は16.5㎡である。主軸はN-118°-Eを示し、傾斜に直交する。主軸はSB04と極めて酷似する。

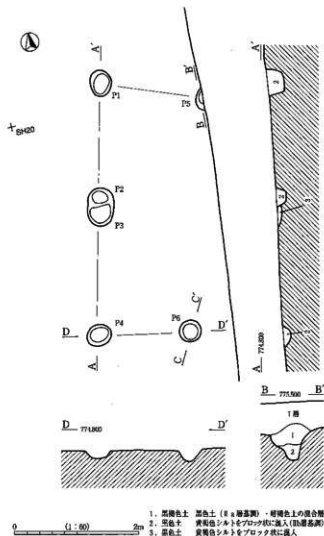
覆土：3層に分層された。13層はⅡ層基調の黒色土、16層は貼床、17層は掘り方である。

床面・壁：Ⅲb層まで掘り込み、17層を埋めて平坦とし、上面に貼床を施して床面として利用。東壁高・北壁高は約30cmを測るが、南側は床面のみ遺存する。

カマド：東壁中央部にあるが、位置的にSB04カマドと重複しているため、遺存状況は悪い。燃焼部は東壁から約70cm東側に突出する。煙道部は耕作で削平され遺存しないが、突出部分先端から東側に煙道がのびていたものと判断される。この構造は直線的にのびる東壁で燃焼部と煙道部の接続しているSB04カマドとは異なるものである。カマド5・10・11層は燃焼部堆積層、15・16層は掘り方である。明瞭な火床はない。



第29図 SB04・05出土遺物



第30図 ST01実測図

はP1-2が185cm、P2-4が220cm、P1-5が168cm、P4-6が150cm、P5-6が375cmを測り、南北間隔が短辺より若干長い傾向がある。

覆土：Ⅱ層を基調とする黒褐色土または黒色土が堆積する。

柱穴：径32~40cmの円形で、深さは10~30cmを測る。

出土遺物：なし。

時期：埋土がⅡ層基調土であることから、平安時代以降と推定される。

3 遺構外から出土した遺物 (PL12)

小破片のため掲載していないが、攪乱内から須恵器坏の底部、①区検出面と攪乱内から内耳土器(PL12-9~11)が出土している。

出土遺物：遺物は皆無に等しく、図化可能な土器は14の土師器坏のみである。15は13層から出土した石器で、側面に磨面、先端に敲打痕が残る。

時期：時期判別可能な出土遺物は皆無で、詳細な時期は不明。SB04との切り合い関係から、SB04と酷似する時期と推定される。

2 掘立柱建物跡

ST01 (第30図、PL4) [I S22・23、X2・3グリッド]

位置：②区東側に位置し、尾根頂部から小河川に向かう南緩斜面に立地する。

重複：他遺構との切り合いなし。

検出：本址以南には低地に認められるⅡ層が堆積しており、重機でⅡ層を剥ぎⅢ層上面の検出で黒褐色土が堆積するピットを確認。

規模・形状：5基のピット(柱穴)で構成される側柱の掘立柱建物跡であるが、東側調査区外へ広がっており、建物の全容を把握できていない。P5-6間に柱穴が検出されていないことから、東西方向は2間以上の規模が想定され、長辺が傾斜に直交する建物の可能性が考えられる。検出範囲での規模は、南北420cmでN-13°-Eの軸をもつ。柱穴間距離

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1 試料の内容

試料は、本遺跡から検出された竪穴住居跡や陥し穴、土坑から出土した炭化材12点（試料番号1～6・8～13）と炭化物混じり土壌1点（試料番号7）の計13点である。13点のうち試料番号7については、分析試料の抽出を行った結果、炭化物が極微量（0.1g未満）認められるのみであった。また、試料6・8についても、炭化物が0.1g程度であったため全量を放射性炭素年代測定試料として用いた。その他の試料については、以下に示す分析工程を行うに十分な試料が得られた。以上の結果、放射性炭素年代測定は試料番号1～7・8・10・11の10点、樹種同定は試料番号1～5・9～13の10点を対象に行った。各試料の詳細は、結果とともに第3・4表に示す。

2 分析の方法

(1) 試料選択及び試料採取

試料採取及び分割は、バリノ・サーヴェイ（株）技師1名が行った。試料採取は、乾燥重量で約0.1～1.0g程度を目安として、いずれも樹種同定試料と併用するため木材組織や試料の遺存状況を考慮し、剃刀等を用いて分割を行った。試料番号7については、スタンドルーベを用いて炭化物の抽出を行った。

(2) 試料調整

上記の試料についての調整方法を、以下に示す。

ア 試料抽出

メス等を用いて、表面等に認められる汚れを除去する。

イ AAA 処理（酸-アルカリ-酸処理）

試料を遠沈管に入れ、以下の処理を行う。

- ・酸処理：1N塩酸（80℃）数時間。
- ・アルカリ処理：水酸化ナトリウム水溶液（80℃）、濃度を段階的に変えながら数時間。
- ・酸処理：1N塩酸（80℃）数時間。

なお、試料番号7については、AAA処理工程をすべて行った場合、炭化物そのものが減失してしまう恐れがあったため、調査担当者と協議・検討の結果、酸処理後に低濃度アルカリ処理を行い、3）以降の処理・測定を行っている。

ウ 酸化

乾燥させた試料を酸化銅とともに石英管に詰め、管内を真空にして封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

エ 精製

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて二酸化炭素を精製する。

オ 還元

真空ラインにて、石英管に精製した二酸化炭素・鉄・水素を投入し、650℃で10時間加熱する。

カ カソード詰め

グラファイト化した試料を、手動の圧縮装置でアルミニウム製のターゲットホルダーに固める。

(3) 測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

(4) 放射性炭素年代算出法

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

第3表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	試料の種類	選構	採取位置	時期(調査所見)	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.
1	炭化材	SB02 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	4,080±40	-22.86±0.95	4,050±40	IAAA-32004
2	炭化材	SB02 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	4,120±40	-25.23±0.92	4,130±40	IAAA-32005
3	炭化材	SB02 (壁穴住居跡)	柱穴(P1)	縄文中期後葉	クリ	4,170±40	-28.81±0.93	4,240±40	IAAA-32006
4	炭化材	SB06 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	4,190±40	-25.59±0.90	4,200±40	IAAA-32007
5	炭化材	SK14 (土坑)	9層	縄文	クリ	4,150±40	-22.77±0.88	4,120±40	IAAA-32008
6	炭化材	SK22 (隔し穴)	覆土下層(7層)	縄文	-	5,210±40	-27.52±0.91	5,250±40	IAAA-32009
7	炭化物	SK24 (隔し穴)	坑底ビット(P1)内	縄文	-	890±40	-27.07±0.97	920±40	IAAA-32010
8	炭化材	SK36 (隔し穴)	坑底ビット(P1)内	縄文	-	4,190±40	-24.91±0.88	4,190±40	IAAA-32011
9	炭化材	SB02 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	-	-	-	-
10	炭化材	SB06 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	4,100±40	-24.93±0.86	4,090±40	IAAA-32012
11	炭化材	SB06 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	4,040±40	-24.52±0.92	4,030±40	IAAA-32013
12	炭化材	SB06 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	-	-	-	-
13	炭化物	SB02 (壁穴住居跡)	床直上	縄文中期後葉	クリ	-	-	-	-

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) 補正年代 BP は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3 分析の結果

結果を第3・4表に示す。測定年代(補正年代)は、5,210~890BPの値を示した。これらの分析結果を遺構毎に見ると、縄文時代中期の住居跡であるSB02は4,080BP(試料番号1)・4120BP(試料番号2)・4,170BP(試料番号3)を示した。SB06は4,190BP(試料番号4)・4,100BP(試料番号10)・4,040BP(試料番号11)を示した。また、円形土坑は4,150BP(試料番号5)を示し、陥し穴は890BP(試料番号7)・4,190BP(試料番号8)・5,210BP(試料番号6)を示した。

4 炭化物の年代に関わる考察

既存の関東・中部地方における縄文土器型式と放射性炭素年代との対応関係(谷口2001)による縄文時

第4表 暦年代校正結果

試料番号	補正年代(BP)	暦年代校正年代(cal)						相対比	Code No.
1	4,083±43	cal BC 2,855	—	cal BC 2,852	cal BP 4,805	—	4,802	0.016	IAAA—32004
		cal BC 2,844	—	cal BC 2,815	cal BP 4,794	—	4,765	0.175	
		cal BC 2,675	—	cal BC 2,568	cal BP 4,625	—	4,518	0.705	
		cal BC 2,518	—	cal BC 2,499	cal BP 4,468	—	4,449	0.104	
2	4,124±40	cal BC 2,859	—	cal BC 2,811	cal BP 4,809	—	4,761	0.305	IAAA—32005
		cal BC 2,750	—	cal BC 2,723	cal BP 4,700	—	4,673	0.157	
		cal BC 2,700	—	cal BC 2,621	cal BP 4,650	—	4,571	0.499	
		cal BC 2,608	—	cal BC 2,600	cal BP 4,558	—	4,550	0.039	
3	4,174±40	cal BC 2,877	—	cal BC 2,856	cal BP 4,827	—	4,806	0.145	IAAA—32006
		cal BC 2,814	—	cal BC 2,696	cal BP 4,764	—	4,646	0.805	
		cal BC 2,690	—	cal BC 2,681	cal BP 4,640	—	4,631	0.050	
4	4,193±42	cal BC 2,882	—	cal BC 2,857	cal BP 4,832	—	4,807	0.198	IAAA—32007
		cal BC 2,813	—	cal BC 2,736	cal BP 4,763	—	4,686	0.590	
		cal BC 2,725	—	cal BC 2,697	cal BP 4,675	—	4,647	0.212	
5	4,153±41	cal BC 2,868	—	cal BC 2,835	cal BP 4,818	—	4,785	0.187	IAAA—32008
		cal BC 2,819	—	cal BC 2,804	cal BP 4,769	—	4,754	0.082	
		cal BC 2,782	—	cal BC 2,768	cal BP 4,732	—	4,718	0.078	
		cal BC 2,763	—	cal BC 2,716	cal BP 4,713	—	4,666	0.291	
		cal BC 2,713	—	cal BC 2,663	cal BP 4,663	—	4,613	0.292	
		cal BC 2,647	—	cal BC 2,635	cal BP 4,597	—	4,585	0.069	
6	5,205±42	cal BC 4,041	—	cal BC 4,013	cal BP 5,991	—	5,963	0.432	IAAA—32009
		cal BC 4,004	—	cal BC 3,965	cal BP 5,954	—	5,915	0.568	
7	890±38	cal BC 1,045	—	cal BC 1,088	cal BP 2,995	—	3,038	0.370	IAAA—32010
		cal BC 1,121	—	cal BC 1,138	cal BP 3,071	—	3,088	0.156	
		cal BC 1,156	—	cal BC 1,193	cal BP 3,106	—	3,143	0.373	
		cal BC 1,197	—	cal BC 1,210	cal BP 3,147	—	3,160	0.101	
8	4,193±41	cal BC 2,882	—	cal BC 2,857	cal BP 4,832	—	4,807	0.195	IAAA—32011
		cal BC 2,813	—	cal BC 2,737	cal BP 4,763	—	4,687	0.595	
		cal BC 2,725	—	cal BC 2,697	cal BP 4,675	—	4,647	0.210	
10	4,095±40	cal BC 2,856	—	cal BC 2,814	cal BP 4,806	—	4,764	0.252	IAAA—32012
		cal BC 2,695	—	cal BC 2,692	cal BP 4,645	—	4,642	0.018	
		cal BC 2,680	—	cal BC 2,575	cal BP 4,630	—	4,525	0.711	
		cal BC 2,508	—	cal BC 2,504	cal BP 4,458	—	4,454	0.019	
11	4,038±41	cal BC 2,619	—	cal BC 2,610	cal BP 4,569	—	4,560	0.068	IAAA—32013
		cal BC 2,596	—	cal BC 2,592	cal BP 4,546	—	4,542	0.028	
		cal BC 2,583	—	cal BC 2,547	cal BP 4,533	—	4,497	0.335	
		cal BC 2,544	—	cal BC 2,489	cal BP 4,494	—	4,439	0.542	
		cal BC 2,478	—	cal BC 2,474	cal BP 4,428	—	4,424	0.027	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P J Reimer) を使用

2) 計算には第3表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

代前期の年代は、6,300～4,800BP、縄文時代中期は4,800～4,050BPとされている。これらの所見に従うと、SB02・06やSK14・36は縄文時代中期後葉頃に相当し、発掘調査所見と整合する。

一方、SK24は890BP（試料番号7）と約11世紀頃の値を示した。当試料は、分析試料が極微量であったため、前処理時に、この他の試料と異なる処理方法を行っている。このことから、十分に処理できなかった不純物等の影響が考えられる。ただし、炭化物は陥し穴底面に認められたピット覆土中から採取されたものであり、当遺構覆土堆積状況や、試料抽出時の土壌観察時にはロームを主体とし植物根等も認められなかったことから、遺構埋積後の後代の炭化物の混入は考え難い。したがって、本分析結果は当遺構の年代を反映している可能性もある。SK22についても、炭化物は陥し穴の底面付近に認められた炭化物層（7層）から採取された試料であることから、炭化物層は遺構廃絶時あるいはその直後に堆積した可能性があり、本分析結果もこの年代を示していると考えられる。本分析結果によれば、陥し穴には縄文時代前期後半（SK22）・縄文時代中期後葉（SK36）・11世紀頃（SK24）の3時期が存在した可能性もあるが、この点については、発掘調査時の所見として、陥し穴の配列が複数認められること指摘されており、本分析対象となった各遺構の配列との関連を検討するとともに、各遺構の形態等の所見も含め検討することが望まれる。

引用文献

谷口康浩2001「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』第77巻 P17-21

第2節 樹種同定

1 試料の内容

試料は、竪穴住居跡や陥し穴、土坑から出土した炭化材12点（試料番号1～6・8～13）と炭化物混じり土壌1点（試料番号7）の計13点である。今回、同一試料で放射性炭素年代測定を実施しており、微量なものについては年代測定を優先したことから、樹種同定ができた試料は、試料番号1～5・9～13の10点である。各試料の詳細は、結果とともに第3表に示す。

2 同定の方法

炭化材を常温で乾燥させた後、木口（横断面）・柘日（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 同定の結果

結果を第3表に示す。炭化材は、全て落葉広葉樹のクリに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

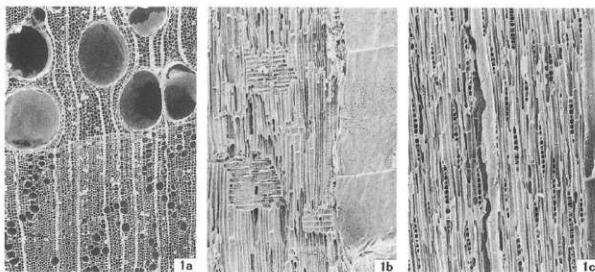
・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属（第31図）

環孔材で、孔部は2～4列、孔部外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

4 木材利用に関わる考察

縄文時代中期のSB02の炭化材は、床面や柱穴内から出土している。一方、同時期のSB06は、焼失住居ではないが、床直上に炭化材が分布している。したがって、これらの炭化材は、住居構築材や燃料材など

図版1 炭化材



第31 図炭化材の組織顕微鏡写真

1. クリ (試料番号1) a : 木口, b : 板目, c : 板目

200 μm a
200 μm b, c

当時利用された植物資源であると言える。2軒の竪穴住居跡から採取された炭化材は、いずれも落葉広葉樹のクリであった。クリは、重硬で強度や耐朽性の高い材質である。また、落葉広葉樹林中に比較的普通にみられる樹種であることから、材質を考慮し遺跡周辺に生育していた樹木を利用した可能性がある。また、これまでの調査成果から、縄文時代にはクリが栽培されており、取量が落ちた老木を用材として利用していたことが指摘されている(千野1983)。ただし、本地域では縄文時代の植物利用に関する資料は少なく、現段階ではクリの栽培について言及することはできない。そのため今後、植生変遷に関わる資料を蓄積し検証する必要がある。

ここで、長野県内における当該期の調査事例によれば、北村遺跡や屋代遺跡群の住居跡から出土した炭化材中にクリが確認されている(鈴木・能城1993、高橋2000)。このうち屋代遺跡群では、縄文時代中期前葉・縄文時代中期中葉・縄文時代中期後葉にそれぞれ比定される住居跡の調査事例があり、縄文時代中期中葉及び中期後葉の住居跡ではクリが多く認められるのに対し、縄文時代中期前葉の住居跡ではヤマグワが多く、クリが少ない傾向が認められている。木材利用の変遷については、本分析結果のみでの検討は困難であるが、今後本遺跡や周辺地域における調査事例を蓄積し、明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

- 千野裕道1983「縄文時代のクリと集落周辺植生」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ』P27-42
 鈴木三男・能城修一1993「長野県北村遺跡出土炭化材の樹種」『中央自動車道長野緑蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡
 本文編・図版編』P167-168、日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
 高橋敦2000「炭化材の樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24-更埴市内その3-更埴奈良遺跡・屋代遺跡群(含む大境道
 跡・窪河原遺跡)-縄文時代編-本文』P249-253 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

第3節 発掘所見と科学分析結果の検討

1 放射性炭素年代測定結果について

竪穴住居跡（SB02・06）については、調査所見とほぼ合致する結果が得られた。

SB02では床直上に分布する炭化物が $4,080 \pm 40$ ・ $4,120 \pm 40$ 、柱穴出土炭化物が $4,170 \pm 40$ の年代（補正年代）が算出されている。試料番号1・2・9（炭化物層）は、壁際が埋没（4・5層）し、中期後葉の遺物を含む黒褐色土が堆積する間に堆積しているものである。縄文中期後葉の年代観（谷口2001）と測定結果とに齟齬が生じていないため、炭化材は本址埋没過程で周辺の森林木（グリ）を伐採したものと考えられる。柱穴出土炭化物（試料番号3）は柱の一部と思われるものである。測定では上記の炭化物より古い数値が得られており、竪穴住居構築時に周辺の森林木を伐採して柱として用いたものと解釈できる。一方SB06であるが、出土遺物から判断される遺構の時期（中期後葉）と床直上の炭化物を試料とした測定年代（ $4,190 \pm 40$ ・ $4,100 \pm 40$ ・ $4,040 \pm 40$ ）とはほぼ一致している。

陥し穴については、出土遺物が皆無であるため年代比定を目的に分析を実施したもので、SK22（覆土下層炭化物）が前期後半、SK36（坑底ピット出土炭化物）は中期後葉、SK24（坑底ピット出土炭化物）は平安時代後半に比定される結果が得られた。

陥し穴の分類・配列の詳細は第6章第2節を参照されたいが、形態的には円形（Ⅰ類）・楕円形（Ⅱ類）・長楕円形（Ⅲ類）の3種類に分類され、今回分析したSK36はⅠ類、SK22はⅡ類a、SK24はⅡ類cに属する。また配列については、各類とも異なる配列を示している。3基とも形態と配列が異なっており、その点では分析結果と合致する。本遺跡の陥し穴は周辺地域の調査事例からⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類の変遷が考えられ、出土遺物と年代測定結果が整合できるSK36が中期後葉であることから、SK22と24は後続するものとなる。SK22は陥し穴上部を被覆した草木類が遺構内に崩落したと考えられる炭化物を試料としており、今回の結果はすでに伐採済みの草木類を用いたことを示している。SK24は茅野市馬捨場遺跡のⅢ類bとしたSK312に形態が酷似し、年代的には縄文中期頃と理解していた。管見の範囲では平安時代に属する陥し穴の存在と形態を把握していないため、今回の結果は今後の検討課題とし、本報告書ではデータの提示にとどめることとする。なお、本遺跡の陥し穴が上記の変遷をたどっていない場合は、帰属年代について再検討が必要となる。

2 樹種同定結果について

唐松B遺跡周辺では、出土炭化物の樹種同定がされていないため比較検討ができない。今回の結果で、全点がクリと判明したことは、クリの入手が比較的容易であったことと、クリの有効性を示唆するものである。SB02の柱材と思われるものや、床直上の炭化材がクリであることは、竪穴住居の柱が材質的に硬いクリ材を選択していることを示しており、中部・関東地方の縄文中期では燃料材もしくは建築材などにクリを多用する見解（千野1983・1991）と一致するものである。今後、縄文時代における植物資源利用の検討をするうえで基礎的なデータとなろう。

参考文献

- 谷口康浩2001「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』第77巻 P17-21
 千野裕道1983「縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心として—」『研究論集Ⅱ』（財）東京都埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター2002「広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市内—馬捨場遺跡」

第6章 成果と課題

第1節 縄文時代中期後葉の集落について

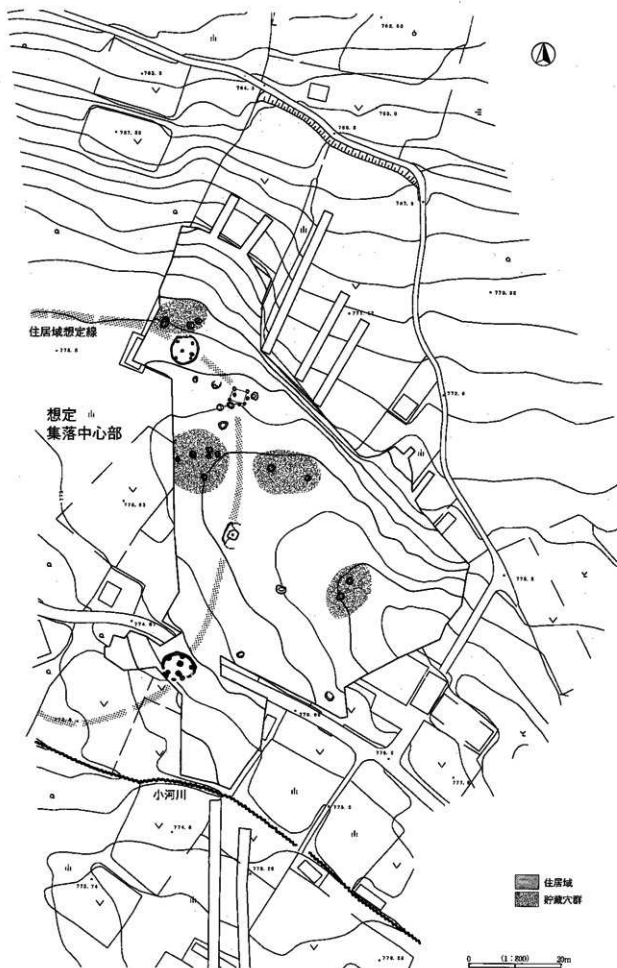
唐松B遺跡では、竪穴住居跡4軒と断面がフラスコもしくは袋状をなす貯蔵穴12基(註1)および用途不明の土坑13基で構成された中期後葉(加曾利EⅢ式新段階並行期)の集落が確認された。土坑については、出土遺物がないため時期を明確にできなかったものも多いが、覆土の観察からその大半が当該期に帰属するものと判断した。

本節では遺構の分布から集落の様相について検討することとする。なお、遺構間接合した遺物がなく、第32図に示した遺構のなかで同時存在を証明できる資料はない。そこで、ここでは加曾利EⅢ式並行期の集落として一括して扱うこととする。

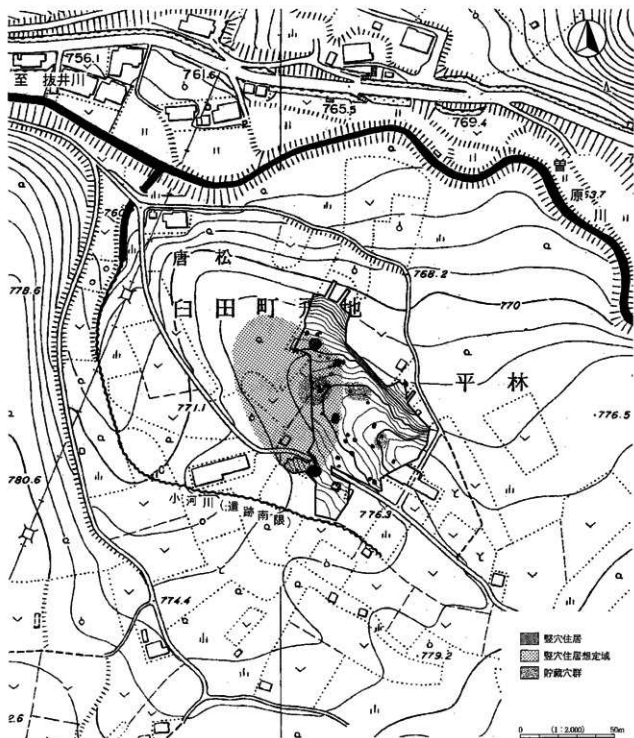
中期後葉の遺構は、南東から北西にのびる幅約40mの狭小な尾根状地形のほぼ全域に分布する。曾原川に面した北斜面まで広がらない。竪穴住居は、尾根状地形の頂部と頂部から北側斜面部に移行する縁辺部に構築されており、前者はSB01、後者はSB02・03・06が該当する。これら竪穴住居は調査区内において約20m間隔で半円形に配置しており、西側調査区外への広がりが想定される。一方、貯蔵穴は、住居域の内側で1箇所、外側で3箇所まとまる傾向が認められる(以下「貯蔵穴群」と呼ぶ)。これら貯蔵穴群は住居域内側の1箇所以外は住居域の外側に分布している。本遺跡の集落は、西側調査区外に想定される集落の中心部を住居がめぐり、その外側に貯蔵穴群が展開する環状集落と考えられる(註2)。竪穴住居と貯蔵穴群がほぼ同数で確認されていることは、竪穴住居1軒と1箇所の貯蔵穴群が対応するものと想定される(註3)。

この状況と中期後葉の集落構造が把握された佐久市吹付遺跡と比較してみる。吹付遺跡では貯蔵穴群が中期後葉第Ⅱa期に出現しており、集落構成は中央の浅谷に形成された墓域を挟んで住居と貯蔵穴群が対峙する様相を示す。両遺跡は、立地に起因して集落構成に異なりが見られるが、巨視的に見ると住居と貯蔵穴群が比較的近い場所に存在する点で共通する。なお、今回の調査では住居と貯蔵穴とともに集落を構成する要素である墓域が確認されていないが、吹付遺跡の事例からすると、墓域は西側調査区外で竪穴住居に囲まれた内部に存在するものと思われる。

樹種同定との関係では、SB02・06出土炭化物がクリと同定され、特にSB02ではクリを柱材として使用していた。同様に陥し穴の遊茂木と思われる炭化物もクリと同定された。このことは、本遺跡で竪穴住居構築時や陥し穴の遊茂木に堅いクリ材を選択して用いていることが窺える。なお、本遺跡を取り巻く南佐久郡北部では環境復元のための資料がなく植生は明らかにできない。ただし、今回の分析で炭化物すべてがクリと判明したため、集落形成に伴う用材調達を遺跡周辺で行ったとすると、唐松B遺跡の集落は落葉広葉樹林帯のなかで営まれていたものと考えられる。調査区内の遺構配置から集落の規模を想定したものが第33図である。唐松B遺跡が立地する尾根は曾原川と小河川の合流点付近で南北幅が狭まる舌状を呈しており、前記したように集落は尾根状地形の先端部を中心に環状に展開しているものと推測される。今回の調査対象地は集落の中心から東側部分に該当する。



第32図 縄文中期後葉の集落景観



第33図 縄文時代中期後葉の集落想定図

注

- 1 貯蔵穴の形制的な理解は、基本的に岡谷市扇平遺跡の小型穴を分析した長崎氏（長崎1974）の見解（報告書でB～E型の小型穴を貯蔵穴と理解）に依拠する。
- 2 環状集落と考えた場合、住居域内側の貯蔵穴群は墓坑の可能性が考えられるが、出土遺物で墓を証明することはできなかった。
- 3 土器の遺構間接合がないため、遺構の同時性は証明できない。遺構配置からみた想定である。

参考文献

- 岡谷市教育委員会1974『扇平遺跡』
 坂口 隆2003『縄文時代貯蔵穴の研究』

第2節 陥し穴について

1 陥し穴の分類

調査で確認された12基の陥し穴は、規模、平面・断面形状、坑底ピットの有無と掘削数に違いが認められた。これらの違いは構築時期や狩猟対象物の差異などに起因しているものと思われる。

ここでは陥し穴の形態変遷を捉える目的で分類を行うが、最初に明記しておくことがある。

まず分類基準であるが、最近、茅野市馬捨場遺跡では47基の陥し穴を分類し、出土遺物や放射性炭素年代測定結果から形態変遷が捉えられていることから、ここでは基本的に馬捨場遺跡の分類基準を用いる。次に陥し穴の形態と坑底ピットであるが、唐松B遺跡の陥し穴では、覆土掘り下げで硬化面などの再利用の痕跡は見られず、完掘時の形態が埋没直前もしくは埋没過程（註1）のものである。さらに坑底ピットは、ピット埋土と覆土との比較から陥し穴の掘削以降から埋没前に埋設されているものと判断されることである。

陥し穴の分類は、以下のように平面形状で大別し、坑底ピットの数で細分した（第34・35図）。

I類・平面形状は円形で、壁は底部付近がほぼ垂直に、それより上位は緩やかに立ち上がるものである。

坑底ピットは中央部に1基掘削されている。SK11・19・23・36が該当する。陥し穴の底部は基本的に方形を呈し、なかには中央部が狭まる撥状に傾向を示すものもある。なお、SK23は楕円形を呈するが、長軸方向は崩落しており、本来の形状は円形を呈していたものと考えられるためI類に含めた。

II類・平面形状が楕円形のものである。SK10・17・21・22・24が該当する。陥し穴の中段と底部は長方形となる形態。底部から中位にかけて垂直に立ち上がる断面形状が明瞭となるもの。II類は底部四隅が明瞭に屈曲するものが主体を占め、なかには張り出す傾向を示すものもある。II類は坑底ピット掘削数が3種類に細分される。

a種・坑底ピットが3基縦列するもの（SK10・21・22）。

b種・坑底ピットが3基づつ2列に並列するもの（SK17）。

c種・坑底ピットは底部幅が狭まる中央部に2基埋設されているもの（SK24）。坑底ピットの掘り方は上端幅で約30cmを測り、規模的に卓越するものである。

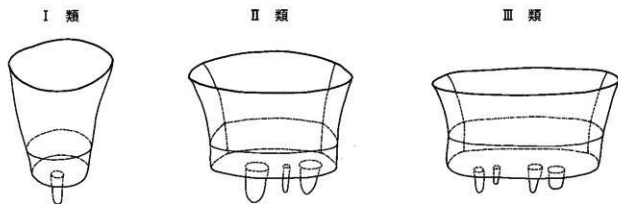
III類・平面形状が長楕円形で、坑底ピットが複数存在し、底部・中段とも長方形もしくは隅丸長方形を呈し、上端と形状が類似する。底部から中段まではほぼ垂直に立ち上がるが、中段上位が開き気味に立ち上がらないもの。III類は、坑底ピットの埋設数から2種類に分類される。

a種・坑底ピットが2基存在するもの（SK38・40）。













b種・坑底ピットが4基縦列するもの（SK18）。a種に比べて底部四隅の屈曲が明瞭。

以上の分類から、陥し穴の平面形状には円形・楕円形・長楕円形の3種類が存在し、坑底ピットは底部の長軸幅に連動して掘削されている傾向が窺えた。この傾向は、前述した茅野市馬捨場遺跡のみならず、本遺跡と抜井川を挟んで対岸に所在する佐久町後平遺跡（註2）でも認められ、唐松B遺跡に限定された現象でないものと判断される（第36図）。

陥し穴の形態が意味するものであるが、一般的に陥し穴の形態差には構築時期、狩猟対象物、構築集団のくせが内在しているものと考えられる。構築時期については後述するので、他2つの要素について検討



第34図 陥し穴の分類模式図

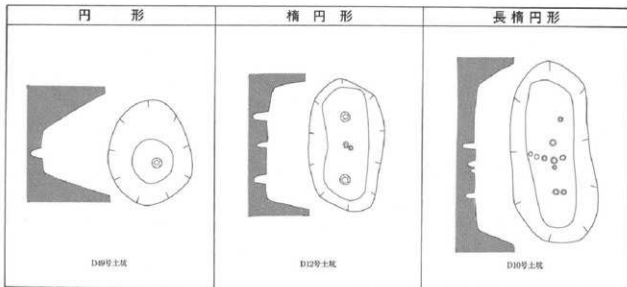
類種							
I a							
II a				b		c	
III a			b				

第35図 陥し穴の分類

する。まず狩猟対象物についてであるが、本遺跡周辺では動物骨が確認されず、縄文時代にどのような動物を捕獲していたかは不明である。狩猟対象物と陥し穴の形状との関連は不明としか言えない。次に構築集団のくせについてであるが、坑底ピットの掘削状況にくせに相当すると思われる形跡が見られた。Ⅱ類陥し穴に坑底ピットが1列縦列タイプ(Ⅱ類 a)と2列縦列タイプ(Ⅱ類 b)が存在すること、さらに坑底ピット1基に1本の逆茂木を埋設するタイプ(SK11・19・21~23・36・38・40)と複数埋設するタイプ(SK10・17・24・18)の2種類が存在することである。前者はすべてのⅠ類と一部Ⅱ・Ⅲ類、後者はⅡ類とⅢ類で、平面形状と連動している。上記2要素をある種のくせと解釈すると、くせは基本的に各類内で終始していると判断される。

2 陥し穴の年代

陥し穴は狩猟を目的として構築されたものであるため、その本来の目的からすると土器が遺構内に入る可能性は極めて少ない。したがって陥し穴から出土する土器が何を示しているかは見解が分かれ、陥し穴



第36図 後平遺跡の陥し穴

の時期決定を困難にしている所以である。

ここでは、出土遺物と放射性炭素年代測定結果、さらに重複関係から陥し穴の時期を考えることとする。

出土遺物ではSK36から縄文中期後葉の土器が出土している。重複関係が認められた陥し穴はSK24のみで、SK24は縄文中期に比定されるSK26を切っている。放射性炭素年代測定結果では、SK22（覆土下層の炭化物層）で $5,210 \pm 40$ 、SK24（坑底ピット内炭化物）で 890 ± 40 、SK36（坑底ピット内炭化物）で $4,190 \pm 40$ の値が算出されている。これらを総合して解釈を加えると、Ⅰ類のSK36は逆茂木として用いる木材の伐採年代と覆土の堆積年代が中期後葉の範疇に納まること、Ⅱ類cのSK26は重複関係と測定結果により縄文中期以降の所産であることが判明する。なおⅡ類aのSK22は出土遺物がなく、分析結果の検証ができない。SK22出土炭化物は諏訪市ジャコッパラ遺跡の陥し穴（1区A4号小堅穴、第37図）と出土状態が類似しており、陥し穴上部に被覆した草木類が遺構内に崩落したものと判断されるものである。したがって分析結果は草木類が伐採された年代を示しており、周辺の草木を集積した遮蔽物とすると、縄文前期後半以降に掘削されていたことになる。なお、SK24は形態的には縄文時代の年代を想定できるが、分析で11世紀代の年代が算出されている。管見では当該期の陥し穴の事例を知らないため、形態と分析結果の整合性については今後の事例を待つこととする。

以上の状況から、本遺跡の陥し穴の年代を推測することとする。

本遺跡の陥し穴を馬捨場遺跡での円形→楕円形→長楕円形という形態変遷に当てはめた場合、Ⅰ類が縄文中期後葉以前で、Ⅱ類は中期後葉以降、Ⅲ類はⅡ類に後続することになる。

3 陥し穴の配列

配列については、基本的に短軸方向が規則的に並ぶものを「列」として認識した。また、形態と配列の関係を考える上では各種ごとの配列を把握する必要があるが、検出遺構数が少ないことから、ここでは各類単位に短軸方向の配列を見ることとする。



第37図 ジャコッパラ遺跡 植物遺体出土状況

陥し穴の配列を示したものが第38図である。陥し穴は全体的な傾向として、南東から北西にのびる尾根の横断方向と、尾根頂部付近から南緩斜面に向かう縦断方向に配列している。各類ごとに見ると、Ⅰ類は調査区中央部で尾根を縦断する列と尾根頂部付近を調査区中央部から東方にかけて横断する列の2種類がある。前者の広がりであるが、北斜面と南緩斜面でこの形態の陥し穴が確認されていないため、尾根頂部付近に限定される列と考えられる。一方、後者については、後述するⅡ類とⅢ類でも東側調査区外にのびる可能性が高い列が確認されているため、調査区外に展開しているものと考えられる。Ⅱ類は、a・b種の組み合わせで列が構成されており、c種のSK24は分布と軸方向で異なる列に伴うものと考えられる。前者は調査区東側から西方に尾根を横断し、途中で南緩斜面に屈曲して小河川に走行する列である。後者は1基のみで配列は不明であるが、遺構と地形との関連から尾根頂部から南緩斜面に並ぶものと推測される。Ⅲ類は、調査区内で最も広範囲に展開する列である。陥し穴は尾根の頂部に尾根の走行方向に即して配列し、調査中央部で南緩斜面に分岐している。その配列から西側調査区外と南側調査区外にのびているものと推測される（第38図点線）。

これら陥し穴の配列を見ると、尾根を縦断する列と横断する2つの列であったものが、尾根縦断列と横断列が接続する配列となっており、単純から複雑へと変化していることが分かる。さらに調査区内に限って見ると、比較的狭い範囲に単純な配列から、複雑に配列して広範囲に展開する様相に推移していることが窺える。狩猟域の拡大を示していると考えられる。

4 集落との関係

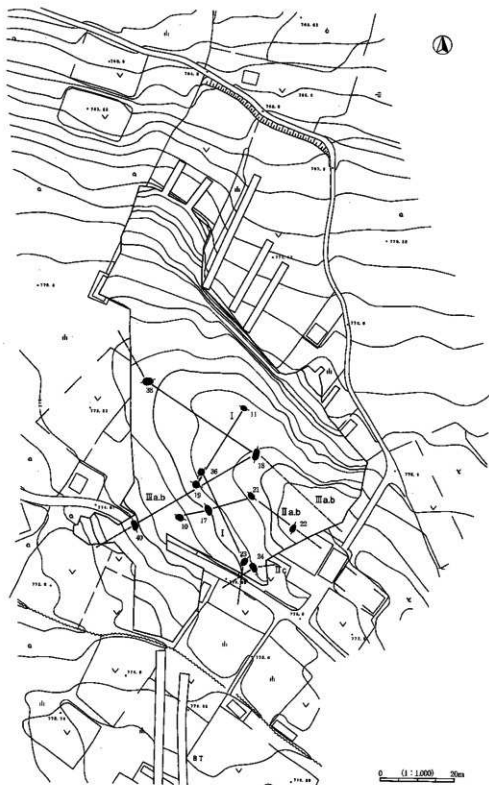
陥し穴の配列（第38図）と集落想定図（第32図）を照合すると、各類とも集落域と重複している。さらに年代的には集落の時期（加曾利EⅢ式（新）並行期）とⅠ類のSK36（坑底ピット）の出土遺物と年代測定結果がほぼ一致しており、集落形成と陥し穴の逆茂木伐採時期が中期後葉の範囲に納まる。この状況と陥し穴の形態変遷を照合すると、本遺跡で最も先行するⅠ類の陥し穴は集落と並存する想定が可能で、Ⅰ類に後続してⅡ類とⅢ類の陥し穴が構築されている。したがって、性格的には、Ⅰ類は集落を防御する陥し穴、Ⅱ・Ⅲ類は複雑化する配列と広範囲の分布から、集落廃絶後につくられた狩猟域の陥し穴と解釈できよう。ただし、遺構間接合がなく、さらに陥し穴出土遺物が極めて僅少で遺物の性格を特定できかねることから、ここでは集落と並存する可能性が高い陥し穴の存在を指摘するにとどめ、集落と陥し穴の関係把握は周辺での類例増加を待って判断したい。

注

- 特に平面形状が楕円形を呈する陥し穴のなかには、短軸方向の中断上位がかなり聞き気味に立ち上がるものがある。この部分の壁は中段以下に比べて不整形で、上端のプランと中段・底部のプランが異なることから、埋没時に壁が崩落して形成された可能性が考えられる。
- 後半遺跡ではⅠ・Ⅱ類に該当する陥し穴から早期後半の上部が出土しており、大別し年代差は認められない。馬場遺跡や八ヶ岳西南麓で確認されている陥し穴が円形→楕円形→長楕円形の形態変遷が捉えられるため、後半遺跡の陥し穴に年代差が存在する可能性が高い。

引用・参考文献

- 佐久町教育委員会1987『後半遺跡—縄文早期後半～前期初葉における陥し穴を伴った集落の調査—』
 諏訪市教育委員会1998『ジャコフバラⅠ—長野県諏訪市ジャコフバラ遺跡第1次発掘調査報告書』
 長野県歴史文化財センター2002『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区歴史文化財発掘調査報告書—茅野市内一馬場遺跡』
 長野県歴史文化財センター2005『県営御科ダム歴史文化財発掘調査報告書—茅野市内一笹原上第1遺跡・笹原上第2遺跡』



第38図 陥し穴の配列

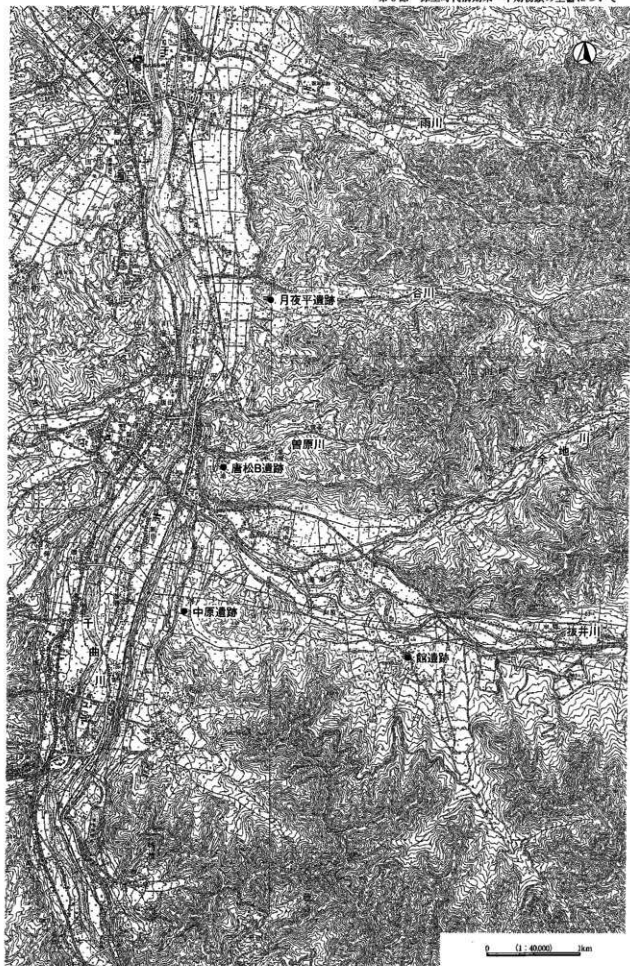
第3節 弥生時代前期末～中期初頭の土器について

唐松B遺跡の調査では、SK01とSK02から条痕文を施した弥生中期初頭の土器が出土した。SK02出土の壺は、耕作などによる削平で口縁部から肩部まで残存したに過ぎず、壺内には骨が入っていなかったものの、出土状態から逆位に埋納された再葬墓と理解できる。掘り込みは耕作土を含む攪乱により3方向が削平を受けており形状の詳細は不明であるが、残存状況からはほぼ円形を呈する墓坑であったものと考えられる。壺は底部付近に埋納されている。SK01は当該期の甕の出土から再葬墓と考えられるが、破片のため埋葬方法は不明である。

南佐久郡で前期末～中期初頭の壺もしくは甕が確認されている遺跡として、南牧村矢出川南遺跡、月夜平遺跡、館遺跡、中原遺跡がある(第39図)。谷川左岸の段丘上にある月夜平遺跡では、胴部に条痕文を施した壺とミニチュア土器が出土している。また、抜井川左岸の河岸段丘上に所在する館遺跡では、横方向に条痕文を施した甕や、胴部上半に3本単位の縦区画文を描き胴部中央に十字文を施した壺、条痕文を施した土器片が出土している。さらに、千曲川右岸の段丘上に所在する中原遺跡では、胴部に横方向と縦方向に条痕文を施した壺や胴下半部に条痕文を施した壺が出土しており、壺の内部に骨が埋納されていたことが確認されている(第39図)。これらの遺物は工事中もしくは耕作中に発見されたものであり、掘り方の有無や埋納方法が不明であるが、唐松B遺跡の事例から、これらの土器は再葬墓に用いられて土坑状の掘り込みに埋納されていたものと考えられる。



第39図 南佐久郡出土の弥生前期末～中期初頭の土器



第40図 弥生前期末～中期初頭の土器出土遺跡

これらの遺跡の位置を図示したのが第40図で、南牧村矢出川南遺跡1例を除くと、千曲川右岸の谷川流域から抜井川流域の範囲にまとまることがわかる。これらの遺跡は千曲川などの河川を望む段丘上に立地する点で共通しており、再葬墓は各遺跡とも群集する様相を示さず、数基単位の小規模な墓域が形成されていると推測される。管見の範囲では、佐久盆地で再葬墓に比定される当該期の土器は確認されていない。土器を伴わない再葬墓の存在も考慮する必要があるが、本遺跡を中心とした一定の範囲に弥生前期末～中期初頭の壺もしくは甕が分布することは、これらの分布圏が、再葬墓を造営した集団が唐松B遺跡を含む一帯を居住空間としていたことを示すものと推測される。

参考文献

- 石川日出志2004「再葬墓研究の現在と今後の課題」『考古学ジャーナル』524号
佐久町教育委員会1995「佐久町の文化財」
長野県南佐久郡臼田町教育委員会1999「月夜平遺跡」
長野県南佐久郡誌刊行会1998「南佐久郡誌」考古編



雨が降る中での遺跡説明会

第7章 結語

初めて遺跡と対面したのは、まだ雪が積もり調査区に近づけない平成15年の2月であった。調査区内の踏査が可能となったのは3月に入った頃で、寒さが残るなか、関東山地から派生する山深い佐久山地や眼前に流れる曾原川や対岸の山間地集落を見て、今は失われつつある日本の風景を凝視したことを鮮明に記憶している。

平成15年度に発掘調査した唐松B遺跡の報告書をここに刊行することができた。唐松B遺跡では調査例がなく、既存資料は採集遺物のみであったため、遺跡の性格が不明であった。加えて、本遺跡と同じ段丘上に立地する唐松A遺跡などや、遺跡眼前の曾原川流域に分布する遺跡でも調査例がなく、今まで本遺跡周辺の考古学的な様相が不明であった。今回の調査では段丘上における土地利用が判明し、南佐久郡北部において貴重な資料を提供したことに間違いない。

発掘・整理担当者として、これらの資料をどれ程報告書に盛り込めたか不安が残る。さらに周辺遺跡との関わりについて触れることができなかつた点で、本遺跡の評価や地域における位置付けが不十分となり、大きな課題を残す結果となったことは否めない。ここに時代別に主な成果をまとめて結語としたい。

縄文時代

佐久市吹付遺跡や川上村大深山遺跡で中期後葉の集落が確認されているが、両者の中間地点に位置する南佐久郡北部では当該期の集落構造が不明である。尾根先端を中心に貯蔵穴群を伴う竪穴住居が環状にめぐる唐松B遺跡の集落は、当該期の集落構造を考える上で良好な資料提示になるとと思われる。

陥し穴では、詳細な帰属時期を明確にできなかったものの、確認された複数の配列から、段丘上が狩猟域として形成されていたことが判明した。陥し穴には逆茂木埋設方法などに違いが見られ、形態と配列に密接な関連性を見出すことができた。今回判明した陥し穴の単純→複雑への変遷は、狩猟形態の変化が反映していると思われる。

弥生時代

出土遺物から中期初頭の再葬墓と思われる墓坑が2基確認できた。墓坑は基本的に単独に存在するもので、群集して墓域を形成しない状況は、既存資料である月夜平遺跡や館遺跡と同様な様相を示している。これらの遺跡が千曲川右岸の一定範囲に分布することは、南佐久郡における再葬墓の受容形態を考える上で興味深いものである。

平安時代

平安期の竪穴住居は基本的に平地に立地し集落を形成するが、9世紀後半以降には単独で山間地に立地する竪穴住居が出現する。今回の調査で確認された竪穴住居もこれに属し、段丘上に小集落を形成するものである。平地と異なり居住に適さないこれら山間地集落は、平安期の社会背景によって出現したのもと思われ、今回の調査では千曲川流域の山間地集落を考える良好な資料を提示することとなった。

以上のように、各時代とも小規模ながら多岐にわたる資料が得られた。唐松B遺跡の事業は本書の刊行をもって終了することとなる。しかし、本当の意味で終了したといえるのは、本報告書が評価を受けた段

階とと思っている。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで協力していただいた関係各位、諸団体に深い感謝を表し、本書および諸資料が地域史を解明する上で活用されることを念願したい。



道路工事中の唐松B遺跡

付表

土器観察表

図版番号	写真図版番号	出土遺構場所	器種	部位	時期	色調(表面)	特徴等
9-1	PL11-1	S801	鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	縄文RL横位→区画をなぞる沈線、内面横ミガキ。
9-2	PL11-2	S801	鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR3/2黒褐	縄文RL横位?→沈線、内面ミガキに近い横ナデ。
9-3	PL11-3	S801	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR2/3黒褐	縄文RL横位→総行沈線・U字状沈線、内面ミガキに近い横ナデ。
9-4		S801	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	縄文RL横位→縦沈線。
9-5		S801	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR7/4にぶい黄褐	縄文RL横位?→沈線、表面・内面横ミガキ。
9-6		S801	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR3/3暗赤褐	縄文RL斜位→U字状沈線。
9-7	PL11-4	S801・SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明褐	
9-8		S801	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	縄文RL横位→沈線、表面横ミガキ、内面横ナデ。
9-9	PL11-5	S801	鉢	底部	縄文中期?	7.5YR6/4にぶい黄	
12-1	PL11-6	S802	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR7/3にぶい黄褐	縄文RL横位→縄文→区画をなぞる沈線、内面口唇部ナデ。
12-2	PL11-7	S802	深鉢	口縁部	縄文中期?	10YR4/2灰黄褐	溝状口縁部、内面ミガキに近い横ナデ。
12-3		S802	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	5YR6/6橙	口縁部・表面・内面横ミガキ、口縁部貼付け。
12-4	PL11-9	S802	深鉢	口縁部→胴部	縄文後期初葉	10YR3/2黒褐	口唇部・内面横ナデ、胴部縦沈線で区画形成。総沈線→隆帯直下、横沈線。
12-5		S802	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	外面・口縁部部に黒色付着物あり。
12-6	PL11-8	S802	口縁部	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	縦沈線→横長横内沈線、内面ミガキに近い横ナデ。
12-7		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	縄文RL横位→平行沈線、内面ミガキ。
12-8		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	縄文RL横位→縦沈線。
12-9		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	縄文斜位→U字状沈線、内面若干黒色付着物あり。
12-10		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	縄文RL横位→縦沈線、内面ミガキ。
12-11		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR3/4明赤褐	縄文RL横位→縦沈線。
12-12		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR4/4黄	縄文RL横位→総行沈線・縦沈線。
12-13		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR4/6暗褐	斜行沈線→総行沈線→縦沈線、内面ミガキ。
12-14		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	縦沈線→横内区画?、内面横ナデ。
12-15		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR6/6橙	斜行する縦沈線、U字状区画沈線、内面黒色付着物あり。
12-16		S802	深鉢	胴部	縄文中期	7.5YR5/6明褐	
12-17		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	斜行沈線→縦沈線。
12-18		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	沈線による区画→斜行沈線、内面ナデ。
12-19		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	横状沈線・縄文→区画を沈線でなぞる。
12-20		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	斜行する矢羽状縦沈線、内面ナデ。
12-21		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	斜行する矢羽状縦沈線、内面下部黒色付着物あり。
12-22		S802	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	濁赤沈線。
12-23		S802	深鉢?	胴部→底部	縄文中期後葉	5YR6/6橙	貼付け隆帯→刻目隆帯→横沈線→縦沈線、内面黒色化。
13-1	PL11-13	S803	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR7/3にぶい黄褐	縄文RL横位→沈線、内面ミガキに近いナデ。
13-2	PL11-10	S803	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR6/4にぶい黄	巾1mmの条線、内面・口唇部横ナデ。
13-3		S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR3/4暗褐	表面若干黒色付着物あり、内面横ナデ。
13-4	PL11-11	S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/6橙	内面横ナデ、巾1mmの条線、条線切りなし。
13-5		S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR6/6明黄褐	巾1mm 横状沈線→縦沈線。
13-6		S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR4/4褐	巾1mmの条線。
13-7		S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR5/3にぶい黄褐	巾1mmの条線。
13-8		S803	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	巾1mmの条線。
13-9	PL11-12	S803	深鉢	胴部	縄文中期	10YR5/4にぶい黄褐	横状縦沈線?、粘土他縄文土器と異なる。
16-1	PL11-15	S806	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	横状沈線→縦沈線。
16-2	PL11-15	S806	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR2/2黒褐	斜行する矢羽状縦沈線。
16-3	PL11-14	S806	深鉢	胴部	縄文後期初葉	10YR6/4にぶい黄褐	縄文RL横位→横沈線、内面ミガキに近いナデ。
22-1	PL11-16	SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR3/3暗褐	斜行条線→縦沈線、内面若干黒色付着物あり、ミガキに近いナデ。
22-2	PL11-17	SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	斜行条線→縦沈線、内面黒色付着物あり、ミガキに近いナデ。
22-3		SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR3/2暗褐	斜行条線→縦沈線、内面ミガキに近いナデ。
22-4		SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR3/2暗褐	斜行条線→縦沈線、内面ミガキに近いナデ。
22-5		SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR4/6橙	内面下部黒色付着物あり、ミガキに近いナデ。
22-6	PL11-19	SK04	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	内面横ナデ。

図版 番号	写真図 版番号	出土遺構 ・場所	器種	部位	時期	色調(表面)	特徴等
22-7		SK08	深鉢	胴部	縄文中期後葉	2.5YR5/4黄褐	縄文LR 部位→沈澱。内面ミガキに近いナデ。
22-8		SK08	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	底沈澱文→羽状沈澱文。内面ミガキに近いナデ。
22-9	PL11-21	SK08	深鉢	口縁→胴部	縄文中期後葉	10YR3/2黒褐	溝帯文を取込んだ槽内区画→横状短沈澱文→区画をなせる沈澱。内面ミガキに近いナデ。
22-10	PL11-20	SK08	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR5/4にぶい黄褐	底沈澱→斜行条線ナデ。内面ミガキに近いナデ。
22-11		SK08	深鉢	胴部	縄文中期?	10YR7/4にぶい黄褐	表面→内面ミガキに近いナデ。
22-12	PL11-22	SK14	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR6/2灰黄褐	内面ミガキに近いナデ。底沈澱→口縁部横状沈澱。
22-13		SK14	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	5YR3/2暗赤褐	表面→内面→口唇部横ナデ。口縁部→黒色付着物あり。勾玉状区画。
22-14		SK14	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	5YR3/2黒褐	口唇部→外面ミガキに近いナデ。
22-15	PL11-23	SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	2.5YR5/6明赤褐	斜行沈澱文→羽状沈澱文?
22-16		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR3/3暗褐	縄文LR 部位。内面ミガキに近いナデ。
22-17		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR6/6褐	縄文LR 部位→底沈澱。
22-18	PL11-25	SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	2.5YR5/6明赤褐	横状沈澱→斜行沈澱文。内面ミガキに近いナデ。
22-19	PL11-24	SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	2.5YR5/9明赤褐	羽状沈澱文→U字状沈澱文。
22-20		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR6/6褐	羽状沈澱文→横状沈澱文。
22-21		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	2.5YR にぶい黄	縄文LR 部位→底沈澱文。内面ミガキに近いナデ。
22-22		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR4/4にぶい赤褐	縄文LR 部位?→沈澱。
22-23		SK14	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR6/6褐	縄文LR 部位。内面黒色化。ミガキに近いナデ。
22-24		SK16	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR6/4にぶい黄褐	口唇部→内面ミガキに近いナデ。斜り返し口縁。
22-25		SK16	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR6/6褐	縄文LR 部位→沈澱内面横ナデ。
22-26		SK16	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR7/6褐	貼付け溝帯文。
22-27	PL11-26	SK16	両耳壺	底	縄文中期後葉	10YR7/3にぶい黄褐	内面上部ミガキに近いナデ。
22-28	PL11-28	SK25	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR6/4にぶい黄褐	縄文LR 部位。
22-29		SK25	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR2/2黒褐	短沈澱文→槽内区画をなせる沈澱文。内面ミガキに近いナデ。
22-30	PL11-29	SK25	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR2/2黒褐	縄文LR 部位→横状沈澱文。口唇部ミガキに近いナデ。
22-31		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR7/6褐	縄文LR 部位。
22-32		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR4/3にぶい黄褐	縄文LR 部位→沈澱。内面ミガキに近いナデ。
22-33		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR2/1黒	縄文LR 部位→沈澱。内面ナデ。
22-34	PL11-30	SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR3/2黒褐	縄文LR 部位→沈澱。内面ミガキに近いナデ。
22-35	PL11-32	SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR4/3にぶい黄褐	縄文LR 部位→底沈澱。内面ミガキに近いナデ。
23-36		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR5/3にぶい黄褐	縄文LR 部位→底沈澱。沈澱部にミガキに近いナデ。内面ミガキに近いナデ。
23-37		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/6褐	縄文LR 部位→沈澱。内面ミガキに近いナデ。
23-38		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR6/4にぶい黄褐	縄文LR 部位→沈澱。
23-39	PL11-27	SK25	深鉢	胴部→底部	縄文中期後葉	7.5YR6/6褐	縄文LR 部位→U字状沈澱。
23-40		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR7/6褐	縄文LR 部位→底沈澱。
23-41		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/3にぶい黄	縄文LR 部位。
23-42		SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR6/4にぶい黄褐	縄文LR 部位→底沈澱。
23-43	PL11-31	SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR7/6褐	縄文LR →沈澱。表面溝帯等上と内面ミガキに近いナデ。
23-44	PL11-33	SK25	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	貼付け溝帯。横状沈澱文→槽内?区画。区画内に短沈澱文。
23-45		SK28	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR7/6褐	縄文LR 部位→沈澱。内面ミガキに近いナデ。
23-46		SK28	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR7/4にぶい黄褐	縄文LR 部位→底沈澱。表面沈澱横ナデ。内面ミガキに近いナデ。
23-47		SK28	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR4/4褐	槽内区画文→羽状沈澱文?
23-48		SK29	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR5/3にぶい黄褐	表面ナデ。内面口唇部ナデ。
23-49		SK29	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR5/6褐	短沈澱。
23-50		SK29	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR3/4暗褐	底沈澱→横状沈澱。表面沈澱部分に黒色付着物あり。
23-51		SK35	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR4/6褐	縄文LR 部位→底沈澱。内面ミガキに近いナデ。
23-52	PL11-34	SK35	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR5/6黄褐	短沈澱→矢羽状短沈澱。内面ナデ。
23-53	PL11-35	SK35	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/6褐	貼付け溝帯。勾玉状溝帯。最下部に横状短沈澱。内面ミガキに近いナデ。
23-54		SK35	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR5/6明黄褐	区画沈澱→横状短沈澱。
23-55		SK35	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4にぶい黄	溝帯基状沈澱?。内面ナデ。
23-56		SK35	深鉢	胴部	縄文中期	10YR4/2灰黄褐	表面→内面ナデ。色調。粘土とも他の縄文土器と異なる。
23-57		SK36	胴部	胴部	縄文中期後葉	10YR6/6明黄褐	隆帯→短沈澱→隆帯短沈澱。
23-58	PL11-36	SK36	胴部	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/6褐	隆帯→沈澱。最帯上ナデ。
24-1		J区	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR5/6黄褐	縄文LR 部位?→沈澱。表面胴部→内面ミガキに近いナデ。

図版 番号	写真図 版番号	出土遺構 ・場所	器種	部位	時期	色調(表面)	特徴等
24-2		①区	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR7/4Cにぶい黄	縦方向に貼付け、口縁部横ナデ。
24-3	PL12-1	①区	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR4/4褐	若干波状口縁、溝巻文を散見し、横 円区画、短状短線文→区画をなぞる 沈線、内面ミガキに近いナデ。
24-4		①区	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR6/4Cにぶい黄	平行する条線、内面横ナデ、口縁部 粗厚。
24-5		①区	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR4/6褐	横円区画?→短状線→区画をなぞる 沈線、波上口縁、口唇部ミガキに近い ナデ。
24-6		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR7/4Cにぶい黄褐	縄文 RL →区画をなぞる沈線、内面ミ ガキに近いナデ。
24-7		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR7/4Cにぶい黄褐	縄文 LR 部位→短状線、内面ミガキに 近いナデ。
24-8		①区・SB03	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/6褐	胴部平行沈線、斜行沈線文。
24-9		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	短状短沈線→区画をなぞる沈線。
24-10		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR6/6明黄褐	巾1mm 横状条線。
24-11		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR13/4暗褐	溝巻き文?
24-12		①区	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR3/4暗褐	短状短沈線。
24-13		①区	深鉢	底部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	断面黒色付貨物埋部。炭化粒及び有機 質の物を染込に透びている可能性大。 縄文 RL 横行→区画沈線、縄文 RL 縦 位→沈線、溝巻文分口唇部突出し、内 面ミガキに近いナデ。
24-14	PL12-3	埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR6/8褐	縄文 RL 縦位→溝巻き文、断面黒色付 貨物あり、口唇部ナデ。
24-15	PL12-5	埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	5YR6/4にぶい黄	縄文 RL 縦位→短状線、内面ナデ。
24-16		埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR6/8褐	縄文 RL 横位→横状線、縄文 RL 縦位 →短沈線、縄文→口縁部横沈線→溝 文が(能沈線か)、口唇部横ナデ。
24-17	PL12-2	埋残5	深鉢	口縁部→胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4Cにぶい黄	縄文 RL 横位→区画沈線、若干波状口 縁、内面ミガキに近いナデ。
24-18	PL12-4	埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR6/4Cにぶい黄褐	縄文 RL 斜位?→口唇部横沈線、内面 ミガキに近いナデ。
24-19		埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	10YR2/2黒褐	縦平行短沈線→区画?横状線。
24-20		埋残5	口縁部		縄文中期後葉	7.5YR6/8褐	縦平行短沈線→区画?横状線。
24-21		埋残5	深鉢	口縁部	縄文中期後葉	7.5YR5/6明褐	縦面→内面ミガキに近いナデ。
24-22		埋残5	深鉢	胴部	縄文中期	7.5YR5/8褐	内面ナデ。
24-23	PL12-7	埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR6/8褐	溝巻き文。
24-24		埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	短状短沈線→区画?をなぞる横状線。
24-25		埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR3/2暗赤褐	短状短沈線→区画沈線。
24-26	PL12-6	埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	5YR5/6明赤褐	短状短沈線→短状線、内面ナデ。
24-27		埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	10YR7/4Cにぶい黄褐	八字状沈線。
24-28		埋残5	深鉢	胴部	縄文中期後葉	7.5YR5/4Cにぶい黄	表面沈線工具による条線文。器底左側 條文→短状文、内面横ナデ。
26-1	PL12-5	SK01	壺	胴部	弥生中期初葉		巾2mm の条線文(棒状工具による)。 内面横ナデ。
26-2	PL12-4	SK02	壺	胴部	弥生中期初葉	10YR6/6明黄褐	巾2mm の斜行する条線文、左→中央 一右に扇形に條文、棒状工具を2本 束ねて施文、口唇部竹状工具(青)による 押圧。黒色付貨物あり。
26-3	PL12-2	SK02	壺	口縁部	弥生中期初葉	7.5YR7/4Cにぶい黄	口縁下に押圧帯を付ける、押圧巾6 mm、断面ワ字。隆部下2mm の条線 文、内面ナデ。
26-4	PL12-1	SK02	壺	口縁部	弥生中期初葉	10YR7/4Cにぶい黄褐	口縁下に押圧帯を付ける、押圧巾6 mm、断面ワ字。隆部下2mm の条線 文、内面ナデ。
26-5	PL12-3	SK02	壺	口縁部	弥生中期初葉	10YR7/2Cにぶい黄褐	内面黒色化。
29-1	PL12-2	SB04	土師器杯	口縁部→胴部	平安	7.5YR6/8褐	表面回転ナデ、内面回転ナデ、横ミガ キ。
29-2	PL12-3	SB04	土師器杯	口縁部	平安	7.5YR7/4Cにぶい黄	表面回転ナデ、内面横ミガキ、放射状 ミガキ。
29-3	PL12-4	SB04	内裏杯	口縁部→底部	平安	7.5YR7/8褐	表面回転ナデ、ケズリ、内面黒色処理。 底部回転糸切り。
29-4		SB04	土師器杯	底部	平安	7.5YR7/4Cにぶい黄	表面回転ナデ、底部回転ケズリ。
29-5	PL12-6	SB04	内裏杯	口縁部→胴部	平安	7.5YR6/8褐	表面回転ナデ、内面横ミガキ、放射状 ミガキ。
29-6	PL12-7	SB04	内裏杯	底部	平安	5YR6/6褐	表面回転ナデ、回転ケズリ、内面ミガ キ、底部回転糸切り。
29-7	PL12-5	SB04	内裏杯	口縁部→胴部	平安	7.5YR6/6褐	表面回転ナデ、内面回転ナデ、横ミガ キ、ミガキ方向不明。
29-8	PL12-8	SB04	内裏杯	口縁部→胴部	平安	7.5YR5/4Cにぶい黄	表面回転ナデ、内面横ミガキ、放射状 ミガキ。
29-9	PL12-9	SB04	内裏杯	底部	平安	10YR7/4Cにぶい黄褐	表面回転ナデ、内面不方向ミガキ。 底部回転ケズリ。
29-10	PL12-10	SB04	須恵器杯	口縁部→胴部	平安	10YR6/2黄褐	断面→内面回転ナデ。
29-11		SB04	須恵器杯	口縁部	平安	10YR6/1褐灰	表面→内面回転ナデ。
29-12	PL12-11	SB04	須恵器杯	口縁部	平安	10YR4/1暗灰	表面→内面回転ナデ。
29-13	PL12-1	SB04	土師器壺	口縁部→胴部	平安	7.5YR7/8褐	断面横ナデ→ケズリ、内面ナデ、底部 押しケズリ。
29-14	PL12-12	SB05	土師器杯	口縁部	平安	5YR6/6褐	表面回転ナデ、回転ケズリ、内面回転 ナデ。
	PL12-8	埋残5	壺	胴部	弥生中期	10YR6/6明黄褐	幅2mm の条線文(棒状工具による)、内 面横ナデ。
	PL12-9	①区	内耳土器		中世		

図版番号	写真図版番号	出土遺構・場所	器種	部位	時期	色調(表面)	特徴等
	PL12-10	攪乱4	内瓦土器		中世		
	PL12-11	攪乱5	内瓦土器		中世		

石器観察表

図版番号	写真図版番号	出土遺構・場所	器種	材質	残存状況		計測値				備考
					形態	残存状態	長さ (ミリ)	幅 (ミリ)	厚 (ミリ)	重量 (グラム)	
12-24	PL13-2	SB02	打製石斧	安山岩	短冊形	基部欠損	70.3	44.1	20.7	71.6	先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
12-25	PL13-4	SB02	打製石斧	安山岩	短冊形	刃部欠損	82.5	42.1	18.8	72.4	先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
12-26	PL13-1	SB02	打製石斧	凝灰質砂岩	—	基部・刃部欠損	95.1	63.9	11.5	62.7	先端部磨耗。
12-27	PL13-3	SB02	打製石斧	花崗雑岩	—	側面の断片	90.9	40.2	13.1	39.8	
15-4	PL13-6	SB06	打製石斧	無珪晶質安山岩	—	断片	54.7	61.1	16.1	60	打製石斧の一部か。
15-5	PL13-5	SB06	打製石斧	凝灰岩	—	断片	74.8	56.3	14.8	62.9	裏面に燧石化石あり。打製石斧の一部か。
16-6	PL13-14	SB06	削片	無珪晶質安山岩	削片	完形	62	46.7	10	19.9	打製石斧の削片か。
16-7	PL13-1	SB05	石槌	黒曜石	—	完形	45.8	43.7	43.5	80.1	
23-59	PL13-7	SK04	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	基部欠損	82.3	54.7	16.6	76.7	
23-60	PL13-8	SK04	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	完形	125	56.2	19	115.6	表面に自然面残る。先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
23-61	PL13-9	SK04	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	完形	154.2	52.9	17.8	138.8	先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
23-62	PL13-10	SK14	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	完形	110.2	47.6	18.7	103.1	側面と表面一部に自然面残る。先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
23-63	PL13-2	SK19	削片	黒曜石	縦長削片	束縛辺欠	33.6	16.1	7.2	3.4	表面に縁部を剥離あり。旧石器の可能性あり。
23-64	PL13-3	SK35	石槌	黒曜石	—	基部欠損	116.1	12.8	2.7	0.4	
25-29	PL13-11	①区(検出箇)	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	完形	121	55.4	16.7	125	表面一部磨耗か。
25-30	PL13-12	③区(検出箇)	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	基部部分欠	97.7	47.4	14.5	68.8	表面に自然面残る。先端・側面の剥離。磨耗なし。未使用か。
25-31	PL13-13	攪乱5	打製石斧	無珪晶質安山岩	短冊形	基部欠損	68	52.6	21	71.2	
25-32	PL13-16	攪乱5	削片	無珪晶質安山岩	—	断片	49.1	48.4	12.4	25.9	表面研削。側面ガジリ多い。
25-33	PL13-15	攪乱5	削片	無珪晶質安山岩	横長削片	縁辺部分欠	58	77.9	15.8	50.7	打製石斧の削片か。
25-34	PL13-4	①区(検出箇)	原石	黒曜石	邊内標	完形	60.2	34.4	28	58.5	
26-15	PL13-17	SB05	原石	安山岩	—	刃部部分欠損	182.4	58	50.1	687.6	側面磨耗。縁付あり。下部に打撃痕あり。

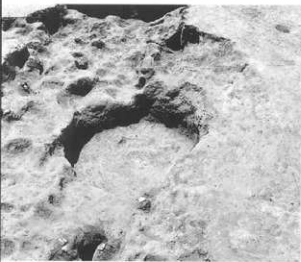
写真図版



調査区全景
南東上空より



調査区全景
曾根川方向より



左：SB 01 完掘
右：SB 01
遺物出土状況



左：SB 02 柱穴調査
右：SB 02 完掘



左：SB 02
炭化物出土状況
右：SB 02 炉完掘



左：SB 02 ビット 5
完掘
右：SB 03 完掘

左：SB 03 ビット 2
遺物出土状況
右：SB 04 完掘



左：SB 04 カマド完掘
右：SB 04 カマド
石出土状況



左：SB 05 完掘
右：②区検出風景



左：SB 06 完掘
右：②区全景





左：SB 06 炉完掘
右：SB 06 炉掘り方



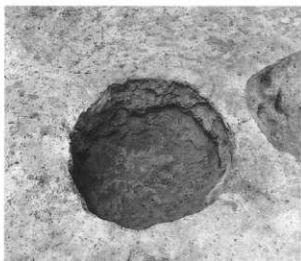
左：SB 06 ピット 6
完掘
右：ST 01 完掘



左：SK 01
遺物出土状況
右：SK 02 完掘



左：SK 02
遺物出土状況
右：SK 02 遺物精査



左：SK 04
遺物出土状況
右：SK 05 完掘



左：SK 06 完掘
右：SK 07 完掘



左：SK 05～07 完掘
右：SK 08 完掘



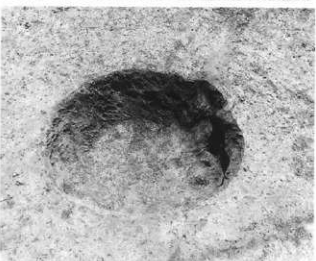
左：SK 09 完掘
右：SK 10 完掘



左：SK 10
坑底ビット断面
右：SK 10
坑底ビット完掘



左：SK 10 坑底ビット
調査風景
右：SK 11 完掘



左：SK 12 完掘
右：SK 13 完掘



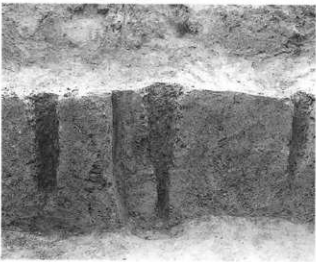
左：SK 14 完掘
右：SK 16 完掘



左：SK 17 完掘

右：SK 17

坑底ピット断面



左：SK 17

坑底ピット完掘

右：SK 18 完掘



左：SK 18 (陥し穴)

掘り下げ風景

右：SK 18 (陥し穴)

炭化物出土状況



左：SK 18

坑底ピット断面

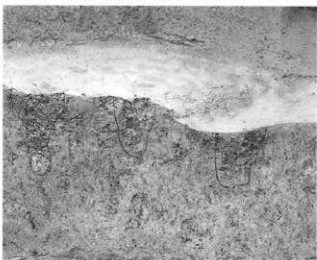
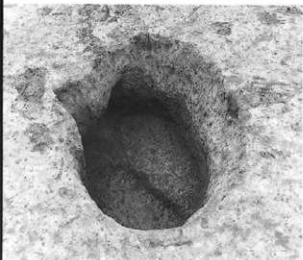
右：SK 18

坑底ピット完掘





左：SK 19 完掘
右：SK 20 完掘



左：SK 21 完掘
右：SK 21
坑底ピット断面



左：SK 22 完掘
右：SK 22
坑底ピット断面

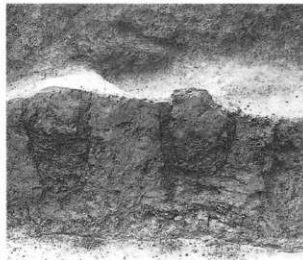


左：SK 22
坑底ピット完掘
右：SK 23 完掘

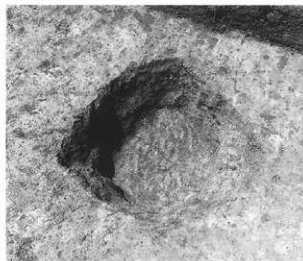
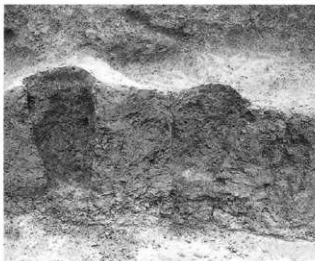
左：SK 23
坑底ピット断面
右：SK 23
坑底ピット完掘



左：SK 24・26 完掘
右：SK 24
坑底ピット断面

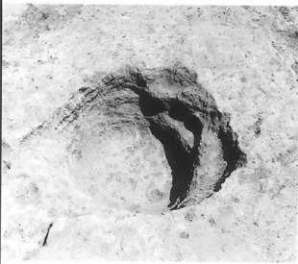


左：SK 24
坑底ピット完掘
右：SK 25 完掘



左：SK 25
遺物出土状況
右：SK 29 完掘





左：SK 31 完掘
右：SK 30 完掘



左：SK 36 完掘
右：SK 35・37 完掘



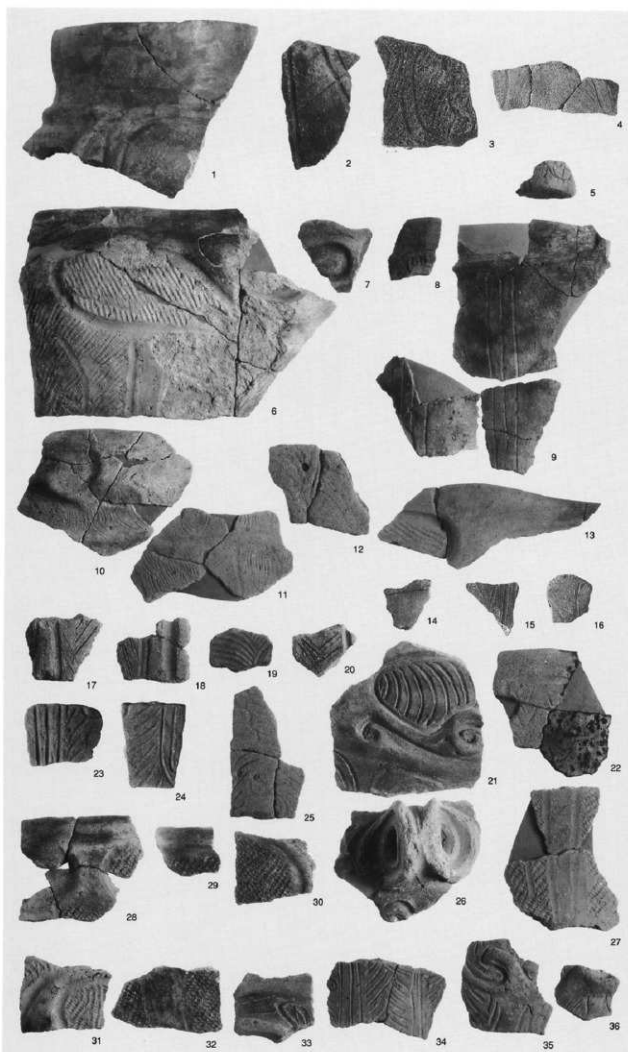
左：SK 38 完掘
右：SK 38
坑底ピット断面

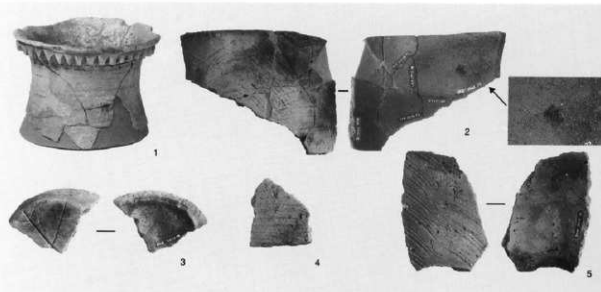


左：SK 40 完掘
右：SK 40
坑底ピット断面

縄文土器

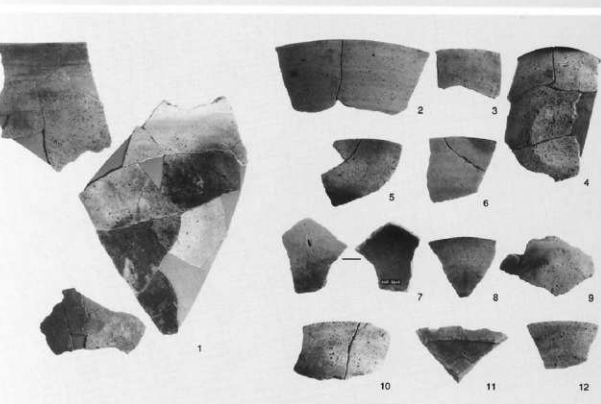
- 1~5 SB 01
 6~9 SB 02
 10~13 SB 03
 14~16 SB 06
 17~19 SK 04
 20・21 SK 08
 22~25 SK 14
 26 SK 16
 27~33 SK 25
 34・35 SK 35
 36 SK 36





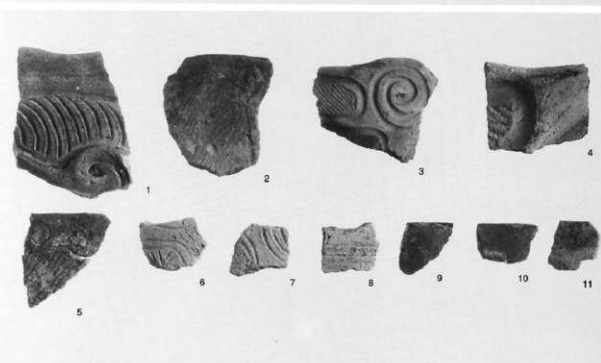
弥生土器

- 1-4 SK 02
 2 (拡大) 粉圧痕
 5 SK 01



平安土器

- 1-11 SB 04
 12 SB 05



遺構外出土

縄文土器

- 1 ㊦区
 2-7 攪乱 5

弥生土器

- 8 攪乱

内耳土器

- 9 ㊦区
 10 攪乱 4
 11 攪乱

石核

1 SB 06

剥片

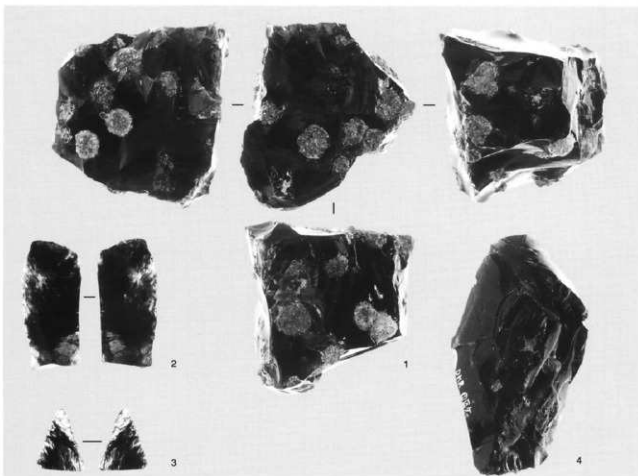
2 SK 19

石鏃

3 SK 35

原石

4 ①K



打製石斧

1~4 SB 02

5·6 SB 06

7~9 SK 04

10 SK 14

11 12 ①K

13 攪乱

剥片

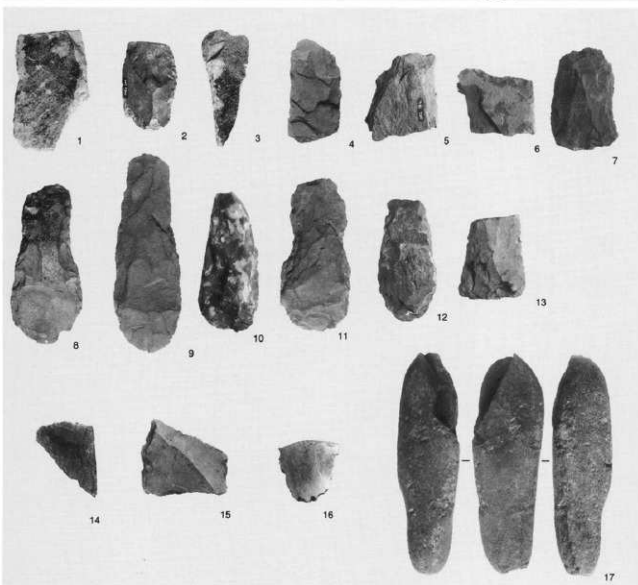
14 SB 06

15 攪乱 5

敲石

16 攪乱 5

17 SB 05



報告書抄録

ふりがな	ちほうどうろこうふきんぎょうむ しゅ かわかみさくせんまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしよーうすだちょうないー							
書名	地方道路交付金業務 (主) 川上佐久線埋蔵文化財発掘調査報告書—白田町内—							
副書名	唐松B遺跡							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	72							
編・著者名	河西克造							
編集機関名	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel026-293-5926							
発行年月日	2005年(平成17年)3月4日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
からまつびーいせき 唐松B遺跡	ながのけんみなみさくぐん 長野県南佐久郡 うすだまらおのおおがひらばやし 白田町大字平林 あがからまつ 字唐松	20301	130	36度 09分 21秒 (旧測地) 36度 09分 32秒 (新測地)	138度 29分 35秒 (旧測地) 138度 29分 23秒 (新測地)	2003年 5月6日 ～10月16日	5,000㎡	川上佐久線建設にともなう発掘調査
所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
唐松B遺跡	千曲川右岸の段丘上	集落	縄文時代中期	竪穴住居4、貯蔵穴12、土坑13	土器、石器	尾根頂部を中心に展開。西側調査区外に集落の中心が存在。		
		狩猟域	縄文時代	陥し穴12	土器	尾根頂部を中心に広範囲に展開。		
		散布地	縄文時代後期		土器			
		墓域	弥生時代中期	墓坑2	土器	尾根頂部に散在的に分布。		
		集落	平安時代以降	竪穴住居2、掘立柱建物1	土器、石器	南緩斜面に分布する小規模な集落。		
		散布地	中世		陶磁器			
			近世		陶磁器			

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 72

地方道路交付金業務(主)川上佐久線
埋蔵文化財発掘調査報告書

— 白田町内 —

鷹松 B 遺跡

発行 平成17年(2005)3月4日
発行者 長野県白田建設事務所
(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
E-mail maibun@grn.janis.or.jp
印刷 蔦友印刷株式会社
〒381-8511 長野県長野市平林280

